



JANES

Newsletter no. 22
2015

■ 巻頭言 「エチオピア国歌をめぐって」	柘植洋一	01
■ 学会報告		
第23回日本ナイル・エチオピア学会学術大会、公開シンポジウム報告		
「アフリカから＜老いの力＞を学ぶ ―老年文化の多様性―」	田川 玄	02
「アフリカから＜老いの力＞を学ぶにあたって」	田川 玄	04
「アフリカに高齢化の時代が忍び寄る」	増田 研	08
「ケニアのカリスマ老人アククとその周辺 ―彼の生きた時代とこれから―」	椎野若菜	11
「ケニア海岸地方ミジケンダ社会における＜長老力＞の両義性」	慶田勝彦	13
「村の王と大人になれない者たち ―コモロ諸島・ンガジジャ島における年齢と階梯制―」	花淵馨也	19
■ 最新レポート 「戦火の一年 ―南スーダンにおける内戦と和平の行方―」	村橋 勲	23
■ フィールド通信		
「バラザでのおしゃべりを日本の大学に」	菊地滋夫	35
「グンダグンド ―エチオピア・ティグライ州秘境の修道院―」	青島啓太	39
「エチオピア北部高地でのユーカリ木材の利用 ―ティグライ州エンバアラジェ郡における例―」	竹中浩一	43
「乾燥地の救世主となるか ―北部エチオピアにおけるサボテンの普及促進活動について―」	佐藤美穂	48
■ 第23回学術大会最優秀発表賞		
「エチオピア中央高原における持続型生存基盤としての犁農耕の可能性 ―テフ・ウシ・人関係に着目して―」	田中利和	53
■ 日本ナイル・エチオピア学会 高島賞		
第20回高島賞 審査結果報告		
受賞対象論文 Sayuri Yoshida. “The Struggle against Social Discrimination: Petitions by the Manjo in the Kafa and Sheka Zones of Southwest Ethiopia.”		57
第20回高島賞受賞によせて	吉田早悠里	59
■ 書評		
大場千景 著『無文字社会における歴史の生成と記憶の技法 ―口頭年代史を継承するエチオピア南部ボラナ社会―』	野口真理子	62
■ 新刊ライブラリー		
石原美奈子 編『せめぎあう宗教と国家 ―エチオピア 神々の相克と共生』	江端希之	67
内藤直樹・山北輝裕 編『社会的包摂／排除の人類学 ―開発・難民・福祉』	村橋 勲	68
宍戸健一 著『アフリカ紛争国スーダンの復興にかける ―復興支援 1500 日の記録』	村橋 勲	70
松田素二 編『アフリカ社会を学ぶ人のために』	吉田早悠里	72
ジェイコブ・J・アコル 著、小馬徹 訳『ライオンの咆哮のとどろく夜の炉辺で ―南スーダン、ディンカの昔話』	吉田早悠里	73
吉田早悠里 著『誰が差別をつくるのか ―エチオピアに生きるカファとマンジョの関係誌』	伊藤義将	74
高倉浩樹・曾我亨 著『シベリアとアフリカの遊牧民 ―極北と砂漠で家畜とともに暮らす』	泉 直亮	76
石山 俊・縄田浩志 編『アラブのなりわい生態系2 ナツメヤシ』	高村美也子	77
八塚春名 著『タンザニアのサンダウェ社会における環境利用と社会関係の変化 ―狩猟採集民社会の変容に関する考察』	角田さら麻	78
伊藤義将 著『コーヒーの森の民族生態誌 ―エチオピア南西部高地森林域における人と自然の関係』	石原美奈子	80
遠藤保子・相原進・高橋京子 編著『無形文化財の伝承・記録・教育 ―アフリカの舞踊を事例として』	川瀬 慈	82
石田 憲 著『ファシストの戦争 ―世界史的文脈で読むエチオピア戦争』	石川博樹	83
● 会員の異動		84
● 編集後記		85

 巻頭言

エチオピア国歌をめぐる

柘植洋一

1980年夏、クレムト（大雨期）のある日、エチオピアの子ども達の歌を録音しようと、数人の子ども達に声をかけた。マイクの周りに集まって彼らが歌い始めたのは、私が期待していた伝承された遊び歌やお祭りの歌ではなく、イサパアコ（エチオピア労働者党設立準備委員会のアムハラ語の略称）、赤旗、革命などの単語が満載の歌、さらにアムハラ語版の「インターナショナル」などであった。学校でこのような歌を繰り返し教えられていたのである。そのうちこの光景を見ていた年長の男が子ども達に何やら言って、「一、二、三」とかけ声をかけた。皆が歌い出したのは、「エチオピア、エチオピア、エチオピア、前進せよ」で始まり、「あなた（＝エチオピア）の敵たちは滅び、あなたが永遠に生きんことを！」という歌詞で終わる、1975年に作られた社会主義エチオピアの国歌であった。この曲はエチオピアの第2代目の国歌であり、その後1991年まで命脈を保った。

そこで、私は数年前までその地位にあった、以前の国歌を歌ってほしいと頼んだが、子ども達は歌わなかった。知らなかったのかも知れないし、知っていてももちろん歌えるような状況ではなかった。この国歌は、1930年ハイレセラシエ皇帝即位後に制定されたエチオピア初の国歌で、「我らが勝者たる皇帝が、我らの栄光のために命永からんことを！」という歌詞が示すように、全体に皇帝を讃える内容を持つ。作曲者はその後のエチオピア音楽の発展に大きな影響を与えたアルメニア出身のお雇い外国人 Kevork Nalbaldian であり、あのアベベ選手の表彰式で流れたのもこのメロディーである。

第3代目となる現在の国歌「前進せよ、愛する母なるエチオピアよ」は、社会主義体制の崩壊後、1992年に制定されたもので、連邦民主制の理念に則った内容の歌詞をもっている。

以上はいわば正真正銘の国歌であるが、そのほかにも括弧付きの「エチオピア国歌」ともいうべきものがある。その一つは、ジャマイカのバンド The Ethiopians のリーダー Leonard Dillon の手になる、Ethiopian National Anthem というそのものずばりの曲である。彼らの1977年発売のアルバムの1曲目をかざる、力強く、ラスタ的な思想に基づく宗教的な崇高ささえ感じさせる、優れた曲である。一方、関西圏を中心とする人気TV番組「探偵ナイトスクープ」では、実はエチオピアとは全く無関係の「エチオピア国歌」が取り上げられた。これは、「オーロベッチャン オーローヤ、オーロベッチャン サルポニタン……」という摩訶不思議な歌詞を持つ曲だが、リサーチの結果は、ある種のサークル内で歌い継がれた意味無しの歌であるが、いつ頃どこで作られたのか、また何故「エチオピア国歌」という名前がついているのかも分からないとのことであった、と記憶する。

最後は謎の「エチオピア国歌」である。この曲は、日本で1969年に出版された『世界の旅6 アフリカ』（河出書房）という本の付録のレコードのB面に、「コンゴ国歌」「ケニア国民歌」とともに、「エチオピア国歌」として収められており、本には楽譜も載せられている。年代的には、当然先に挙げた帝政期の国歌であるはずだ。しかしながら、演奏されているのは全く別の曲なのである。当時の東アフリカの他の国の国歌かも知れないが、今のところ私には正体不明のままである。

エチオピアでは政体の交替にともなって3つの国歌が生まれ、うち2つは公的な場面から消えた。2020年東京オリンピックでエチオピア人の優勝者を讃える際には、現行の国歌が流れるのだろうか。それとも別の曲なのか？ また歌詞はこれまではエチオピアの公用語あるいは中央政府の作業語としての地位を持つアムハラ語であったが、ひょっとして別の言語が取って代わっているのだろうか。

（つげ よういち／金沢大学名誉教授）



第23回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 公開シンポジウム報告

アフリカから＜老いの力＞を学ぶ —老年文化の多様性—

日本ナイル・エチオピア学会第23回学術大会は、2013年4月19日（土）、20日（日）の二日にわたり、広島市まちづくり市民交流プラザにおいて開かれました。第一日目の19日に「アフリカから＜老いの力＞を学ぶ—老年文化の多様性—」と題して、公開シンポジウムが執り行われました。シンポジウムのプログラムは次のとおりです。

「アフリカから＜老いの力＞を学ぶ

—老年文化の多様性—

2014年4月19日 会場 広島市まちづくり市民交流プラザ マルチメディアスタジオ

14:00-14:20 田川 玄 広島市立大学国際学部

趣旨説明 アフリカから＜老いの力＞を学ぶにあたって

14:25-15:00 増田 研 長崎大学大学院国際健康開発研究科

アフリカに高齢化の時代が忍び寄る

15:05-15:40 椎野若菜 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

ケニアのカリスマ老人アククとその周辺

15:50-16:25 慶田勝彦 熊本大学文学部

ケニア海岸地方ミジケンダ社会における＜長老力＞の両義性

発表タイトル

- 「アフリカに高齢化の時代が忍び寄る」 増田 研（長崎大学）
- 「ケニアのカリスマ老人アククとその周辺」 椎野若菜（東京外国語大学）
- 「ケニア海岸地方ミジケンダ社会における＜長老力＞の両義性」 慶田勝彦（熊本大学）
- 「村の王と大人になれない若たち」
- 「コモロ諸島・ンガジジャ島における年齢と階級制」 花岡啓也（北海道医療大学）

第23回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 公開シンポジウム
2014年4月19日(土)
14:00~17:30 (開場13:30~)
 【会場】広島市まちづくり市民交流プラザ北棟6階マルチメディアスタジオ（広島市中区保町6-36）
 【主催】日本ナイル・エチオピア学会

参加無料 申込不要
 ※先着 80名様

シンポジウムのフライヤーデザイン

16:30-17:05 花渕馨也 北海道医療大学看護福祉学部

村の王と大人になれない者たち—コモロ諸島ンガジジャ島における年齢と階梯制—

17:10-17:30 質疑応答

なお、本シンポジウムを開催するにあたり、共催として次の団体にご協力いただきました。

広島市立大学／JSPS 科学研究費基盤 (B)「グローバル化するアフリカの＜老いの力＞の生成と変容—宗教儀礼領域からの接近」／「東アフリカにおける「早すぎる高齢化」とケアの多様性をめぐる学際的研究」／日本アフリカ学会中国四国支部



シンポジウム会場（石川博樹会員撮影）

また、本シンポジウムと関連して、「広島でアフリカの＜老いの力＞を見る」と題して、特定非営利法人「アフリック・アフリカ」からの写真提供を受けて、市内三箇所にて巡回写真展を行いました。

開催場所と期間、共催団体は次の通りです。

巡回写真展「広島でアフリカの＜老いの力＞を見る」

2014年3月18日（火）～3月30日（日）：広島市留学生会館交流ラウンジ

3月31日（月）～4月10日（木）：広島市立大学語学センターラウンジ

4月17日（木）～4月20日（日）：広島市まちづくり市民交流プラザ南棟1階展示コーナー

共催：JSPS 科研基盤 (B)「グローバル化するアフリカにおける＜老いの力＞の生成と変容」／日本アフリカ学会中国四国支部／特定非営利法人 アフリック・アフリカ



（たがわ げん／広島市立大学）

広島市留学生会館交流ラウンジでの写真

アフリカから＜老いの力＞を学ぶにあたって

田川 玄（広島市立大学）

現代日本の「老い」の否定性

現代の日本では、「老人」は65歳以上の人を指す「高齢者」という用語に置き換えて語られる。「老人」たちは、社会制度に結びついている「高齢者」というカテゴリーのなかで生きなくてはならないが、その社会制度においては、少子高齢化という人口構造の変化がもたらす介護、年金、医療などの社会保障の負担増大が深刻な政治経済問題とされている。また、「老いること」は身体的精神的な衰退や喪失とされ、美容や医療におけるアンチ・エイジングの技術が追求されている。

人類にとって「老いること」は普遍的な現象である。老境に達することは人生の偉業であり、周囲の人びとから祝福されることがらであった。ところが、現代社会では人びとは「老い」をできるかぎり隠し、抗い、克服すべきものとして見なす。それは、私たちの「老い」の経験を難しくしている。

本シンポジウムでは、このような現代社会の「老い」の否定性を相対化し、多様な「老い」の可能性を示すためにアフリカの老人たちに注目し、「老いること」が単なる衰退や喪失ではなくむしろ何らかの「力」を生むことを明らかにしたい。



アフリカの「高齢者問題」

2002年にマドリッドで開催された第二回高齢者問題世界会議で採択された国際行動計画では、21世紀前半に開発途上地域において急激な高齢化がおきることが指摘され、開発と人口高齢化の問題が優先課題の一つとして取り上げられた（UN 2002）。今や、世界における「高齢者」人口の増加は、国連機関や国際NGOによって地球規模の課題とされ、それはすでに高齢社会となった「先進地域」に限定されるものではなく、将来的には「開発途上地域」においても生じる問題とされている。

開発途上地域のなかでもアフリカは、アジアやラテンアメリカといった地域と比較して総人口に対する高齢者人口の比率は高くはない。しかし、アフリカにおいても地域内部の差異はあるものの、将来的には高齢者人口が増加することは指摘されている。国家による社会保障が十分に整備されていないアフリカなどの開発途上地域において、近代化によって老人の社会的地位が低下するだけでなく、都市化や家族の小規模化が親族を基盤としてこれまで行われてきた老人へのサポートが失われることが危惧されている（UN 2002）。

しかしながら、開発途上地域の高齢者をめぐる社会問題の先取りは、すでに高齢化を遂げた先進地域をもとにしていることに注意しなくてはならないだろう（Aboderin 2006: 37）。つまり、開発途上地域が開発・近代化されることによって高齢化社会となり、先進地域と同一の軌跡を辿り、同様の社会問題が生じるという前提によって議論されているということである。

本シンポジウムの発表において増田が言及するように、アフリカの大部分の地域には、「高齢化先進地域」が制度的に構築する「高齢者」は存在するとはいえない。アフリカの多くの国家では、公的な制度が未整備であり、また、暦年齢ではなくローカルな年齢秩序が存在するがゆえに、老人たちは「高齢者」とは異なる老いを経験している。

それは、アフリカが「近代」ではないということではない。アフリカにおける近代について、伝統／近代、都市／村落の境界の溶解やグローバルな家族ネットワークの拡大が指摘されている。そうであれば、いち早く近代化し「高齢化」を遂げた社会の「高齢者問題」とは別の老年社会学の想定しない多元的な「老い」が、アフリカに出現しているともいえよう。本シンポジウムにおいて取り上げるアフリカの老いとはいったいどのようなものであろうか。

アフリカの＜老いの力＞の生成

アフリカの諸社会において、老人のもつ権威である＜老いの力＞は、家畜や土地の所有、一夫多妻的な家父長的な権力にもとづくだけでなく、年齢階梯制度、呪詛と祝福などの宗教的実践、慣習法や儀礼方法などの知識によって生成するものである。つまり、アフリカ諸社会における＜老いの力＞とは、下位世代に対する経済的・政治的だけでなく、宗教的・儀礼的あるいは呪詛的で霊的な優位さであるといえる。

本シンポジウムにおいて、発表者の花渕が描き出すインド洋のコモロ諸島・ンガジジャ島のアンダと呼ばれる階梯制では、多大な出費によって儀礼を執り行い年長階梯に達することは男性として大きな名誉であり、年少階梯に対して大きな威信をもつ。

また、ケニア海岸地方のドゥルマ社会では、老人が畏敬される存在であることは疑う余地のない命題であるが、その命題がほころびなく維持されているのは、老人がもつといわれる呪詛の力があるからだという（浜本 1995）。一方、エチオピアとケニアに居住するボラナ社会では、老人の祝福は日々繰り返し行われ将来の不幸を防ぐための福因となっている（田川 2014）。このような宗教儀礼領域の力は両義的であり、様々な形で老人と若者の世代双方によって経験され＜老いの力＞が形成されている。

こうした老いの優位性は、社会内部の紛争調停において発揮されるだけでなく、特定の民族・社会をこえた価値としても認められる。このため、現在でも民族紛争の和解の会合において老人が主導的な役割を果たすこともある。

ただし、ここでのべる老人の権威とは、しばしばかつての老年人類学によって近代産業社会に対する文化批判として示された「伝統社会の権威ある老人」という本質主義的な像ではない。むしろ、そうしたイメージを再考するために、アフリカにおける多元的な近代の老いの検討に先立ち、ローカルな社会の老いの歴史性について検討を加える必要がある。

例えば、ケニアの牧畜民サンプルについて、スペンサー（Spencer 1965）は年齢階梯制度によって長老である既婚者が政治的権力を保持する長老制社会として描き出したが、それに対して、シンプソン（Simpson 1998）は、「長老」が植民地行政と結びつき戦士階梯のモランを抑圧し自らの権力を強化したことを指摘している。



写真1 ボラナの年齢階梯制度の最終儀礼

このように＜老いの力＞を単純に伝統的な権威として捉えることなく、歴史的な文脈において理解する必要がある。本シンポジウムにおいても、椎野が取り上げるケニアの「カリスマ老人」が、伝統的な価値である豊饒性を彼独自のやり方で過剰なまでに体現することができたことも、植民地期から独立に至るケニアの歴史的な文脈を無視しては理解することはできないであろう。

グローバル化したアフリカの＜老いの力＞の変容

アフリカにおける近年のグローバル化による社会変化は、新たな＜老いの力＞の回路を開いている。

こうした変化は、開発や援助というグローバル空間にローカルな社会が接合する局面から見ることができる。佐川（2010）の調査したエチオピア南西部国境地帯のダサネッチの村付近では、エチオピア北部人資本によってトウモロコシ栽培の大規模な商業農場が建設されるに際して、長老階梯は「地域の伝統的権威」である代表者としての役割を与えられた。ところが、長老階梯が開発者によって懐柔され農場建設に協力したために、年少階梯が反発し、長老階梯の権威が揺らぐという事態が生じている（佐川 2010）。

その逆に、災害援助の局面では、援助団体は乳幼児と同じく老人は優先援助の対象と見なし、ケアが必要な社会的弱者として老人を扱う。例えば、世界 65 カ国で活動する国際 NGO である HelpAge International は、老人を社会的弱者として扱っており、「老人がその権利を主張し、差別に異議申し立てを行い、貧困に打ち勝つことを援助する」団体として、アフリカにおいても 9 カ国で活動を行っている（<http://www.helpage.org>）。老人がグローバル空間とローカルな社会の境界にあり、そこでは「権威者」「代表者」と「弱者」「周縁」という両極の意味づけが老人に与えられているのである。

また、ケニア海岸地方のギリアマ社会では、1960 年代に若者の経済的上昇とともに長老の権威が低下していたが（Parkin 1972）、近年になり長老の力の源泉とされる儀礼地がユネスコの世界遺産に登録されることにともない、長老の権威が高まっているという（慶田 2010）。かつて長老の権威を否定した若者が今では長老となり、グローバル空間の外部エージェントとの結びつきと土地とのスピリチュアルな結びつきにより、＜老いの力＞を新たに作り出しているのである（慶田 2010）。しかし、同時にシンポジウムにおける慶田の発表にあるように、正当な力の行使者であるはずの老人が、若者から反社会的な妖術師として訴えられはじめているという。この現象は、これまでローカルな文脈で効力を発揮していた呪詛の力が、グローバル化による世代関係の秩序が解体と「脱埋め込み化」（ギデンズ 1993）により新たにグローバル空間に移植された結果として解釈することもできるかもしれない。

これらの例は、ローカルな社会がグローバル空間に接合されることにより、＜老いの力＞が変容していることを示す。こうした変容は、上述のように社会関係の中でも特に世代関係に生じる。新自由主義経済や「政治の自由化」をとまなうグローバル化は、宗教儀礼領域を介して＜老いの力＞の新たな回路を開き、ローカルな老人と若者の世代関係を作りかえるのである。

アフリカの多様な老いの可能性を語る

アフリカにおいて＜老いの力＞がどのように構築されているのかについて、四人の発表



写真 2 HelpAge International のエチオピアの地方事務所
（オロミア州ボラナ県ヤベロ）

者の内容のごく一部に言及しつつ、本シンポジウムの趣旨を述べてきた。

シンポジウムでは、はじめに増田が予想されるアフリカの人口高齢化のプロセスについて説明しアフリカの高齢化研究をまとめたうえで、文化人類学的な高齢者研究の方向性を示す。

その後、三名の発表者が長年調査してきた東アフリカの社会を取り上げ、〈老いの力〉の民族誌的な報告を行う。三つの社会とは、慶田がケニア海岸部のギリアマ社会、椎野がケニア西部のルオ社会、花渕がインド洋コモロ諸島ンガジジャ島である。

椎野は、ケニアのマスメディアで取り上げられるほどの有名人で 500 名の子どもと 1,000 名の孫をもつといわれているアククというスーパー老人の人生から、過剰ともいえる一夫多妻的豊饒性がどのように成立していたのか明らかにしたうえで、法的に一夫多妻制を公認したケニアにおける長老パワーの行方について考える。

慶田は、ケニアの海岸地方のギリアマ社会の〈長老力〉には守護力と破壊力という両義性があり、見るものによって〈長老力〉が正反対のものとして立ち現れることを、ギリアマ社会の儀礼地のユネスコによる世界遺産登録とその儀礼地の守護者であった長老の殺害事件から明らかにしている。

花渕は、コモロ諸島・ンガジジャ島社会で男性の〈老いの力〉を規定する階梯制度に、フランスで経済的に成功した若い世代が帰還・参入するなどのグローバル化の影響によって、集団的な平等性と個人的な競争性という二つの原理が現れ、階梯制度が変化していることについて明らかにする。

アフリカにおいて、どのようにローカルな〈老いの力〉が生成されてきたのかを示すだけでなく、近年のグローバル化という局面において新たに発揮されはじめた〈老いの力〉を明らかにすることによって、〈老いの力〉がダイナミックに変容していることを本シンポジウムで明らかにしていく。それにより、現代日本の老いのあり方を相対化し、多様な老いのあり方の可能性を提示していきたい。

参考文献

- Aboderin, I. (2006), *Intergenerational Support and Old Age in Africa*. Transaction Publishers.
- Parkin, D. (1972), *Palms, Wine and Witness: Public Spirit and Private Gain in an African Farming Community*. Intertext.
- Simpson, G.L. (1998), 'Gerontocrats and Colonial Alliance,' In *The Politics of Age and Gerontocracy in Africa*, pp.65-98, Africa World Press.
- Spencer, P. (1965), *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*, Routledge & Kegan Paul.
- United Nations (2002), 'Madrid International Plan of Action on Ageing, 2002,' In *Report of the 2nd World Assembly on Ageing*. (<http://www.un.org/esa/socdev/ageing/madrid.intplanaction.html>. 2010 年 10 月 15 日アクセス.)
- ギデンズ (1993), 『近代とはいかなる時代か? モダニティの帰結』而立書房.
- 慶田勝彦 (2010), 「スピリチュアルな空間としての世界遺産——ケニア海岸地方・ミジケンダの聖なるカヤの森林」『宗教の人類学』吉田匡興・石井美保・花渕馨也編, pp. 239-271, 春風社.
- 佐川 徹 (2010), 「大規模開発プロジェクトと周縁社会: エチオピア西南部のダム/農場建設と地域住民の初期対応」Kyoto Working Papers on Area Studies No.101.
- 田川 玄 (2014), 「福因と災因——ボラナ・オロモの宗教概念と実践」石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家——エチオピア 神々の相克と共生』, pp. 199-238, 風響社.
- 浜本 満 (1995), 「ドゥルマ社会の老人: 権威と呪詛」長島信弘他編著『社会規範』, pp. 445-464, 藤原書店.

参照ウェブサイト

Help Age International (<http://www.helppage.org>, 2014 年 12 月 5 日アクセス)

(たがわ げん)

アフリカに高齢化の時代が忍び寄る

増田 研（長崎大学）

社会の高齢化とどう向き合うのか

人口高齢化は国際社会の関心事である。国連人口基金（UNFPA）は2012年に『21世紀の高齢化：祝福すべき成果と直面する課題』と題するレポートを発表し、国際社会が取り組むべき課題を検討している。アジア太平洋人口開発会議は2013年に開催された第6回大会において人口高齢化を主要議題とした。ポスト・ミレニアム開発目標には、高齢化と生活習慣病対策が盛り込まれる可能性がある。

アフリカは今世紀末までに、現在の日本と同じような高齢化の時代を迎える。この未来予測はほぼ間違いのない「未来の事実」だとされている。この報告では、アフリカにおける社会の高齢化がどのようにもたらされるのか、それを国際保健の観点から解き明かし、その未来予測に基づいてどのようなアフリカ社会の未来像を描くことが出来るかということを考えてい。

私がアフリカ社会の高齢化に関心を寄せるのには大きく二つの理由がある。第一に、高齢者、あるいは長老は、社会のキーパーソンであり、社会構造と人々の生を理解するための鍵を提供してくれる存在である。数少ないお年寄りが人々から尊敬され、持てるだけの智慧を若い世代に伝達することで社会の再生産に寄与する、という多少なりとも牧歌的な高齢者像は、果たして将来どのように変わるのであろうか。

日本の高齢社会白書（平成25年度版）においては、現在の高齢者をめぐる論点として家族構成（独居か、家族同居か）、年金をはじめとした社会保障給付費、介護、社会参加といった点が記述されている。高齢者のウェル・ビーイング（良き生）をめぐってこうした諸点が論じられることは当然であるし、介護保険制度をはじめとする政策課題が重要であることは言うまでもない。では、同じことがアフリカ各国で起きるとしたら、それはどのような形でのことだろうか。それが、私がこの問題に関心を寄せる第二の観点である。

アフリカにおいて、公衆衛生的な観点から高齢者問題にアプローチすることはなかなか難しい。高齢者の生活に関する基礎的な資料が不足していることやその文化的多様性が把握されていないことも、そうしたアプローチの障害となっているが、なによりもまず「誰を高

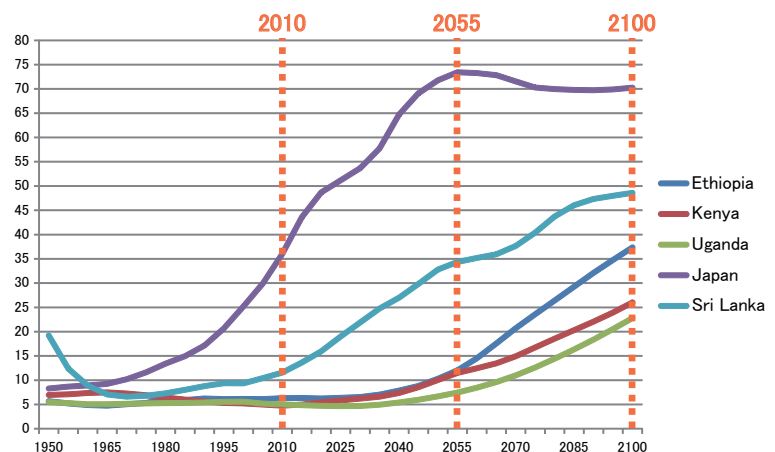


図1 老年従属指数の予測
(日本、スリランカ、エチオピア、ケニア、ウガンダ)

「年齢とするか」がはっきりしないことが大きい。例えば、私がフィールドとしてきたエチオピア南部のバンナでは、自らの生年月日を把握している人はいまでもほとんどいない。日本のように「65 歳以上の人を高齢者と呼ぶ」という規定があったとしても、本人が自分の年齢を知らないのでは政策的に空振りとなる。

ちなみに、世界全体を見渡してみると、いわゆる平均寿命が短い国での 60 歳以上の人口比率は 5% ほどである。国際機関が発表する人口統計の数値によれば、ケニアもエチオピアも、人口ピラミッドの上から 5% はおおむね 60 歳のあたりをラインとするから、数値的にはこの年齢より上の人々を高齢者と呼んで差し支えないように思われる。ただし、この「5% ルール」を適用すると、日本の場合、上位 5% 年齢ラインは 81 歳となってしまう。

少子高齢化が進むメカニズム

社会の高齢化は、社会の少子化と一体となって進行する。つまり若い世代の人口比率が低下することで、高齢者の人口比率が相対的に高まるのである。一般に、保健や医療が浸透することによって出産時の乳児死亡率や 5 歳未満児死亡率は低下する。いわゆる平均寿命を下げるのはこの乳幼児の死亡であり、例えば江戸末期の日本の平均寿命は 40 歳代だとされるが、これは乳幼児の死亡率が高かったためであり、長寿を全うする人も多くいたのである。

この 10 年あまり、アフリカでは乳幼児の死亡率が劇的に低下したが、それをもたらしたのは国連のミレニアム開発目標（MDGs）と、それに則った国際的な取り組みであろう。MDGs による妊産婦保健やワクチン接種、感染症対策などにより、乳幼児死亡率は低下した。それまでのアフリカが「多産多死」の社会だったとするなら、近年はそれが「多産少死」の社会に切り替わってきたのである。子供のうちに感染症でたくさん死んでしまう社会から、大人になって非感染症（NCDs、生活習慣病）で死ぬ社会への変化を、「疫学転換」という。

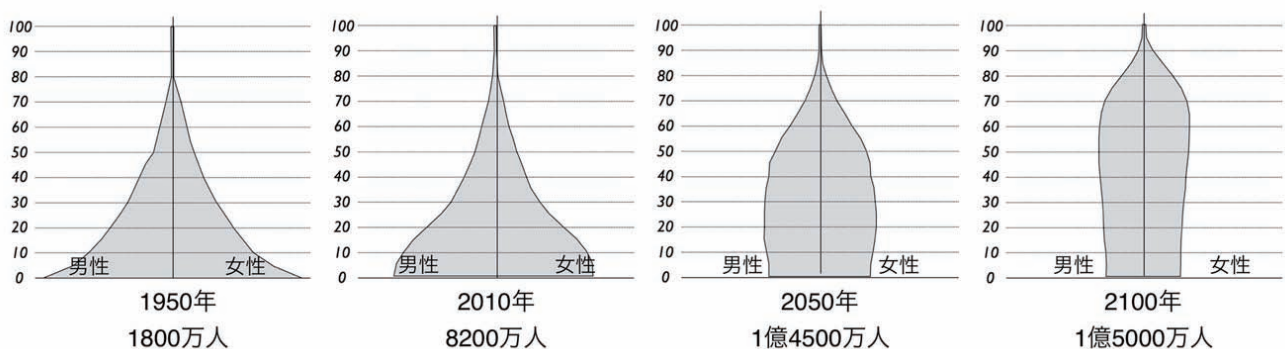


図2 エチオピアの人口ピラミッドの推移（1950-2100年）

(<http://populationpyramid.net/> のデータより増田作成)

疫学転換が進むと、次にやってくるのは「人口転換」、すなわち「多産」から「少産」への変化である。人口転換がもっとも急速に進んだ社会のひとつは日本であろう。日本の合計特殊出生率（一人の女性が生涯に生む子供の数の平均）は 1950 年の 4 人から 1960 年の 2 人へと、たった 10 年間で大きく下落した。そのため人口ピラミッドは「富士山型」から「壺型」へと輪郭を大きく変えたのだ。同じことがアフリカで起きると予測されているのだが、アフリカにおける「疫学転換」から「人口転換」への移行は日本ほど急速ではない。

「多産多死」から「少産少死」への移行期間には「多産少死」の時期がしばらく続くとされる。この期間を「人口モメンタム」と呼ぶが、現在のアフリカはまさにこの人口モメンタムの時期にあたっている。つまり、以前ほど子供が死なないことが分かっているが、子供が相変わらずたくさん産まれているという状況である。この「たくさん生まれた子供たち」が、数年後には「たくさん生産者」になり、やがて「たくさんのお年寄り」になるのである。これがすなわち、今世紀後半に到来すると予測されるアフリカ社会の高齢化である。

現在の予測（国連 World Population Prospects: The 2012 Revision）では、2050年のケニアとエチオピアの65歳以上人口比率は6～7%とそれほど高くはないが、すでに人口ピラミッドの富士山型は崩れてきていて若年人口の減少傾向がはっきり出てくる。この数値が2100年にはエチオピアで23%、ケニアでも16%となり、現在の日本と同水準になるのだ（2010年の日本の高齢者比率は21%である）。

社会環境がく老いの力を決める

ここまでは、予測された数値に基づいた背景の説明である。示された数値は国家を単位としており、人口高齢化そのものは「グローバル」な課題として、国際社会が取り組む問題であるかのように説明されてきた。こうした説明はしかし、く老いの力を考える上では背景にすぎない。

アフリカにおける高齢化問題は、都市部と村落部の差を考慮に入れないと成立しない。そのうえ各国内の文化的多様性、社会環境の多様性という視点を導入することも不可欠となる。例えばケニアの首都ナイロビでは合計特殊出生率は「3」以下まで下落しているが、ソマリ民族が多く住む北東部ではその数値は「7」である。教育、経済、価値観といった社会環境の違いが出生数の差に表れてくる。国家単位の統計データはあくまでも「均等にならされた数値」にすぎないのだ。

これまでに行われてきた諸研究では、次のようなことが一般に言えるという。(1) アフリカでは高齢者は農村部に多い、(2) 高齢者は子どものうちの1人かあるいは配偶者とのみ居住する傾向がある、(3) 村落部の高齢者は生活のために働く傾向がある、(4) 多くが何らかの病気を患っているがそれらは予防可能なものである、(5) 若い世代の間には、年寄りを敬わない価値観が広がりつつある、(6) 年金などの受給は男性の側に大きく傾く、(7) 社会経済環境の低下と健康状態の悪化は相関している（Aboderine 2010:405-419）。

こうした一般化された結果は、将来的には国家単位での政策策定に寄与するであろうが、私のような人類学者が関心をもつのはむしろ、多様な社会環境下における高齢者の生活とケアの多様性のほうである。ましてやグローバル化の進行によって「つながり」が大きく変化する現在、高齢者の生活を取りまく社会環境は激変にさらされているかもしれない。人類学的なアプローチはそうした社会のあり方をミクロなレベルにおいて捉え直し、国家単位で決められるケアのあり方に一石を投じる可能性を秘めているのだ。

参考文献

Aboderine, I. (2010), 'Global Ageing: Perspectives from Sub-Saharan Africa.' In *SAGE Handbook of Social Gerontology*, pp. 405-419, SAGE Publications.

United Nations, Department of Economics and Social Affairs, Population Division, (2013), *World Population Prospects: The 2012 Revision, United Nations*. (<http://esa.un.org/wpp/index.htm>)

United Nations Population Fund and HelpAge International, (2012), *Ageing in the Twenty-First Century: A Celebration and A Challenge*, UNFPA and HelpAge International. (<http://www.unfpa.org/sites/default/files/pub-pdf/Ageing%20report.pdf>)

(ますだ けん)

ほうは農耕が中心でこれといった換金作物もない。貨幣経済の浸透した現代において、この漁ができる地域と紅茶の栽培に適した高原との間にある内陸部は現金獲得の難しい地域である。

ダラ内の秩序と長老の役割

一夫多妻でその子どもたち、孫まで抱えるダラ内の人口が多くなると、秩序を保つ方策が必要となる。ルオでは、ドゥオン（*duong*’ 序列）の概念（出生順位、婚入順位に従い物事を行なう、先代に倣って物事を行なうこと）や「ルオのやり方」、すなわち、〇〇しなければならない（*chik*）、〇〇してはならない（*kwer*）、性、場所にかんする禁忌など、ジェンダーによる分業が細かく存在する。またダラ内の上方、下方、左右、といった方角とドゥオンに基づいた家屋の配置や埋葬位置なども決められている。

もしこういったさまざまな「ルオのやり方」とよばれる一連の慣習に違反をするとチラ（*chira*）という不幸がおとずれると考えられている。チラはダラ成員の不運や健康不良を招き、最も深刻な場合には死をもたらし。あらゆる経験を経て知識のある長老の大きな役割は、ルオのやり方にたいし違反を起こした者が不幸を恐れ、あるいは不幸が起きてから、その対処法を相談しに来た際に解決策をともに考え、アドバイスすることである。

Akuku (1917 ~ 2010) の場合

アククは植民地期にインド人にテイラーとして訓練を受け、植民地政府の軍服等もつくっていたという。1963年の独立後にテイラーとして開業し、新しい物好きで村で「初めて」のものをよく導入、実践した。彼はアフリカ人男性が装わない、白人男性のサファリストイルの半パンに、首元にはスカーフをあしらひ、ヘアスタイルも珍しい七三分けだった。たくさんの女性を魅了し口説き、妻をふやした。村々をつなぐ接点に設けられたマーケットエリアでは、彼はテイラーの店だけでなく、積極的にキオスクや安食堂（ホテリ）等も営むようになった。新しいものといえば村で、棺を使って埋葬をしたのも彼が最初だとも聞いた。かなりの老年になってからもそのスタイルはつづき、青空マーケットが開かれる際はカラフルな傘を日傘に使っているアククの姿が必ずみられた。

他方、彼は慣習破りで有名であった。たとえば、先にふれたように「ルオのやり方」によるとダラ内の家屋の配置は婚入順にレイアウトが決まっているが、ひとつのダラに入りきれないほどの多くの妻をもったアククは、それを守ることができない。アククはしばしばやむを得なく、あるいは彼なりに思うところあって我が子の葬式にも出ないなど、一般のルオ人からは考えられない行動もとってきたことはたしかである。このように、数々の慣習に背くことから不幸（チラ）をよび、息子の死亡率が高いと噂もされていた。

アクク王国？

アククは約 500 人の子ども、1000 人以上の孫といういわばアクク王国をつくりだした。子は覚えているが、孫まで覚えきれないアクク。子どもの方も、父は自分の名前



写真2 日傘にステッキ、半パン姿のアクク老人

を覚えてくれていても、教育費の援助をしてくれないのは自明であるので、年上のキョウダイを頼りだした。そこでキョウダイ同士が教育費、ビジネスを始める初期資金などを互いに助けあう互助組織がうまれたのである。また村落地域では一般に、学費を稼ぐために日常のさまざまな雑貨や食品を扱うキオスクを始める青年も多いが、このあたりでは同じような商品を扱う AKUKU と名を掲げた店が道沿い、青空マーケットに並ぶ。アククの息子たちである。小さなキオスク経営から小金を稼ぎ、自らの教育費としてきたアククの息子たちを発表者は何人もみた。村のなかでも、とりわけアククの息子たちは、父と同様に商売上手である場合が多い。なかには成功して、パイロットや医者、弁護士になっている人もいる。

アククの人生の背景には、彼の生きた国、ケニアが英国植民地から 1963 年に独立、そして新しい国家を建てていく激動の過程があった。そして 2010 年 8 月には独立後はじめてのケニア法改正がなされ、式典においてもケニア再生、と大きくうたわれた。その同年 10 月 3 日のアククの死は、村でも一夫多妻を行う人はごく少数となってきた近年の状況からも、ひとつの時代が終わったかのように感じさせられる。他方で、ケニアでは一夫多妻を民法で認める動きが 2014 年 3 月下旬からみられ、翌月の 4 月にはケニア大統領が男性が結婚できる女性の数の上限を撤廃する法案に署名、成立し、一夫多妻制をケニア法で認めることとなった。これからの一夫多妻を支えるのは現在の老人予備軍の世代か？今後のケニア、アフリカ社会における老人の地位や役割、また家族のありかた、そして行方はいかに？これからのアフリカの情勢はまだ大きな動きがありそうである。

(しいの わかな)

ケニア海岸地方ミジケンダ社会における ＜長老力＞の両義性

慶田 勝彦（熊本大学）

カタナ・カルルが銃殺された！

カタナ・カルルが銃殺されたというニュースをケニアの友人から知らされたとき、私は驚き、落胆した。ケニアから知らされるフィールドで親しくしていた人びとに関するニュースにはいつも悲しい事件性がつきまとっている。

本名グンガ・バーヤ・トーヤ、通称カタナ・カルルは推定年齢 95 才で「カヤの長老 (*mutumia wa kaya*, a kaya elder)」(ミジケンダに点在する聖なるカヤの森を守護する長老)、マリンディ文化協会 (MADCA) の議長、マウマウ退役戦士協会委員を務め、ミジケンダをはじめとしてケニアの平和と繁栄を祈願する代表者のひとりであり、メディアへの露出度も高いギリアマ人であった。すなわち、カタナはギリアマやミジケンダの人びとを守護し、祝福する力がある偉大な長老のひとりとして広く知



られていたのである。なお、ミジケンダは言語、社会、文化、歴史の面で隣接している9つのグループ—ギリアマ、チョニイ、カウマ、カンベ、リベ、ジバナ、ラバイ、ドウルマ、ディゴ—からなるエスニック集団のことである。

その老人は、2014年1月16日夕刻、自宅（ケニア海岸地方ワタム・ジンバ）のベランダで午後7時のラジオニュースを聴いていたときに若い2人組の暗殺者に襲われ、口に銃を突っ込まれて射殺された。10人ほどの容疑者（実行犯以外の容疑者を含む）がすでに逮捕されているが、カタナ暗殺を依頼した人物の中にはカタナの息子も含まれていたという。犯行の動機としてはカタナが所有する土地の分配をめぐる親族内の争いであると語られる一方で、若者たちはカタナが親族に災いをもたらしていた妖術使い（*mutasai, pl. a—*）であると確信し、殺害したとも語られている（2014年3月に実施したフィールドワークに基づく情報）。ここには、屋敷の人びとを守護し、祝福するというカタナの姿はない。その真偽は別として、屋敷の人びとに災いや死をもたらす妖術使いとしての破壊的な老人像が提示されている。

本発表では、長老カタナ・カルルが提示している守護者（偉大な長老）と破壊者（妖術使い）という相矛盾する二側面をギリアマにおける長老力の両義性として捉えることは可能かという点を考えてゆく。われわれの社会でよく見られるように、身体的な加齢によってそれまでの力が衰え、消失してゆくという観点から老人たちを捉えているというよりも、ギリアマの人びとは加齢とともに社会文化的に拡張されてゆく守護力と破壊力の観点から老人たちを捉えているように思われるからである。前者を焦点化した場合、認知症、少子高齢化、年金制度、介護などの老人問題が重要になるであろうが、後者を焦点化した場合、激化する妖術殺人事件や世界遺産を管理するカヤの長老の「いかさま」問題が人びとの関心の的になるのである。

長老<ムトゥミア>の祝福力

ギリアマ社会の長老は威厳がある一方で、普段屋敷にいる老人たちは孫や子どもたちが大好きであり、同時に家族や近隣の人びとに愛され、尊敬されている。私も調査地で多くの老人たちと一緒に過ごしたが、とても世話好きで会話好きだけれども、どこか威厳があり、だてに年をとってきわけではないと思わせる風格を醸し出している。私には、ギリアマの老人たちの威厳や風格が何に由来しているのか、調査初期にはよく分かっていなかった。

彼らとともに生活していると、ギリアマには単に年齢を重ねた<老人>以上に社会文化的な影響力を反映しているムトゥミア（*mutumia, pl. a—*）という言葉が存在していることに気がつくのであり、ここでは<長老>と訳している。ムトゥミアという言葉が広く<老人>を指すこともあるが、一般的にムトゥミアは妻子を持つ家族の長であり、屋敷を構え、屋敷の経済的、政治的、儀礼的問題の解決を指揮する人物として認知されているため、比較的年齢が若くてもムトゥミアと呼ばれる。特に、屋敷の秩序を各種儀礼の実践を通じて司り、屋敷の人びとを祝福し、安全や幸福を祈願する力がムトゥミアには認められている。また、ムトゥミアはしばしば屋敷の大黒柱（*muhongohi, pl. mi—*）にも喩えられ、ギリアマの社会文化的実践には欠かせない存在であることが分かってくるのである。さらにムトゥミアは、死後にコマ（*koma*）と呼ばれる祖霊になる。屋敷には同名のコマと呼ばれる木彫が設置され、祖霊となったムトゥミアは再び屋敷に導入され、屋敷の強力な守護霊となることが期待されている。

上述してきたようなムトゥミアの力をここでは守護力あるいは祝福力と呼ぶことにする。

長老<ムトゥミア>の破壊力

さらに現地に慣れてくると、人びとから愛され、尊敬されている老人や社会的な影響力があり、また、屋敷と家族を護り、祝福することが期待されている長老とは異なる老人の相貌が見えてくる。それは、本

来守護し、祝福すべき屋敷の人びとを苦しめ、最終的には彼らを死にいたらしめ、屋敷そのものを崩壊させてしまいかねない老人の姿である。この破壊的な老人像は、基本的には上述した社会的老人としてのムトゥミアが持つ守護力や祝福力を反転した力であるように思える。例えば、本来は屋敷を祝福するために行うべき儀礼において、その手続きを不当に省略したり、儀礼の要請を無視したりして儀礼の効力を台無しにすること（儀礼規則の逸脱や乱用）、屋敷の秩序を守り、家族関係を円滑にするための祝福力をその関係の断絶に導く力として行使すること（呪詛）、祖霊となった老人が適切に取り扱われなかったことに怒り、本来守護すべき屋敷を崩壊させようとする（祖霊の怒り）などである。

浜本は以前に、ミジケンダのドゥルマ社会において親が子どもに対して行使する呪詛（バコ *bako*: 相手に悪い言葉を投げつけることによって、相手になんらかの災難をもたらす行為。ムフンド *mufundo*: 言葉を投げつける必要はなく、心にわだかまりやしこりを抱き、怒りや悲しみの感情をもつこと）を事例として、ドゥルマのムトゥミアに組み込まれている破壊的な呪術的相貌を描きだしていた（浜本 1995: 450-457）。浜本は、ドゥルマではわれわれの想像以上に長老の力は強く、「老人（*mutumia*）は尊敬され、その言うことには従わなければならない」という命題がドゥルマの人びとには疑うこのない「満場一致の命題」になっていると述べる（浜本 1995: 460）。それゆえ、ドゥルマ（ギリアマでもそうだが）では長老への尊敬と服従は「一つの世界で育つことによって身につけられた自然の所作」（浜本 1995: 462）であるという。しかしながら、その所作には呪詛の観念が組み込まれており、それは長老への尊敬と服従を動機づけるものではなく、「当然生ずるであろう現実との乖離から、満場一致の命題を保護する物語の装置」（浜本 1995: 462）である可能性を示唆している。呪詛もまた、ここでいう長老の破壊力のひとつである。

本発表では、物語装置というよりは「長老への尊敬と服従」を前提としているギリアマの人びとがムトゥミアに見て取っている二つの力を守護力と破壊力として捉えている。カタナ・カルルの事例が示していたように、これらの力は同一のムトゥミアに見て取ることができるため、やや適切さに欠けるとは思ったが、それを＜長老力＞の両義性として提示することで、長老力の二つの相貌を焦点化しようと試みた。なお、本発表ではギリアマの老人女性については言及する余裕がなかったが、基本的な長老力の両義性は女性にも見られると考えている。もちろん、その具体的な力の現れ方は男性と女性とは異なっている。

そして、ギリアマにおける両義的な長老力は潜在的に加齢とともにその双方の力を拡張してゆくようである。年齢を重ねても妻子がいない独身者はその力はさほど拡張されることはないし、妻子を持った者でもムトゥミアとして屋敷を首尾よく運営できない者や社会的な信頼を勝ち得ていない者の長老力も強いとはいえない。おそらく、ギリアマにおいて両義的な長老力を最も具現化した存在はカヤの長老である。

カヤの長老

ミジケンダには 2008 年にユネスコ世界遺産に文化遺産として登録された「ミジケンダの聖なるカヤの森林群」が存在している。その世界遺産は 11 の小森林から構成されており（複数のサイトが一括して登録されているシリアル・ノミネーション）、ミジケンダ・グループはそれぞれ固有のカヤを管理し、ギリアマはカヤ・フンゴ（カヤ・ギリアマ）と呼ばれているカヤを主として管理している。カヤは歴史的にはミジケンダの各グループの要塞村であり、人びとはソマリア南部の伝説の土地「シュングワヤ（シングワヤ）」から現在のケニア海岸後背地の森林に移住し、そこにカヤを建造して居住していた。20 世紀初頭までにカヤは放棄されて無人化していったが、ごく一握りのムトゥミアがカヤの内部に住み続けていたという。彼らは「カヤの長老」としてミジケンダ固有の文化、宗教、呪術、儀礼によってカヤを管理し続け、その結果、ケニア海岸地方に残る貴重な自然森林を森林開発や環境破壊から保護することになった。そして、無人化した以降もカヤはなにもない空っぽの聖域として歴史的にミジケンダのアイデンティティの中心であ

り続けてきた (Parkin 1991)。20 世紀前半、カヤは英国による植民地化への抵抗拠点として位置づけられ、焼き討ちの対象になったこともある。また、ケニア独立に向けて、カヤはミジケンダの民族的なアイデンティティを示す拠点として復興した経緯もあり、現在にいたるまでカヤのリニューアルは状況に応じて形を変えながらも継続している。そして 21 世紀には、カヤのユニークな文化的自然管理がユネスコに評価され、世界遺産登録に至ったのである。カヤに関する知識を持ち、カヤの儀礼的管理に従事してきた長老たちは「カヤの長老」として広く認知されるようになり、ユネスコ世界遺産の守護者としての地位を世界的に確立しつつある (慶田 2010)。

カヤをミジケンダの政治的な力の源泉にしようとする国内の政治家の動き (Willis 2009) と、聖なるカヤの森の世界遺産化というグローバルな動きによって、実質的には衰退しかけていたカヤの長老の権威は現代において蘇り、カヤの長老の守護力、祝福力はメディアにおいても注目されるようになったのである。事例として取り上げたカタナ・カルルはそのような状況において登場してきたギリアマの長老であった。

ギリアマにおける妖術殺人事件

妖術 (*utsai*) および妖術使い (*mutasai, pl.a—*) の概念と実践が知られているギリアマでは、妖術によって人を殺害する妖術殺人事件は日常茶飯事とまでは言わないが、ギリアマやミジケンダ、あるいはケニア海岸地方やケニア国家内部においては歴史的に、また、現在においても珍しくはない事件である (Brantley 1979, 浜本 2014, 慶田 2002, Parkin 1991)。妖術殺人事件には大きく二つのケースがある。一つは、妖術使い (加害者) が親族や近隣の者たち (被害者) を妖術で殺害するケースであり、他方は、妖術使いの嫌疑をかけられた者 (被害者) が、嫌疑をかけた親族や近隣の者 (加害者) によって殺害されるケースである。カタナ・カルルのケースは後者にあたる。

前者のケースの場合、妖術使いによる攻撃は被害者の命を一気に断ち切るというよりは、病気にしたり、作物を不作にしたりなど、ありとあらゆる災いを多岐にもたらすのが特徴であり、被害者の範囲も本人だけではなく、屋敷、親族、共同体の者たちも含まれている。このような妖術使いの攻撃に対しては、施術師の力を借りて、予防、対抗、治療などの措置がなされている。それゆえ、妖術殺人事件は通り魔的な殺人ではなく、上記どちらのケースにおいても比較的長い時間を経過した後に、人の死という形をとる。カタナの場合は、殺害されるまでに屋敷の人びとの死に妖術使いとして関与していたという点がカタナ殺害の動機のひとつとして語られている。

なお、植民地時代において、カタナのケースに相当する妖術殺人事件は単なる殺人事件として処理されることがほとんどだったため、妖術殺人事件としては成立せずに、実際に人を殺した人びとが有罪となっていた。カタナのケースにおいても、カタナ銃殺に関与した者たちは逮捕されているし、罪に問われることは間違いないが、ギリアマ社会ではこの事件が妖術殺人の観点から検証されるべき問題である捉えられている事実も見逃せない。カタナが妖術使いではないことを支持する人びとが多数存在する一方で、カタナが妖術使いならば殺されて当然だと主張する者たちもいるからである。

また、カタナ・カルル妖術殺人事件には新しい点があることを確認しておきたい。ひとつは、妖術殺人事件の解明においては、容疑をかけられた妖術使いの有罪か無罪かは、親族会議、占い (親族レベル)、ロケーション会議 (行政地区のチーフが参加)、占い (第三者を含む公共性が高いと見なされるもの)、妖術使いを捕まえる儀礼、パパイヤの試罪法など「ギリアマのやり方」に従い長い時間をかけて「審議」してゆくのが一般的であったのに対し、近年はカタナの例が示すように従来の「ギリアマのやり方」による妖術使いか否かの検証過程を省略し、一方的な妖術使いの嫌疑による銃や鉈での衝動的な殺害が目立つようになっている点である。もうひとつは、もともと妖術使いとして告発される者は老人が多いという傾向

性はあったが、近年は「老人狩り」ともいえるような状況が顕著になってきている点である。特にケニア海岸地方では、「白髪頭」の長老が白髪であるという外見上の理由だけで妖術使いと断定され、殺害される事件が相次いで報告されており、ひと月の間に3人は殺されているという（2014年3月に実施したフィールドワークに基づく情報）。

「いかさま」のカヤの長老

最後に、カタナ・カルルの「カヤの長老」に関する2つの語りに着目してみたい。カタナは冒頭で述べたように「カヤの長老」として知られ、メディアにも露出していた人物である。そのため、長老たちの一部（特にMADCAのメンバー）はカタナをカヤ・フンゴ（カヤ・ギリアマ）内部に埋葬するように主張していた。その一方で、アブダラ・ムニャンゼ（ディゴ）を中心とした「カヤの長老」たちは、カタナ・カルルは尊敬すべき長老ではあったが、「カヤの長老」ではなかったと主張した。その理由として、第一にカタナはカヤの内部ではなくワタムの実家で死んでいる点、第二にカヤの外で死んだ者をカヤには埋葬しないのがカヤの仕来りである点を指摘し、カタナ・カルルの遺体をカヤの内部に埋葬することに異議を唱え、カタナを「カヤの長老」として認めようとはしなかった。結局、カタナは通常のギリアマ人と同じように屋敷内に埋葬されている。

「カヤの長老」の権威をめぐる論争は、カタナ・カルルのケースにのみ生じているのではなく歴史的に反復されている。マッキントッシュ（McIntosh 2009）はカヤの長老の一部はミジケンダの伝統を商品化して売却したり、政治家に流用したりする「いかさま師」として、他のカヤの長老たちから長老の権威をはく奪され、カヤから追放されるケースについて論じている。上述したディゴの長老たちは、カタナもまたカヤの長老を偽装しているとして、カタナをカヤに埋葬することに反対していたのである。浜本はドゥルマにおいては、「老人（*mutumia*）は尊敬され、その言うことには従わなければならない」という命題がドゥルマの人びとには疑うこのない「満場一致の命題」になっている（浜本 1995：460）と指摘していたが、老人の究極的権威であるはずの「カヤの長老」でさえも実際には世俗的であるため、その権威は不確定性を内包している。権威をもった長老の間では「呪詛」ではなく、「いかさま」によって、逆説的にカヤの長老の正当な権威を補完しているのかもしれない。

守護者（長老）と被守護者（従者：屋敷の人びと）の間では、長老力は守護力と破壊力（妖術や呪詛）としての両義的な相貌を示し、守護者（長老やカヤの長老）の間では、長老力は真の守護力と「いかさま」の守護力としての両義的な相貌を示しているようであり、興味深い。

結論

本発表では、年齢を重ねて身体的に老いてゆくにつれて、今までは可能だったことができなくなったり、今まで身につけたり蓄えたりしてきた力を消失してゆくプロセスとしてのみ老いを捉えるのではなく、老いる過程で拡張される力はないのかという点を検討してきた。ギリアマにおいても老いによる力の衰えや消失について語られるし、それを嘆くこともあるが、社会的な問題としてはあまり焦点化されない。それ以上に、ギリアマの人びとは屋敷を守護し、祝福する＜長老力＞の拡張の方に焦点を合わせているからである。そして、守護力が拡張されればされるほどその破壊力も拡張されるのであり、その破壊力に従者たちは耐えられなくなり、究極の破壊者である妖術使いとして老人を社会的に制御しようとする。過剰な守護力は暴走し、本来は保護すべき＜若さ＞を攻撃する破壊力へと転化するのであり、それは人間の免疫細胞（例えばT細胞）の両義性（本来は敵を攻撃するために放出される物質サイトカインは、過剰に放出されると味方の細胞も攻撃する性質があり、その結果、動脈硬化や糖尿病などの原因となる。それが力の減

退や衰退、すなわち老いとして経験される)にも似た<老い>の観念がギリアマ社会の根底にあるように思えてくる。ギリアマの社会的 T 細胞としての長老力の暴走は社会的に若い細胞にとっては深刻な問題であるため、若者によるムトゥミアを標的にした妖術殺人事件が深刻な社会問題になるのかもしれない。

さらに、グローバル化の影響でカヤの長老の権威は劇的に拡張し始め、ギリアマやミジケンダの真の伝統に基づく権威は「いかさま」言説を通じて世俗化へ向かう同時に、カヤの両義的な長老力を適切に制御できる「カヤの王」(Willis 2009) の出現が社会的、政治的な争点として人びとの関心を集めるのである。

老いをどのような観点から捉えるかによって老いの相貌は異なるのであり、その老いの相貌に応じて、人びとが実際に直面し、解決の必要を感じる問題もまた異なるのである。

付記

本稿は 2014 年 4 月 19 日に開催された第 23 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム「アフリカから老いの力を学ぶ——老年文化の多様性——」で発表した内容に基づいている。基本的な趣旨には変わりはないが、発表要旨と同一ではないし、発表で言及した話の順番を変更している。また、本稿用に加筆修正している箇所がある点をお断りしておきたい。なお、シンポジウムでの発表および本稿は科学研究費「グローバル化するアフリカにおける<老いの力>の生成と変容——宗教儀礼領域からの接近」(基盤 B、代表者: 田川玄に研究分担者として参加) および「ケニア海岸地方のスピリチュアリティおよび宗教性に関する人類学的国際学術研究」(基盤 A、代表者: 慶田勝彦) の助成に基づく調査研究のデータや成果に基づいている点を明記しておきたい。

参考文献

- Brantley, C. (1979), 'A Historical Perspective of the Giriama and Witchcraft Control.' *Africa* 49: 112–133.
- 浜本満 (1995), 「ドゥルマ社会の老人——権威と呪詛」『社会規範——タブーと褒賞』中内敏夫, 長島信弘他, pp. 445–464, 藤原書店.
- (2014), 『信念の呪縛——ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会.
- 慶田勝彦 (2002), 「妖術と身体——ケニア海岸地方における翻訳領域」『民族学研究』67–3: 289–308.
- (2010), 「スピリチュアルな空間としての世界遺産——ケニア海岸地方・ミジケンダの聖なるカヤの森林」『宗教の人類学』吉田匡興, 石井美保, 花渕馨也編, pp. 239–271, 春風社.
- McIntosh, J. (2009), 'Elders and Frauds: Commodified Expertise and Politicized Authority among Mijikenda.' *Africa* 79-1: 35–52.
- Parkin, D. (1991), *Sacred Void: Spatial Images of Work and Ritual among the Giriama of Kenya*. Cambridge University Press.
- Willis, J. (2009), 'The King of the Mijikenda and Other Stories about the Kaya.' In *Recasting the Past: History Writing and Political Work in Modern Africa*, Peterson, D.R and G.Macola (eds.), pp.233–250, Ohio University Press.

(けいだ かつひこ)

村の王と大人になれない者たち

—コモロ諸島・ンガジジャ島における年齢と階梯制—

花 渕 馨 也（北海道医療大学）

アンダとく老いの力

東アフリカ海岸部とマダガスカルに挟まれたモザンビーク海峡に、四つの島からなるコモロ諸島がある。そこには、コモロ語を話し、イスラーム教徒であるコモロ人と呼ばれる人々が住んでいる。ほとんど産業が発達していないので、島の人々の多くは自給自足的な農業や漁業によって生活している。

ンガジジャ島はコモロ諸島の中でも最も大きな島である。ンガジジャ島の社会は、複数の母系親族集団の集まりから構成される「村 (mdji)」を単位としており、村ごとに「アンダ (âda)」という男性の階梯制が存在している。コモロ社会における男性の「老い」は、単に年齢という尺度で定義されるのではなく、このアンダの階梯という尺度によって定義され、意味づけられている。ここでは、ンガジジャ島南西部にある小さな漁村 S 村の事例についてとり上げ、ンガジジャ島社会で男性のく老いの力を規定しているアンダにおける階梯上昇の制度的特徴と、その近代化による変化について報告する。



アンダの階梯：位階構造と役割

村の男性は「ワナムジ：村の子供たち (wana mdji)」と「ワンドゥワババ：父なる者たち (wandru wababa)」の二つの階層に分かれている。さらに、ワナムジには6つの「ヒリム (hirimu)」(階梯)、ワンドゥワババは5つの階梯がある (図1参照)。ワナムジ階層では「ワフォマナムジ：村の子供の王」、ワンドゥワババ階層では「ワフォマムジ：村の王」が支配的

役割を担い、ワフォマムジが村全体の政治を司る。

ワナムジからワンドゥワババの階層に上昇するには、多額の費用がかかる「大結婚式 (ndola nkuu)」と呼ばれるアンダの結婚式を行わなければならない。大結婚式は長い期間をかけ、花婿と花

＜アンダの階梯＞		人数 (Fr)	年齢*
ワンドゥワババ 「父なる者」	ワゼー (wazee) : 長老	9	70
	ワファヅアハヤ (wafwadhahaya)	13 (3)	62
	ワフォマムジ (wafomamdji) : 村の王	17 (7)	57
wandru wababa	ワバラジュンベ (wabalajumbe)	13 (4)	49
	ワナズィコフィア (wanazikofia)	17 (6)	46
	《 ティリジ (tiridji) 》	5 (2)	-

大結婚式 (ndola-nkuu) の開催 合

ワナムジ 「村の子供」 wana mdji	マグジ (maguzi)	グジ・マツアムロ (guzi matsamro)	9 (1)	42
		グジ・ヴィライ (guzi vilai)	40 (7)	40
		グジ・ンデレ (guzi ndere)	47 (?)	36
	ワフォマナムジ (wafomanamdji) : 村の子供の王		37 (4)	31
	ワズグワ (wazugwa)		40 (5)	23
	ワションジェ (washonje)		47 (9)	16

Fr: フランス在住者, *: ある男性が階梯を上昇した年齢

図1 アンダの階梯制度の構造

嫁の親族間で贈り物が交換されるだけでなく、村全体やヒリムのメンバーに対し定められた量の牛肉や米の食事がふるまわれる。ワンドゥワババは「ワンドゥワズィマ：一人前の大人 (*wandru-wadzima*)」とも呼ばれ、アンダを行うことは村の男性が大人になるための「義務 (*fardhwi*)」とされ、男性は生涯をかけてお金を貯めて大結婚式を実現しようと努める。

「父なる者たち」の特権

ワンドゥワババになることは、男性にとって人生で最高の「名誉 (*sheo*)」であり、アンダを実現できないことは「恥 (*haya*)」とされる。ワンドゥワババになると、豪華な刺繍のはいった特別な衣装を身に着け、モスクの礼拝の並び順や、行事での肉や食事の分配において優遇されるといった特権が与えられる。また、ワンドゥワババは村の「集会 (*trengweni*)」において発言権をもち、名士として政治的権力をふるうことができる。村の重要な行事や事業、結婚式の組織、モスク、道路、広場の建築や修復、さまざまな政治的問題などは村の集会で協議されるが、ワナムジは公に発言することができず、ワンドゥワババの意見に従わなければならない。ワナムジが反論したりすると罰が与えられる。

具体的な村の政治を執行するのは「村の王」であるワフォマムジであるが、長老であるワゼーの発言は絶対的だとされ、会議においてワゼーが決定的発言をすると他の者は反論できない。ワゼーは大統領よりも権力をもっているとさえ言われている。

男性は一般的に 15 ～ 20 歳頃に最下位のワションジェ階梯に加入する。加入には、ワナムジの全階梯が上昇した時に、村の同世代が集団でワシヒリムとクーデタョンジェ階梯に加入する場合と、個人的に「ムヘレヨ (*muheleyo*)」という食事またはお金をヒリムのメンバーに支払い加入する場合がある。個人的に加入する場合には、自分の年齢と同世代の上位の階梯を選んで加入することも可能である。

ワナムジの階梯を上昇するには、ワズグワ階梯がワフォマナムジの政権を奪う「ウプア・カジ (*upua kazi*)」という「クーデタ」を起こす必要がある。ワフォマナムジ政権の働き具合や、ワナムジ階梯全体の人数や年齢の構成、世代交代の時期などを勘案しワズグワのメンバーがクーデタの発起を決めると、ワゼー階梯の大物に秘密裡に相談し、お金を支払う。金曜の礼拝の後に開かれる村の集会において、ある日突然ワゼーがクーデタを宣言すると、ワナム



写真1 「父なるもの」と「村の子どもたち」



写真2 大結婚式での花婿と花嫁

ジの全階梯が上昇する。マグジ階梯の最上階であるグジ・マツァムロ階梯のメンバーは上昇することなく留まる。年齢を重ねてもアンダを実現できず、村の政治的権力ももたないグジ階梯に入ることは「恥ずかしい」こととされる。

ヒリムの解体と再結成

若くても、ワナムジのどの階梯であっても、お金がある者は早くに大結婚式を行うことができる。しかし、若いときにはアンダの制度ではない「小さな結婚式 (*mna daho*)」によって結婚し、年齢とともにワナムジの階梯を上昇し、マグジ階梯で40代後半から50代になり資金の準備ができると大結婚式を行うというパターンが多い。その場合、長年連れ添った妻とあらためて大結婚式を行うこともあれば、第二夫人として若い妻と大結婚式を挙げることもある。

大結婚式後には、ワンドゥワババの最下位のワナズィコフィア階梯に加入するのが一般的だが、どの階梯に加入するかは、自分の年齢などを考慮して任意で決めることができる。大結婚式は個人によって行われるため、ワナムジのヒリム集団はメンバーが順次抜けることで一旦解体し、ワンドゥワババの階梯でまた新たに組織されることになる。

ただし、この時、ワナムジ時代の同世代のヒリムとまた同じヒリムに属したい者は、大結婚式の後、「ティリジ (*tiridji*)」という階梯には属さないカテゴリーに一旦入るという選択をし、同世代の仲間が上昇してくるまで待ち、仲間がそろった段階と一緒に集団でワナズィコフィア階梯に加入することもできる。

ワンドゥワババの階梯上昇も、ワナムジと同様にクーデタによって起こる。ワバラジュンベ階梯の成員が、ワフォマムジの王としての働きや、ワンドゥワババ階梯の年齢や人数の構成、世代交代の時期などを考慮してクーデタを決め、ワゼーに相談してお金を支払い、ワゼーによってウプア・カズィが公的に宣言される。

村の王の大老的役割をするワファゾアハヤ階梯はワゼー階梯に上り、すでにかなり高齢となり、人数も少なくなったワゼー階梯の成員はアンダから引退し、アンダの交換から外れ、村の集会での発言権をもたなくなる。

アンダの原理：個人と集団、平等と競争

従来、コモロ研究者によってアンダは「年齢階梯制 (*age grade system*)」として論じられてきたが、多くの社会の年齢階梯制のように、「年齢組 (*age class*)」が年齢とともに自動的に、順番に階梯を上昇するシステムとアンダの階梯上昇方法は異なっている。アンダの場合、年齢組がそのまま集団的に階梯を上昇するのではなく、不定期に行われる個人的な階梯上昇によって一旦解体され、再結成されるという特徴をもっている。そのため、必ずしも年齢という基準と階梯上昇のタイミングが一致しているわけではなく、個人的、状況的な判断によるズレが発生する可能性を制度が内在させている。

アンダの階梯上昇には、ワションジェ階梯への加入において形成される同世代のグループが、クーデタによって「集団的」に階梯を上昇する「平等主義的」な方法と、個人の能力によって大結婚式を行うことで「個人的」に階梯を上昇する「競争主義的」な方法が原理的に併存しているのである。この矛盾した原理を合わせもつ制度の中で、個人は自分の年齢や個人的な名誉と同世代との仲間関係などを考慮した上で、自分のライフサイクルの中で階梯を上るタイミングをはかり、最終的にワゼーにまで到達する道筋を選択することになる。コモロにおける＜老いの力＞は、集団的に達成されるものであるとともに、個人的な選択と努力によって「獲得」されるものでもあるのだ。

近代化による変化

現在の各階梯の人数や年齢構成からみると、かつて、賃金労働が少なく、経済的格差が小さかった村社会では、資力と広い親族の支持を得ることができる年配者のみが大結婚式を行うことができ、年齢の積み重ねと階梯の上昇とが自然なバランスを保ってきたと推測される。つまり、ほとんどの老人が年齢にともないワゼーとしての権力を獲得しえただろうということだ。

ところが、このバランスが崩れる兆しが見られるようになってきた。コモロ諸島は19世紀半ばにフランスによって植民地化され1975年に独立する。しかし、コモロ国家の政治的混乱と経済的困窮を背景として、独立以降フランスに移住する人が次第に増加し、今では移民の経済支援なくしてコモロの生活が成り立たないとも言われるようになってきている。例えば、S村は人口2000人ほどの村だが、そのうち800人がフランスに暮らしており、彼らは家族への援助をするだけでなく、同郷組合により積極的に村への援助活動を行っている。

90年代以降、移民の経済力や彼らが持ち込む西欧的文化の影響によって、アンダは大きく変化してきた。故郷に錦を飾りたいという移民の見栄の張合いによって、アンダにかかる費用は高額化し、より派手で、豪華な結婚式が行われるようになってきた。また、移民自らが故郷で大結婚式を行うだけでなく、家族や親族のアンダの資金を援助するようになり、毎年8月のヴァカンスの時期には、フランスから多くの移民が大勢帰郷し、毎日のように大結婚式の行事が行われるようになってきている。

こうした変化の中で、かつては年齢を重ねてある程度財力をもたないと大結婚式を行うことはできなかったが、公務員や政治家、商人など若くして経済力をもつようになった世代や、フランスに移民してある程度お金を貯めた若者が、現金収入のない年配の世代を飛び越して大結婚式を行うケースが増えている。移民世代がアンダを実現し、若くして「村の王」となる一方で、年配者がいつまでも「大人」になれない状況が生じてきているのだ。

年齢を重ねても、いつまでも「子供」と呼ばれるのはつらいことだ。同世代の中でただひとり大結婚式をまだ行っていないグジ・マツァムロ階梯の68歳の男性が言った。「死ぬまでに必ず大結婚式をすること、今は、それだけを考えて生きているんです。」

ンガジジャ島の男性が「老いの力」を手にするのは楽なことではないのだ。しかし、考えようによっては、68歳で、まだ結婚式を行うために頑張ろうとする生きがいがあるというのは、老いの生き方としては悪いことではないのかもしれない。もしかしたら、若い10代の娘と結婚できるかもしれないのだし。

(はなぶち けいや)

 最新レポート

戦火の一年 —南スーダンにおける内戦と和平の行方—

村橋 勲

1. はじめに：「希望」から「絶望」へ

2014 年はアフリカの新国家、南スーダンにとって暗い年となった。南部スーダンは、22 年に及ぶ第二次内戦後、2011 年 7 月 9 日に、南スーダン共和国としてスーダンから分離独立を果たした¹。現在、南スーダンは、アフリカ 54 番目の独立国、193 番目の国連加盟国として世界でもっとも若い国家である。独立当初、南スーダンは、「アフリカ最長」と呼ばれた内戦の末、スーダンから独立を勝ち取ったという喜びにあふれていた。また、農業に適した広大な土地と豊富な石油を産出することから、「希望の国」として国際社会の注目を集めた。

しかし、2013 年 12 月中旬に首都ジュバで勃発した大統領警護隊の兵士間での銃撃戦は、サルバ・キール（Salva Kiir）大統領を支持する政府軍とリエック・マチャル（Riek Machar）前副大統領を支持する反政府軍との戦闘に発展した。そして、戦闘勃発から一年が経過した今も内戦が続いている。両軍は、主に北東部の上ナイル地方（ジョングレイ州、ユニティ州、上ナイル州）で武力衝突を繰り返している（図 1 参照）。

一方、南スーダン政府とマチャル派の間での停戦／和平交渉は、政府間開発機構（Inter-Governmental Authority on Development : IGAD）² の仲介の下、エチオピアの首都アジスアベバで進められている。両派は、すでに 3 度、停戦合意したが、いずれも数日後に合意は破られ、戦闘が再開された。また、和平交渉では、次期総選挙までの間、暫定国民統一政府（Transitional Government of National Unity : TGONU）を設置することで合意に至ったが、暫定政府内の権力分有をめぐる話し合いは平行線をたどっている。

戦闘が勃発した時、私は、東エクアトリア州に居住する民族集団ロピットの社会制度に関するフィールド調査に向かうため、州都トリット³に滞在していた。12 月 16 日の早朝、ジュバにいる友人から電話があり、前日の夜から始まった銃声が朝になっても断続的に聞こえており、市内で戦闘が行われているようだ、という知らせを受けた。その日、トリットは平穏だったが、午後になると政府軍の車両が頻繁に往来するようになった。夕方、夜間外出禁止令が発令され、交通機関は停止した。宿泊先のホテルは、銃を持った兵士たちでいっぱいになり、彼らは、夕方 7 時になると国営テレビのニュースに釘付けになっていた。彼らといっしょにニュースを見ていると、軍服に身を包んだサルバ・キール大統領の記者会見が映し出された。大統領は、その会見で「マチャル前副大統領とその一派によるクーデターは未遂に終わり、ジュバの治

1 スーダン共和国は、イギリスとエジプトによる共同統治を経て、1956 年に独立した。スーダンは、第一次内戦（1955～1972 年）と第二次内戦（1983～2005 年）の 2 度にわたって内戦を経験した。独立後、内戦がなかったのは 1972～1983 年までの 10 年間だけである。

2 IGAD は、北東アフリカ各国から構成され、加盟国はケニア、スーダン、ウガンダ、エチオピア、エリトリア、ジブチ、ソマリアの 7 ヶ国。

3 トリットは首都ジュバから約 120 キロ南東に位置する。

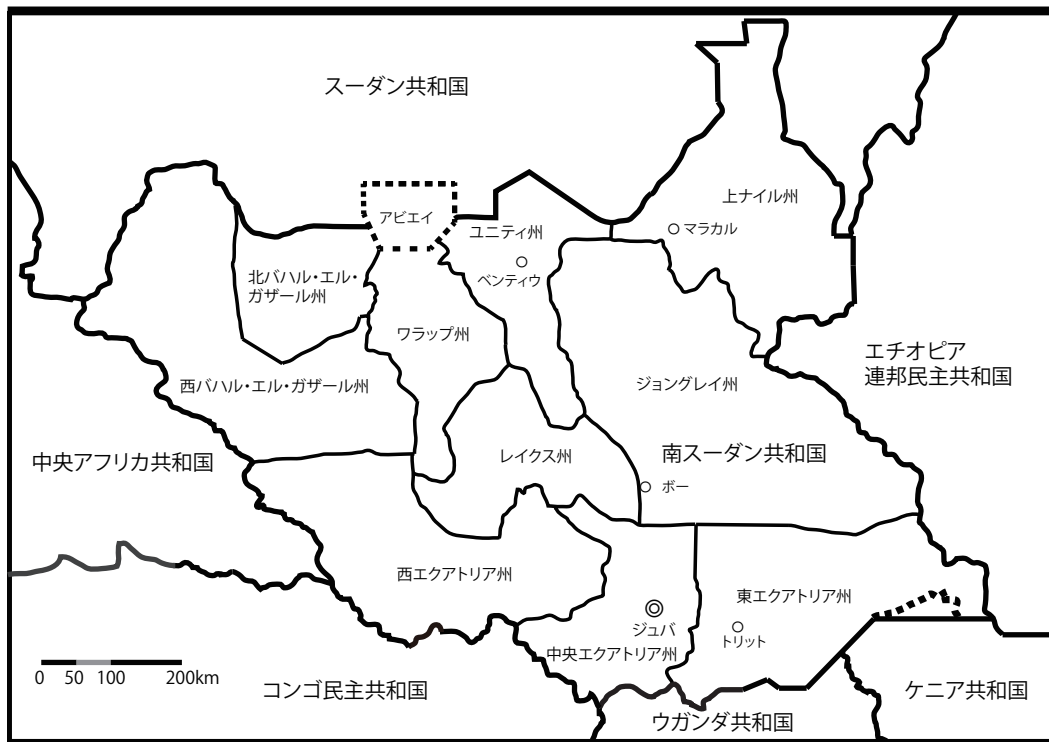


図1 南スーダンの州区分と主要都市*

* UNOCHA に記載されている地図から筆者作成。主要都市に関しては、本文中で言及した都市のみ地図上に記載した。

安は政府軍がコントロールしている」と話した。しかし、翌日もジュバ市内では断続的に銃声が響き、結局、治安が落ち着いたのは18日であった。その後、閉鎖されていたジュバ空港は再開され、南スーダンに滞在した外国人の退避が始まった。しかし、トリットージュバ間の交通機関は運行を再開せず、トリットでの足止めを余儀なくされた。陸路でジュバに移動できたのは、戦闘発生から一週間が経ってからである。ジュバに移動した翌日、民間機で南スーダンからウガンダへと退避した⁴。

本稿は、戦闘勃発から一年が経った南スーダンでの紛争を「内戦」と捉え、紛争の背景である与党内の政治的対立（第2章）、首都での戦闘の勃発と地方への紛争拡大の経緯（第3章および第4章）、政府軍と反政府軍の停戦／和平交渉の動向（第5章）に関して要約したものである。なお、治安上の問題で、南スーダン国内でのフィールドワークはできないため、本稿は、報道や国連、国際NGOの報告などを基に執筆した。

2. 高まる緊張：与党内の政治的対立

まず、南スーダンの民族集団と経済状況について紹介する。南スーダンは60以上の民族集団からなる多民族国家である。人口最大のディンカ（40%）とそれに次ぐヌエル（20%）の他、ザンデ、トボサ、シルックなどの民族集団から構成されている⁵。現在、敵対関係にある政府側と反政府側それぞれの代表である、キール大統領はディンカ人で、マチャル前副大統領はヌエル人である。ディンカは、バハル・エル・ガザール地方と上ナイル地方の一部、ヌエルは上ナイル地方を故地とする。どちらの民族も、伝統的には牧畜に依存した生業を営んでいた。一方、首都ジュバがあるエクアトリア地方は、ザンデ、バリ、ロトゥ

4 ジュバ空港は19日に再開され、南スーダン国内に滞在していた外国人は各国大使館が手配したチャーター機か民間機でケニアやウガンダなどの隣国に退避した。

5 Small Arms Survey, “The South Sudan Defence Forces in the Wake of the Juba Declaration”, Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, Working Paper 1, Geneva. 参照。

ホ、トボサなど 20 以上の少数民族が居住している⁶。南スーダンでは、国家収入の 95%以上を石油に依存しており、それ以外に目立った産業はない。油田はユニティ州と上ナイル州に分布し、独立直後（2011 年）には日産 34 万バレルを生産していた⁷。

本章では、CPA 締結後のスーダン国内での政治的動静とスーダン人民解放運動／スーダン人民解放軍（Sudan People's Liberation Movement/ Sudan People's Liberation Army : SPLM/SPLA）⁸ 内部での政治的対立について紹介する。なお、SPLM/SPLA は、第二次内戦（1983 ～ 2005 年）において、南部スーダンを代表して内戦を主導してきた反政府ゲリラであり、南スーダン独立後、SPLM は与党、SPLA は国軍となった。

スーダンでは、2005 年 1 月、SPLM とスーダン政府との間で南北包括和平合意（Comprehensive Peace Agreement : CPA）が締結され、第二次内戦が終結した。南部には自治権を付与された暫定自治政府が設立され、6 年間の移行期間の後、スーダンからの分離独立の是非を問う住民投票が行われることになった。2005 年 7 月初め、SPLM 議長兼 SPLA 最高司令官として内戦を主導してきたディンカ人のジョン・ガラン（John Garang）がスーダン第一副大統領に就任した。しかし、ガランは、就任からわずか 3 週間後、ヘリコプターの墜落事故によって急死する⁹。そして、8 月、SPLA 参謀長（序列第 2 位）であったサルバ・キールが、ガランの後任としてスーダン第一副大統領に就任し、9 月に南部スーダン自治政府が樹立されると、彼はその大統領を兼務した。キールは、2010 年 4 月の総選挙で大統領に再選され、副大統領にはリエック・マチャルが就任した。その後、2011 年 1 月に住民投票が行われ、圧倒的多数の支持を得て、南部スーダンは念願の独立を達成することになる。

しかし、次第にキール大統領を独裁者と批判する声が上がりはじめた。2013 年 3 月に開催された SPLM 政治局会議で、マチャル副大統領は、汚職、トライバリズム（部族主義）、治安、経済、外交関係、党のビジョンに関してキール大統領は失敗していると述べ、2015 年に予定された次期大統領選へ出馬する意思を表明した¹⁰。また、この時、マチャルのほかに、パガン・アムム（Pagan Amum）SPLM 書記長と故ジョン・ガランの未亡人レベッカ・ニャンデン（Rebecca Nyandeng）も立候補の意思を示した。

次期大統領選を見据えて SPLM 内の権力争いが激しくなるなか、7 月 23 日、キール大統領は、汚職追放を理由にマチャル副大統領をはじめ全ての閣僚を解任した。その 1 週間後に、新内閣の人事が発表されたが、閣僚の顔ぶれは大きく変わり、SPLM 以外の政党出身者や、かつてスーダンの政権与党 NCP（国民会議党）に属していた政治家が選出された。また、マチャルに代わる副大統領には、ジェームズ・ワニ（James Wani）が就任した。この時、国内で目立った暴動は起こらなかったものの、解任された閣僚たちによる政権批判はさらに強まっていった。

一方、第二次内戦終結後も、キール政権に対する反乱は地方で続いていた。とくに 2010 年の総選挙後、選挙期間中に頻発した SPLA 兵士による暴行や任意逮捕に反発し、選挙で敗れた候補者が反政府ゲリラを組織して武装活動を開始するようになった。上ナイル地方だけで、2011 年には 7 つの反政府ゲリラが存在

6 バハル・エル・ガザール地方は、西バハル・エル・ガザール州、北バハル・エル・ガザール州、レイクス州、ワラップ州の 4 州、上ナイル地方は、ユニティ州・上ナイル州・ジョングレイ州の 3 州、エクアトリア地方は、中央エクアトリア、東エクアトリア、西エクアトリア州の 3 州からなる（図 1 参照）。

7 U.S. Energy Information Administration “Country Analysis Brief: Sudan and South Sudan”, September 3, 2014, (<http://www.eia.gov/countries/analysisbriefs/Sudan/sudan.pdf>) 参照。

8 SPLM/SPLA は、政治部門の SPLM と軍事部門の SPLA からなるが、軍事部門が突出している。

9 ジョン・ガランはウガンダのムセベニ大統領との会談後、ムセベニが準備した大統領専用ヘリコプターでスーダンに戻る途中、ヘリコプターが墜落し、死亡した。事故の原因に関して、スーダン政府は事故調査委員会の報告書を提出しておらず、「陰謀説」もささやかれてきた。栗本英世 2007 「ジョン・ガランにおける『個人支配』の研究」、佐藤章（編）『統治者と国家—アフリカの個人支配再考—』アジア経済研究所 165-222 . 参照

10 Small Arms Survey, “Timeline of Recent Intra-Southern Conflict” Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, Geneva: June 2014. 参照。

していたが¹¹、その後、いくつかの反政府ゲリラは政府と停戦し、SPLA に統合された。ジョングレイ州では、ムルレ人のデイビット・ヤウヤウ (David Yau Yau) が、SPLM の汚職を批判し、反乱を起こした。ヤウヤウは 2011 年に一度、政府と和解したが、2012 年から南スーダン民主運動／南スーダン民主軍コブラ派 (South Sudan Democratic Movement/ South Sudan Democratic Army-Cobra Faction : SSDM/A-CF) を率いて、政府軍と激しく交戦していた¹²。

このように、南部スーダンでは、第二次内戦が終結した後も政治的に不安定な状況が続いており、上ナイル地方では内戦を主導してきた SPLM/SPLA の支配に対する不満から、新たな対立と分裂が生まれていた。

3. 戦闘の勃発：「クーデター未遂事件」の真相

2013 年に入り、与党 SPLM 内の政治的対立は表面化していったが、大規模な戦闘が起きる徴候はなかった。しかし、12 月 15 日以降、情勢は一気に悪化した。本章では、12 月に入ってから、SPLM 内で起こった動きと戦闘勃発までの経緯を示し、内戦の発端となった「クーデター未遂事件」の詳細を明らかにする。

12 月 6 日、マチャルをはじめとする前閣僚メンバーたちは記者会見を開いた¹³。その会見で、前閣僚メンバーたちは、キール大統領の独裁傾向を批判し、市民集会の開催を要求した。これに対し、ワニ副大統領は、マチャルとその一派は不安定と無秩序を引き起こそうとしていると非難し¹⁴、3 月から延期されたままであった国民解放評議会 (National Liberation Council : NLC)¹⁵ を市民集会の代わりに開催することを発表した。

14 日に始まった NLC の冒頭、キール大統領は、「現在、大統領を批判する人々は、1991 年にクーデターを起こして SPLM/SPLA を離れた人々である」¹⁶ と述べた後、第二次内戦中に起きた SPLA の分裂が民族間の対立を引き起こしかに悲惨な結果をもたらしたかを強調した¹⁷。このスピーチに対して、マチャルをはじめとした一部の SPLM の政治家が反発し、評議会を途中退席した¹⁸。翌 15 日、マチャルを含め SPLM の古参メンバーの数人は評議会をボイコットしたが、審議は続行された。

戦闘勃発時の状況に関して、さまざまな情報が錯綜したが、以下では、HRW (ヒューマン・ライツ・ウォッチ) の報告など複数の情報源を基に詳述する¹⁹。

11 Small Arms Survey, "Fighting for spoils: Armed insurgencies in Greater Upper Nile", Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, Issue Brief 18, Geneva: November 2011. 参照。

12 Small Arms Survey, "David Yau Yau's Rebellion", Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, June, 2013. 参照。

13 Sudan Tribune, December 6, 2013. "Senior SPLM colleagues give Kiir ultimatum over party crisis" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49087>) 参照。

14 Sudan Tribune, December 8, 2013. "SPLM abruptly postpones NLC meeting" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49113>) 参照。

15 国民解放評議会 (NLC) は SPLM 党大会にあたるが、2013 年 3 月以降、開催されていなかった。これに対して、党内の意見の差異を解消するため開催するべきだという声が上がっていた。

16 1991 年 8 月、SPLA 司令官のリエック・マチャル、ラム・アコル (Lam Akol)、ゴードン・コン (Gordon Kong) は、最高司令官ジョン・ガランを独裁者として非難した。彼らは、SPLA ナシル派 (SPLA-Nasir) を結成し、ガランに反旗を翻した。一方、ガランは SPLA トリット派 (SPLA-Torit) と名乗る。その後、前者は SPLA 統一派、後者は SPLA 主流派と名前を変え、互いに武力衝突を繰り返した。

17 キール大統領は、1991 年 11 月に起きたボー大虐殺に言及した。この事件では、マチャルはヌエルの民兵組織、白軍とともに約 2000 人のディンカ人を殺害したと非難されている。

18 Sudan Tribune, December 14, 2013. "SPLM leaders pull out of NLC meeting over 'lack of dialogue spirit'" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49181>) 参照。

19 Human Rights Watch, "South Sudan's New War: Abuses by Government and Opposition Forces", August 2014, p.22, Sudan Tribune, December 16, 2013. "South Sudan's presidential guards clash in Juba" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49192>), Radio Tamazuj, December 18, 2013. "Peter Adwok : 'President's order to disarm Nuer guards caused mutiny and chaos in South Sudan'" (<https://radiotamazuj.org/en/article/peter-adwok-president%E2%80%99s-order-disarm-nuer-guards-caused-mutiny-and-chaos-south-sudan>), WEBRONZA. 2013 年 12 月 30 日「南スーダン紛争、作り上げられた『民族対立』—大阪大学・栗本英世教授に聞く」(<http://webronza.asahi.com/politics/articles/2013122700004.html>)。

栗本英世「深刻な南スーダン紛争 民族間で殺戮、遠く国民和解」エコノミスト 92(7), 2014.2. 44-45. 参照。

15 日夕方、NLC 閉会後、キール大統領は大統領警護隊に武装解除を命じる。しかし、数時間後、ディンカ人兵士にだけ再武装が認められたため、ヌエル人兵士が反発した。そして、夜 10 時過ぎ、SPLA 本部がある施設内で、大統領警護隊に属するディンカ人兵士とヌエル人兵士の間で銃撃戦が発生した。翌 16 日早朝には、SPLA の武器庫でも双方の兵士の間で戦闘が始まり、市内の別の兵舎でも銃撃戦が勃発した。昼過ぎ、キール派の兵士たちはマチャル派の兵士たちを兵舎から追い出した後、ジュバ市内に繰り出し、各家を回りながら、ヌエル人を標的にした殺人、掠奪、任意逮捕を行った。その頃、キール大統領は、迷彩色の戦闘服に身を包み、国営テレビを通じて記者会見を行った。私がトリットで見たのは、この記者会見である。会見のなかで、キール大統領は、銃撃戦をリエック・マチャルとその一派によるクーデターと規定し、クーデターは未遂に終わったと発表した²⁰。

キール派の兵士たちはヌエル人兵士だけではなく、一般市民（主に男性）も殺害の対象にした。ニューヨークに本部を置く人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチは、ジュバ市内の各地でヌエル人を標的にした殺人事件が 60 件以上あったと報告している。16 日夜には、200 ～ 400 人のヌエル人市民が居住地区の警察署に集められ、一斉に銃殺されるという集団殺戮も発生した²¹。

17 日、政府はクーデターの容疑で 9 人の政治家を逮捕し、さらに 4 人を捜索中と発表した。数日後、パガン・アムムと前高等教育大臣ピーター・アドウォク（Peter Adwok）が拘束され、最終的に逮捕者は 11 人に上った²²。彼らの多くは、12 月 6 日の記者会見で大統領を独裁者として批判した前閣僚メンバーである。

政府軍によるヌエル人を標的にした暴行は 18 日まで続き、市内に 2 か所ある国連施設には約 2 万人の避難民が押し寄せた。また、同日、大量の遺体を回収したトラックが市内を走り回っているのが目撃されている。当初、南スーダン政府は、死者約 500 人（死者のほとんどは兵士）、負傷者約 700 人と公表した²³が、一般市民の犠牲については触れなかった。市民を含めた実際の死者数はさらに多いと考えられるが、正確な数は不明なままである²⁴。

クーデターの主犯とされたマチャルは 15 日夜にジュバから脱出した。17 日、政府軍はマチャルの自宅を戦車で破壊したものの彼を逮捕することはできなかった。18 日、戦闘後初めて電話取材に応じたマチャルは、クーデターを否定したうえで、「政府軍がヌエル人を標的に殺戮を行い、民族対立を煽動している」と、キール大統領を厳しく非難した²⁵。その後、マチャル前副大統領は、自分を支持する政治家や SPLA を離反したヌエル人将校たちとともに SPLM/A-in-Opposition（以下 SPLM/A-IO）を結成し、キール政権を打倒することを目標として本格的に政府軍との戦闘を開始した²⁶。それに対して、キール大統領を支持する政府側は SPLM/A-Juba と呼ばれるようになった。

20 国営テレビで放送された記者会見は You Tube で閲覧できる。（<https://www.youtube.com/watch?v=boLU2005JDI>）参照。

21 Human Rights Watch, “South Sudan’s New War: Abuses by Government and Opposition Forces”, August 2014, pp.21–28. 参照。

22 Sudan Tribune, December 18, 2014. “Former SPLM secretary-general Amum arrested in Juba” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49239>) 参照。逮捕者は、Deng Alor, Gier Chuang, Kosti Manibe, Cirino Hiteng, Madut Bia, Peter Adwok, John Luk, Majak D’Agoot, Oyai Deng, Ezekiel Lol, Pag’an Amum の 11 人。捜索されていた 2 人、Tabang Deng Gai と Alfred Ladu Gore は逮捕を逃れ、マチャル派の反政府軍に加わった。

23 Voice of America, December 19, 2013. “Crisis in South Sudan Deepens” (<http://www.voanews.com/content/south-sudan-army-says-control-of-northern-town-lost/1813455.html>) 参照。

24 L’Agence France-Presse, November 15, 2014. “50,000 and not counting: South Sudan’s war dead” (<http://www.dailymail.co.uk/wires/afp/article-2836137/50-000-not-counting-South-Sudans-war-dead.html>) 参照。ある援助関係者は、ジュバの戦闘だけで死者は 5000 人以上ではないかと指摘している。

25 BBC News Africa, December 18, 2013. “South Sudan opposition head Riek Machar denies coup bid” (<http://www.bbc.com/news/world-africa-25427619>) 参照。

26 本稿で、反政府軍とは SPLA-IO を指す。

Small Arms Survey, “The SPLM-in-Opposition”, Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, Geneva: 2 May 2014. (<http://www.smallarmssurveysudan.org/facts-figures/south-sudan/conflict-of-2013-14/splm-in-opposition.pdf>) 参照。

一方、クーデター容疑で逮捕された 11 人の政治家のうち、パガン・アムムら 4 人²⁷を除く 7 人は 2014 年 1 月 29 日に解放された。アムムたち 4 人は国家反逆罪に問われ、3 月 11 日からジュバで裁判が行われたが、4 月 25 日に不起訴となり、彼らは保釈された。その後、アムムたちは、ケニアやエチオピアに逃れ、1 月に解放された 7 人のメンバーとともに、SPLM-Former Political Detainees (SPLM-FPD) を結成した。SPLM-FPD は、政府側 (SPLM/A-Juba) や反政府側 (SPLM/A-IO) と異なる第 3 勢力として停戦／和平交渉に参加していくことになる。

はたして、内戦の発端とされる「クーデター未遂事件」は存在したのだろうか。これに関して、政府側とマチャル側との見解は真っ向から対立したままであった。大統領側は、マチャルとその一派によるクーデターがあったと強硬に主張し、一方、マチャル側は、クーデターは政府によるでっちあげであると反論した。政府がマチャル派の反論に耳を貸すことはなかったが、後述するように、2014 年 10 月にタンザニア、アルーシャで行われた SPLM の内部対話の後、政府は紛争の根本的原因について議論することを認めた。

4. 紛争の拡大：政府軍と反政府軍の攻防

12 月 18 日以降、ジュバの治安は一旦、回復したが、戦火は瞬く間に地方に拡大した。とくにヌエルの故地である上ナイル地方で戦闘が激化した。ジョングレイ州、ユニティ州、上ナイル州の州都では SPLA の兵士が次々と離反し、油田地帯を襲撃し、州都を制圧した²⁸。その後、キール派の政府軍とマチャル派の反政府軍の間で激しい攻防が繰り返された。これまでに両軍の戦闘は 7 州で発生したが、本章では戦闘の激しかったジョングレイ州、ユニティ州、上ナイル州の状況とエチオピアで調印された 2 度の停戦合意について説明する。

まず、反乱の火の手はジョングレイ州から始まった。12 月 17 日～18 日、SPLA 第 8 師団長ピーター・ガデット (Peter Gadet)²⁹ 少将が州都ボーを制圧し、マチャルへの支持を表明した³⁰。12 月 19 日、同州アコボでは、ジュバで起きたヌエル人市民殺害の報復と思われる事件も発生した。約 2000 人の武装したヌエル人が国連 PKO の施設を襲撃し、応戦した国連軍のインド兵士 2 人と施設内に逃げ込んだディンカ人 30 人を殺害した³¹。その後、ボーでは、政府軍と反政府軍との攻防が繰り返され、これまでに 4 度、支配勢力が入れ替わっている。12 月 24 日、政府軍は反政府軍をボーから撃退した³²。この奪還作戦では、ウガンダ国軍 (Uganda People's Defence Force: UPDF) が南スーダン政府軍を軍事支援した。ジュバでの銃撃戦直後、ウガンダ政府は、自国民を守るために国軍を派遣したと公表したが、ボー奪還後の 12 月 30 日、南スーダンの治安回復のため、南スーダン政府を軍事的に支援することを公式に表明した³³。翌 31 日には、反政府軍がボーを再制圧し、反政府軍は 2013 年 12 月 31 日から 2014 年 1 月 18 日までボーを支配下に置いたが、1 月 19 日、

27 Pagam Amum の他は、Oyai Deng、Ezekiel Lol、Majak D'Agoot の 3 人。

28 Sudan Tribune, December 23, 2013. "Ex-VP Machar says forces will divert oil revenues from Juba" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49298>) 参照。

29 ピーター・ガデットは、ヌエル人将校。1991 年の SPLA 分裂以降、マチャルの下で SSDF、さらに SSLA に参加して SPLA と戦った。南北内戦終結後も反武装ゲリラを組織して SPLA と戦っていたが、2011 年に政府軍と停戦し、SPLA 司令官となった。Small Arms Survey, "Fighting for Spoils: Armed Insurgency in Greater Upper Nile", Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, November 2011. 参照。

30 Sudan Tribune, December 18, 2013. "S. Sudan army says General Peter Gadet defected from ranks" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49234>) 参照。

31 Sudan Tribune, December 21, 2013. "Attack on UN Akobo base killed 30 civilians, says foreign minister" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49276>) 参照。

32 Sudan Tribune, December 24, 2013. "South Sudan army claims to have retaken Bor from rebels" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49318>) 参照。

33 Sudan Tribune, December 30, 2013. "Accept ceasefire or face defeat, Ugandan leader tells Machar" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49385>) 参照。

南スーダンとウガンダの連合軍はボーを奪還した³⁴。この戦闘で、反政府軍は、撤退時に、教会での市民の殺害、病床での患者の殺害、女性へのレイプなどの残虐行為を行ったと報告されている³⁵。

また、2014年4月には、政府寄りの武装市民がボーの国連施設を襲撃し、少なくとも30人の避難民（多くがヌエル人）が殺害される事件が発生した³⁶。これは後述する反政府軍によるユニティ州の州都ベンティウ奪還直後に起きており、政府側による報復と考えられる。

州都ボーの奪還作戦では、南スーダン政府軍と連合軍を結成しているウガンダ国軍が大きな役割を果たしている。一方、マチャルを支持する反政府軍側にはヌエルの白軍（White Army）が協力している。白軍は、マチャルの指揮下にはないものの、ガデット率いる反政府軍が行っている一部の軍事作戦に参加したとみられている³⁷。

国内の主要な油田があるユニティ州でも両軍が衝突した。12月21日、ユニティ州では、SPLA 第4師団長ジェームズ・コン（James Koang）少将がSPLAを離反し、州都ベンティウを制圧した。彼もマチャルへの支持を表明し、州知事を解任し暫定統治を始めた³⁸。反政府軍が油田地帯を制圧し、石油施設で働いていた従業員が退避したため、石油の生産は停止した³⁹。その後、政府はジョングレイ州とユニティ州に非常事態宣言を発令した。

2014年1月初旬から政府軍は反撃を開始し、1月10日にベンティウを奪還した⁴⁰。この際、ダルフルを拠点に活動するスーダンの反政府武装組織、正義と平等運動（Justice and Equality Movement : JEM）⁴¹が南スーダン政府側に同盟軍として参加したとみられている⁴²。

1月の停戦合意後もベンティウでは両軍の攻防が続いた。4月14～15日、反政府軍がベンティウを急襲し、制圧した⁴³。その時、市内のモスクで、反政府軍兵士が数百人のダルフル人を集団虐殺する事件が発生した⁴⁴。5月4日、政府軍が再びベンティウを再制圧した。その後も州内では反政府軍と政府軍との戦闘が繰り返されたが、ベンティウは依然として政府軍の支配下にある。

反乱はもうひとつの油田地帯である上ナイル州でも勃発した。12月25日、SPLA 第7師団から離反した兵士たちが州都マラカルの一部を制圧した⁴⁵。この時、政府軍は数日後にマラカルを奪還した⁴⁶。マラカルで

34 Sudan Tribune, January 18, 2014. “South Sudan army says Bor recaptured from rebel forces” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49629>) 参照。

35 Human Rights Watch “South Sudan’s New War: Abuses by Government and Opposition Forces”, August 2014, pp.52–53. 参照。

36 Sudan Tribune, April 17, 2014. “30 people killed following clashes at UN base in Jonglei: reports” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article50689>) 参照。

37 白軍は主にロウ・ヌエル（Lou Nuer）出身の武装した若者たちが組織する民兵組織。Young, John. 2007. “The White Army: An Introduction and Overview”, Small Arms Survey HSBA Working Paper No.5, June を参照。白軍は、1991年の SPLM/SPLA 分裂時に起きたボー大虐殺でマチャルに協力し、その名前が知られるようになった。

38 Sudan Tribune, December 21, 2013. “Unity state’s 4th division commander defects, assumes governorship” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49274>) 参照。

39 Sudan Tribune, December 26, 2013. “Dissident general says Unity state oil production has stopped” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49343>) 参照。

40 Sudan Tribune, January 10, 2014. “S. Sudan army says recaptured oil-rich town from rebels” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49512>) 参照。

41 Small Arms Survey “Justice and Equality Movement (JEM) (AKA JEM-Jibril)”, Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, August 2014: Geneva. 参照。

42 Sudan Tribune, January 11, 2014. “JEM dismiss claims by S. Sudan rebels they took part in Bentiu recapture” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49525>) 参照。

43 Sudan Tribune, April 15, 2014. “Rebels say they have recaptured Unity state’s Bentiu from South Sudan army” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article50658>) 参照。

44 Human Rights Watch, “South Sudan’s New War: Abuses by Government and Opposition Forces”, August 2014, pp 65–67. 参照。

45 Radio Tamazuj, December 25, 2013. “South Sudan: Fighting continues inside Malakal and near Bor” (<https://radiotamazuj.org/en/article/south-sudan-fighting-continues-inside-malakal-and-near-bor>) 参照。

46 Sudan Tribune, December 24, 2013. “Machar’s forces capture Upper Nile state capital, Malakal” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49320>) Sudan Tribune, December 29, 2013. “South Sudan army says Malakal under government control” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49371>) 参照。

は6度、支配勢力が入れ替わっている。反政府軍は、1月14日にマラカルを再制圧した後、1月20日まで支配する⁴⁷。その後、1月20日から2月18日までは政府軍⁴⁸、2月18日から3月19日までは反政府軍⁴⁹、3月19日以降は政府軍が支配している。マラカルでも、両軍が市民への暴行を行っており、教会で市民の集団殺戮が発生したと報告されている⁵⁰。

上ナイル州の攻防では、2011年に反政府武装ゲリラとして活動し、その後 SPLA に統合されたシルック人の武装組織が政府軍に協力していると言われている⁵¹。一方、反政府軍はスーダン領内で軍事訓練をしており、スーダンが反政府軍に武器弾薬を提供していると考えられている⁵²。

両軍の戦闘が一進一退の攻防を続けるなか、他の地方でも政府軍からの離反が相次いだ。1月中旬には、中央および西エクアトリア州で SPLA の一部の部隊が離反し、反政府軍についた⁵³。2月、政府は SPLA 兵士の60～70%が SPLA を離反し、彼らの多くが反政府軍側についたと認めた⁵⁴。この後も、SPLA からの離反は続き、4月後半には、西バハル・エル・ガザール州で一部の部隊が政府軍から離反した⁵⁵。

次に、政府側、反政府側双方の停戦交渉について述べる。両勢力は IGAD の仲介の下、2014年1月4日から、エチオピアの首都アジスアベバで協議を開始した。交渉では、南スーダン政府はマチャル派 (SPLM-IO) に対し無条件での停戦合意を求めたが、マチャル派は政府に拘束されているクーデター容疑者全員の釈放を要求し、双方の代表が協議をボイコットした。1月中旬、政府軍が主要都市であるボー、ベンティウ、マラカルを奪還すると実質的に協議が始まり、1月23日、両勢力の間で停戦合意が調印された⁵⁶。しかし、合意から数日後には戦闘が再開され、政府軍はマチャルの故郷の町、ユニティ州のレールを攻撃した。この戦闘で、病院は粉々に破壊され、何千人もの住民が避難した⁵⁷。

4. 解消されない対立：進展しない停戦／和平交渉

本章では、2014年5月9日の停戦合意および和平交渉の進展と争点、そして停戦合意以後も再発する戦闘について概要を述べる⁵⁸。

5月初旬、アメリカのジョン・ケリー国務長官がジュバに入り、両派の代表に即時停戦を呼びかけた。5月6日、アメリカ政府は大統領警護隊のマリアル・チャヌオン (Marial Chanuong) 少将と反政府軍のピー

47 Sudan Tribune, January 20, 2014. “South Sudan army retake Malakal town” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49653>) 参照。

48 Sudan Tribune, February 21, 2014. “S. Sudan admits to tactical withdrawal in Malakal” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article50041>) 参照。

49 Sudan Tribune, March 19, 2014. “South Sudan army recaptures Upper Nile capital from rebels” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article50348>) 参照。

50 Human Rights Watch, “South Sudan’s New War: Abuses by Government and Opposition Forces”, August 2014, pp 69–74. 参照。

51 Johnson Olony は、2011年から上ナイル州で反政府ゲリラ活動を開始。2012年2月、反政府ゲリラ SSDM/A のリーダーとなったが、2013年6月、SPLA と和解した。Small Arms Survey Sudan “Fighting for Spoils: Armed insurgencies in Greater Upper Nile”, Human Security Baseline Assessment (HSBA) for Sudan and South Sudan, Sudan issue brief 18, November 2011, Geneva. 参照。

52 Pachodo.org, October 18, 2014. “Sudan considers arming, training South Sudan rebels, leaked document says” (<http://pachodo.org/latest-news-articles/news-from-various-sources/9484-sudan-considers-arming-training-south-sudan-rebels-leaked-document-says>) 参照。

53 Yei, Morobo, Mundri で SPLA 兵士の離反があった。Radio Tamazuj, January 5, 2014. “SPLA confirms defections in Equatoria, heavy fighting in Jonglei” (<https://radiotamazuj.org/en/article/spla-confirms-defections-equatoria-heavy-fighting-jonglei>) 参照。

54 Sudan Tribune, February 17, 2014. “S. Sudan admits mass defection of army troops to Machar rebels” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article50004>) 参照。

55 Mapel と Wau で離反した部隊が政府軍と交戦。Sudan Tribune, April 25, 2014. “Heavy fighting erupts in W. Bahr el Ghazal’s Mapel town” (<http://sudantribune.com/spip.php?article50771>) 参照。

56 Sudan Tribune, January 23, 2014. “South Sudan government, rebels sign ceasefire agreement” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article49693>) 参照。

57 Sudan Tribune, February 1, 2014. “Leer residents forced to flee alleged army offensive in Unity state” (<http://sudantribune.com/spip.php?article49807>) 参照。

58 停戦／和平交渉の進展については、栗本 2014 “JPF 報告：南スーダン情勢 2014 年 8 月および 2014 年 9 月 1 日～11 月 16 日” 参照。

10月5日、IGAD 首脳陣が両派の代表と直接話し合う必要があるとして、和平交渉は一旦、中断された⁶⁸。その後、10月12日から、タンザニアのアルーシャで、与党 CCM（タンザニア革命党）の仲介の下、SPLM 内の和解を目的とした党内対話が始まった。なお、タンザニアは IGAD 加盟国ではなく、SPLM の党内対話はアジスアベバでの和平交渉とは別に進められた。会合では、SPLM-Juba、SPLM-IO、SPLM-FPD の3者の代表が顔を合わせ、対談後、紛争の根本原因を議論することを明記した「枠組み合意」が調印された⁶⁹。このアルーシャでの合意は、遅々として進まないアジスアベバでの和平交渉にプラスに働くと思われた。しかし、キール大統領は、10月27日から反乱軍がユニティ州で行った戦闘に抗議して交渉チームをエチオピアから引き揚げ、交渉は再び中断された⁷⁰。なお、この戦闘では、反乱軍が石油地帯を襲撃し、ベンティウ攻略を目指したが、数日間の戦闘の末、政府軍に撃退されている。

和平交渉に進展がみられたのは11月に入ってからである。11月6日、アジスアベバで再び IGAD 特別サミットが開催され、IGAD 首脳陣は、両派に対しこれまで以上に強い態度で臨んだ。サミットでは、キール大統領とマチャル副大統領が1対1の直接対談を行った。そして、7日、両派は、1. 暫定政府の下、政府軍（SPLA-Juba）と反政府軍（SPLA-IO）双方がそれぞれ大統領と首相の指揮下で併存すること、2. 大統領と首相で権限を分有することで合意に至った⁷¹。また、IGAD は暫定政府内の権力分有に関する合意達成のため両派に対し15日の猶予を与えた⁷²。さらに停戦合意が達成されなかった場合、両派の責任者に対し武器禁輸措置などの制裁を課すことを決め、戦闘が継続した場合、IGAD が AU（アフリカ連合）、国連と連携し軍事介入を行うと警告した。9日には停戦協定が再び調印され、両軍が敵対行為の禁止と南スーダン国内から30日以内に外国軍を撤退させることで合意した⁷³。停戦合意は1月、5月に続き3度目の調印となる。しかし、翌日には上ナイル州で戦闘が再開され⁷⁴、停戦合意はわずか一日で破られた。11月下旬には、政府軍が上ナイル州の拠点からジョングレイ州北部を攻撃し、大規模な戦闘が数日間、続いた⁷⁵。

11月下旬、15日の猶予期間は過ぎたが、和平交渉は再開されず、IGAD、AU、国連安保理は何も行動を起こさなかった。12月中旬から両派の和平交渉はアジスアベバで再開されている⁷⁶。

和平交渉において、暫定政府の設置に関する主な争点は、政府内の権力分有である。新設される首相ポストに関して、政府側は、執行権を持たない首相であれば設置を認めるとしているのに対し⁷⁷、反政府側は

68 Sudan Tribune, October 5, 2014. "IGAD says South Sudan peace talks adjourned until 16 October" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52647>) 参照。

69 Sudan Tribune, October 21, 2014. "S. Sudanese rival factions sign framework agreement in Tanzania" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52791>) 参照。

70 Sudan Tribune, November 2, 2014. "President Kiir withdraws negotiating team from peace talks" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52927>) 参照。

71 Sudan Tribune, November 8, 2014. "South Sudan rivals to command separate armies during transitional period" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52983>) 参照。

72 Sudan Tribune, November 9, 2014. "South Sudanese factions given 15 more days to reach an agreement" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52978>) 参照。

73 Sudan Tribune, November 9, 2014. "S. Sudan's warring parties sign renewed ceasefire deal amid calls for foreign troops to withdraw" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52997>) 参照。

74 Sudan Tribune, November 10, 2014. "S. Sudan's rival parties trade accusations over ceasefire violations" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article53004>) 参照。

75 Sudan Tribune, November 28, 2014. "South Sudanese rebels accuse government of renewed hostilities" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article53162>) 参照。

76 Sudan Tribune, December 19, 2014. "South Sudan rivals resume peace talks in Ethiopian capital" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article53384>) 参照。

77 Sudan Tribune, October 27, 2014. "South Sudan president accepts non-executive prime minister for rebels" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52858>) 参照。

副大統領を廃止して首相を設置することを要求している⁷⁸。

5. おわりに：不透明な和平への道筋

南スーダンは内戦勃発から1年が経過した。アジスアベバでの停戦／和平交渉は、キール派(SPLM-Juba)とマチャル派(SPLM-IO)それぞれの政治家たちの権力争いの場となっている。両派は実質的に交渉を始める前に軍事作戦を行う傾向があり、交渉を有利に進めるために戦闘を行っていると考えられる。

また、南スーダン政府軍は、ウガンダ軍やスーダンの反政府ゲリラ、国内の反政府ゲリラと同盟を組んでおり、反乱軍は、ヌエルの民兵組織やスーダンから軍事的支援を受けている。両軍とも、自分たちが他国の正規軍や武装組織から軍事的支援を受けていることを否定しているが、いわば公然の秘密となっている。このように、和平交渉の仲介役であるIGAD加盟国の一部が南スーダン国内の紛争に軍事介入していることが、和平交渉の停滞するひとつの理由でもある。

政府側と反政府側との停戦合意は1月、5月、11月に調印されたが、いずれも数日間で破られており、実効性に欠けている。両派は、相手が先に停戦合意違反を犯したと非難の応酬をしているが、これは両派とも紛争を終わらせる意思がないととられても仕方がない発言である。

紛争の長期化とともに犠牲者と避難民は増加の一途をたどっている。ただ、国連は、犠牲者に関して正確な人数を公表しておらず、数万人と指摘するにとどまっている。一方、ICG（国際危機グループ）は、少なくとも5万人が戦闘により死亡したと見積もっており、国連は、犠牲者のためにも死者数を把握する努力をすべきである、と指摘している⁷⁹。

戦闘地域の都市は、両軍の攻防により、病院、学校、マーケット、小店舗、銀行などの施設が破壊され、ゴーストタウンと化している。また、農村部でも、両軍の兵士とも食料や家畜を掠奪しており、大きな被害が出ている。農作業はまともに行われていないため、各家庭では備蓄食料が底をついていると考えられる。WFP（世界食糧計画）などの国際機関は、現在も大規模な食糧援助を続けているが、南スーダンは2015年に大規模な飢餓に襲われると予測されている⁸⁰。

南スーダンでは、すでに190万人が避難民となっており、そのうち49万人が、難民として、エチオピア、スーダン、ウガンダ、ケニアなどの隣国に退避している⁸¹。国内避難民(IDP)は、主要都市にある国連施設やIDPキャンプなどで避難生活を続けているが、いずれも生活環境はきわめて悪い。5～6月にかけて、ジュバではコレラが流行し、国連PKO施設内でも多くの犠牲者が出た⁸²。また、6～7月にかけて、ベンティウの国連施設に避難民が押し寄せ、施設内の人口が4万人を超えた。劣悪な衛生状態に置かれた施設内では、栄養失調と病気のため、毎日のように死者が出ている⁸³。また、治安の問題も解決されていない。ジュバ、ボー、ベンティウでは、武装市民が国連施設内の避難民を狙って襲撃する事件がたびたび発生している。また、避難民の中にも武器を持ち込んでいる者がおり、施設内で発生する避難民同士の暴行事件

78 Radio Tamazuj, November 11, 2014. "SPLM-IO propose removal of S Sudan VP Igga" (<https://radiotamazuj.org/en/article/splm-io-propose-removal-sudan-vp-igga>) 参照。

79 International Crisis Group "South Sudan: A Civil War By Any Other Name", April 10, 2014. および The Guardian, December 15, 2014. "South Sudan marks first anniversary of civil war" (<http://www.theguardian.com/world/2014/dec/15/south-sudan-first-anniversary-civil-war>) 参照。

80 FEWS NET, November 2014. "Despite harvests, many households in Greater Upper Nile to exhaust food stocks by December" (<http://www.fews.net/east-africa/south-sudan>) 参照。

81 UNOCHA, "South Sudan Crisis Situation Report" No.68 as of 1 January 2015, 2 January 2015. 参照。

82 Sudan Tribune, June 16, 2014. "South Sudan: 1,700 cholera cases in Juba, 37 deaths" (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article51366>) 参照。

83 Radio Tamazuj, June 22, 2014. "OCHA: Bentiu camp "sharply" deteriorates, could hit 60,000 people" (<https://radiotamazuj.org/en/article/ocha-bentiu-camp-%E2%80%9Csharply%E2%80%9D-deteriorates-could-hit-60000-people>) 参照。

では死者も出ている⁸⁴。

一方、隣国に暮らす難民も先の見えない日々を送っている。私は、2014年8～12月、ウガンダのキリヤドンゴ難民村で断続的にフィールドワークを行い、難民に対し聞き取り調査を行った。キリヤドンゴ難民村は、戦闘発生から現在までに3万人の南スーダン難民を受け入れている。難民の大半はディンカ人であるが、ヌエル人やそれ以外の民族出身者も含まれている。難民たちは、村に到着すると、NGOの職員から、食糧の他、マットやテントシート、山刀などの生活必需品を受け取る。その後、ウガンダ政府から土地を分け与えられるまで、難民受入センターで生活することになる。

キリヤドンゴ難民村では、ディンカ人とヌエル人を別々の区画に居住させるような措置はとられていない。村内では、散発的に両者の間で暴行事件が起きているものの、それほど深刻ではない。しかし、ケニアのカクマ難民キャンプでは、2014年11月、ディンカ人とヌエル人の難民同士の暴行で20人が死亡する事件が発生しており、難民間の対立は無視できない問題である⁸⁵。

また、内戦は、南スーダンの経済にも大きなダメージを与えている。主な要因は、国庫の大半を占める石油収入の減少である。ユニティ州の油田は生産停止し、上ナイル州の油田が稼働を続けているものの、生産量は独立直後（2011年）の半分の日産16万バレルに落ち込んでいる⁸⁶。さらに、最近の原油価格の下落は石油収入の減少に追い打ちをかけている⁸⁷。

南スーダンでは、乾季に入ると軍隊の移動が容易になり、戦闘が激化する傾向がある。新年を迎え、難民村でインタビューしたヌエルの若者から久しぶりにメールが来た。彼は戦闘を逃れてジュバからキリヤドンゴ難民村に退避していたが、半年、難民村に滞在した後、ジュバに帰っていた。彼のメールには、「ジュバではみんなが希望ではなく死について語っている。自分もキール大統領を倒すことを決めた。あす銃を取りに行ってくる」と、書かれていた。インタビューをした時には、今は大学に行くことが目標です、と話していた青年が、数日後には反政府軍の兵士となっているのかもしれない。そう思うと複雑な気持ちになった。

南スーダンでは、和平への道筋が不透明なまま、今も多くの人々が戦闘に巻き込まれている。今後、政府側（SPLM/A-Juba）、反政府側（SPLM/A-IO）の双方が、どのような政治的決着を図るのか予測ができないが、再び泥沼の内戦を招くような事態にならないことを願うばかりである。

（むらはし いさお／大阪大学大学院人間科学研究科）

84 Sudan Tribune, December 29, 2014. “UNMISS destroys weapons seized from IDPs in Jonglei” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article53504>) 参照。

85 Sudan Tribune, November 1, 2014. “20 killed in renewed clashes in Kenya’s Kakuma refugee camp” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article52913>) 参照。

86 Sudan Tribune, January 2, 2015. “S. Sudan generated \$3.3bn from oil exports: official” (<http://www.sudantribune.com/spip.php?article53528>) 参照。

87 政府は、国家収入の多くを軍備の増強に費やしているため、石油収入の減少は政府軍の戦力低下につながるおそれもある。ただ、2014年、政府はすでに中国から大量の武器弾薬を購入した。

フィールド通信

バラザでのおしゃべりを日本の大学に

菊地 滋夫

バラザ——スワヒリ文化の英知

東アフリカのインド洋に面した港町なら、ほとんどのストリートにごく普通に見られるバラザ。「腰掛け」「ベンチ」はたまた「縁側」などなど、日本語ではいろんなふうに訳したくなる場所です。挨拶を交わしたり、コーヒーを飲みながらおしゃべりを楽しむ人。野菜や果物などの農作物を売る人。伝統的なボードゲームの一種であるバオをはじめ、カロム、チェス、麻雀などのゲームに興じる人。遊んでいる子どもを見守っている大人。なんとなく座っている人…。人々はバラザでおもしろい時間を過ごしています。

2006 年以來、わたしは明星大学の学生と毎年のようにザンジバルのストーンタウンを訪れています。フィールドワークという名称の授業の一環

ですが、何らかの調査を行うというわけではなく、学生たちは、身振り手振りを交えて、日頃学んでいる（はずの）英語を使ってコミュニケーションの実践に取り組むのです。つまり、あくまでも現地の人たちとの「おしゃべり」を楽しむことが主眼の授業です。

ザンジバルにはアフリカ系、アラブ系、ペルシャ系、それらの混血、インド系などの様々な出自を持つ人々が暮らしています。宗教的にはイスラーム教徒が 90 数パーセントを占めるとされますが、主流派であるスンナ派のいくつかの法学派に加えて、街にはシーア派のモスクもあり、さらには少数ながらヒンドゥー教徒や、大陸側から移ってきたキリスト教徒も共存しています。こうした多種多様な人々がゆるやかにつながり、ともに生きるコミュニティを形成していくうえで、バラザの果たす役割は小さくなかったのではないかと思います。その意味で、バラザはスワヒリ文化の英知だ、とも言ってみたくなのです。

バラザでのおしゃべりで気づかされること

明星大学から毎年ザンジバルを訪れているのは、人文学部国際コミュニケーション学科に在籍する学生たちです。彼女／彼らはコミュニケーション論、異文化理解論などの学習を踏まえ、実践的な英語（または中国語）によるコミュニケーションを学んでいます。約 1 週間のザンジバル滞在中に最も多くの時間を割くのは、先ほど触れましたように、現地の人たちとの「おしゃべり」です。今日



写真 1 バラザでコーヒーを売る人（ザンジバル）

の大学教育で盛んに取り入れられているプレゼンテーションでもなく、ディスカッションでもなく、ましてディベートでもありません。

おしゃべりの内容は、たとえばこんな感じ
です。

「どこから来たの？ 中国？ 韓国？」

「日本」

「日本のどこ？ 東京？ 大阪？ 熊本？」

「東京」

「学生？」

「学生」

「大学の？」

「大学の」

「何を勉強しているの？」

「あ…あ…英語」

「なんでそんなに英語が下手なの？」

「…」

「卒業したらどうするの？」

「あ…あ…英語の教師？ かなあ…」

「？」

「じゃあ、君はここで何をしているの？」

「サングラスを売りながら、自分で英語の勉強を
しているんだよ」

「すごい！」

「家族を助けなければいけないしね」

「大変だね…どんなときに幸せを感じる？」

「こんなに素敵な道が続いていて、いろんな店が
あって、コーヒーの香りが漂っていて、それに
こんなに素敵な人たちに囲まれていて、こんな
幸せの他に何を望めばいい？」

上記の現地の若者の最後のことばを聞いた学生
は、どういうわけか涙が止まらなくなってしまっ
たそうです。

担当教員としては、アフリカに対する偏った見
方を相対化し、異文化理解を深めて欲しいと願っ
て始めたプログラムでした。しかし、それ以上に
学生たちが異口同音に語るところによれば、同世
代の若者などのおしゃべりを通して見えてくる



写真2 バラザでおしゃべりを楽しむ（ザンジバル）

人々の暮らし、つまり、経済的には豊かではな
くとも、助けあいながら前向きに生きる姿は、教員
の想像をはるかに越えて、学生たちの目にまぶし
く映るようです。バラザでの出会いという経験は、
学生たちが自らの生き方を顧みる重要な契機にな
りました。

学生たちを輝かせる環境

大学では眠そうにしていたり（バイトのしす
ぎ？）、浮かない表情をしていることが多い学生た
ちですが、なぜかザンジバル滞在中は信じられな
いほど生き活きとしていて、キラキラと輝いてい
ます。それはいったいなぜなのでしょう。

様々な答えが考えられますが、わたしは最近こ
んなことを考えています。

徳島県南部のある町は、自殺大国・日本におい
て極めて自殺率が低いそうです。この町で4年に
渡って現地調査を行った岡檀さんは、つぎの5つ
の自殺予防因子を挙げています（岡 2013）。

- ・ いろんな人がいて良い、いろんな人がいた方が
良いという価値観
- ・ 家柄などにとらわれない人物本位主義
- ・ 「どうせ自分なんて」とは考えない（自己効力感）
- ・ 悩みや困りごととはオープンに
- ・ ゆるやかにつながる（関心は持つが、監視はし
ない）

わたしは、学生たちにとってのザンジバルはまさにこういう環境なのではないかと思うのです。

元からあるホスピタリティ精神と、観光産業が非常に盛んであることが相まって、ザンジバルを訪れるいろんな人は歓迎されます。地元にも様々な背景を持つ人々がいることが、肌の色や顔つきなどからもわかります。そんな「いろんな人」の一人として、自分が受け入れられていることを学生は実感します。

ザンジバルでは、家柄はもちろん、自分が通う大学の知名度や偏差値もいっさい関係ありません。

学生たちは英語をうまく話せない自分という現実と直面しながらも、同時に、ファシリテーション上手のザンジバルの人々に助けられて、意外とコミュニケーションが取れることにも驚きます。カタコトの英語かもしれないけれど、それでもちゃんと通じるじゃないか、それに何より楽しいし！

「旅の恥はかき捨て」ではありませんが、ザンジバルでは日本にいたときよりも心をオープンにして、いろいろと語り合うことができます。不思議と日本人学生どうしの垣根も低くなる様子を見て取ることは容易です。

ある種の均質性を前提としたコミュニティであれば、そこからの逸脱は監視の対象となるでしょう。しかし、そもそもが多様である環境においては、互いの違いゆえに関心は持たれますが、「逸脱は許さないぞ」的な意味で監視されることはありません。学生たちは、そうしたゆるやかなつながりを楽しんでいるように見えます。

大学のバラザ化

—学部学科横断クラスの初年次教育

ザンジバルを訪れる授業がスタートした頃、18歳人口の急激な減少に伴って、明星大学では入学者の学習意欲や学力の多様化が目立ち、離籍する学生も増加する傾向にありました。そこで2008年度後期より、新たな全学的初年次教育の検討が始まりました。たまたま検討委員の一人に指名されたわたしは、迷わず「バラザでのおしゃべり」をイメージした授業を提案しました。それは、約30

名1クラスに7つの学部の様々な学科の学生たちが入り交じり、互いに異なる思いや考えを語り合うところに重きをおいた授業です。1年半に及ぶ学内での議論と準備を経て、2010年4月より、70名のクラスからなる全学初年次教育科目（1年前期）が開講されました（菊地 2013）。

クラスのなかでは、約6名ずつ5つのグループになって語り合いますが、メンバーは固定ではなく、多くの場合、3～4回の授業ごとにグループをシャッフルします。担当教員によっては、できるだけ多くの様々な学生と接することができるようにとの配慮から、毎回シャッフルするクラスもあります。話題は各回でそれぞれ設定されており、まずは個人の考えをワークシートに記入し、それをもとにグループ内で話し合います。その内容を模造紙などにまとめてクラス全体に向けて発表する機会も度々設けられています。

こうして見ると、ディスカッションやプレゼンテーションといった大学教育におけるアカデミック・スキルの定番のような要素もあるわけですが（大学の初年次教育であれば、ある意味、当然でしょう）、そのベースにあるのは、あくまでも価値観や考え方が異なる者どうしの語らいであり、「おしゃべり」なのです。

たとえば、「とりあえず留学しようかなと考えているんだけど」とつぶやく国際コミュニケーション学科の学生がいれば、その存在は他の学生には大いに刺激になるようすし、教師を目指す教育



写真3 学部学科の異なる多様な学生が語り合う授業

学部学生の存在は、将来の進路などは考えないようにしている他学部の学生にとっては自らを省みる契機となります。将来のことを考えていない学生でさえも、ガチガチに進路を決めてかかっていた学生にとっては良い意味で新鮮であり、別の視点から考え直す機会にもなります。

詳述する余地はありませんが、岡さんが指摘した5つのポイントは、この学部学科横断クラスにも驚くほど共通して見出すことができます。

まず何よりも、異なる学部学科に属し、異なる背景、異なる考えを持つ学生が集まっていることが、学生たちにとって大きな価値として受けとめられています。上述のように、そうした違いが、新たな視野を互いに開かせるという効果をもたらします。したがって、学部ごとのいわゆる受験偏差値の開きなどは、ここでは問題になりません。単一の価値の物差しで測られる学力ではなく、学生の多様性が積極的に評価される環境にあるからです。また、そうした環境には、学生に「自分にも何かができるはず」と思わせる作用があります。さらに、1年前期だけの短い期間のクラスであるだけに、かえって何でも話し易いという側面もあるようです。関心は持つけれども、監視はしない、そんなゆるやかなつながりのなかで、学生たちは輝いているように思われてなりません。

少人数クラスや、そこでのグループワークへの評価は非常に高く、いずれも90パーセントほどの学生が肯定的に評価していますが、学部学科横断クラスへの評価を尋ねると、さらに数パーセント数値が上昇します。岡さんの著書の書名をもじって言えば、学部学科横断クラスは、まさに「生き心地の良いクラス」なのです。学生たちが見せる生き活きとした表情は、明らかにザンジバルで見せるものに通じるものがあります。

この全学初年次教育科目では、初回と最終回の授業で無記名のアンケートを実施していますが、たとえば「学生時代にすべきことを考えていますか」との設問をはじめ、ほとんどの設問への回答は望ましい方向へと変化しています。この授業の導入から5年が経過して、大学全体の離籍率

は低下し、就職等の進路決定に関する数値は向上しました。

今日の日本の大学教育では、グループワークを取り入れた授業は急速に普及しつつありますが、いくつもの学部からなる横断的なクラス編成のもとで、入学動機や将来へ向けての考え方の大きく異なる学生たちが語りあう授業を1年生全員必修で実施する大学は一般的ではありません。それでも明星大学での取り組みは、近年、他大学にも少しずつ影響を与え始めており、首都圏のいくつかの私立大学では、学部学科横断クラスによる初年次教育を導入する動きがあります。

むすびにかえて

アフリカと日本の関わりを考えたとき、「日本はアフリカに対して何ができるか」といった姿勢が一般的です。気がつくといつもわたしたちはそのような眼差しをアフリカに向けているようです。しかし、その逆はあり得ないのでしょうか。アフリカは、日本やその他の先進諸国から何かをしてもらうだけの存在なのでしょうか。

わたしはそうは思いません。スワヒリ文化の英知であるバラザでのおしゃべりから生まれた授業は、間違いなく日本の若者に良い影響を与えています。その進展が、今後の日本の大学教育にどんな力をもたらしてくれるのか、とても楽しみです。

Africa for Japan!

参考文献

- 岡 檀、2013、『生き心地の良い町—この自殺率の低さには理由がある』、講談社。
- 菊地滋夫、2013、「学部学科を超えた他者との対話が切り拓く地平—明星大学における初年次教育の取り組み—」『私学経営』、No. 465、pp. 17-22、公益社団法人私学経営研究会。

(きくち しげお／明星大学)

グンダグンドーエチオピア・ティグライ州秘境の修道院—

青島 啓太

エチオピアの北部、エリトリアとの国境に面して広がるのがティグライ州である。エチオピアのキリスト教文化を理解するためには、ティグライ地方における宗教史の研究や修道院、教会建築の遺構についての研究が不可欠である。世界遺産にも登録されているラリベラの岩窟教会群は有名であるが、他にも、ロッククライミングをするような険しい崖を登ってようやくたどり着く、アブナヤマタ（Abna Yamata Guh）などの岩窟教

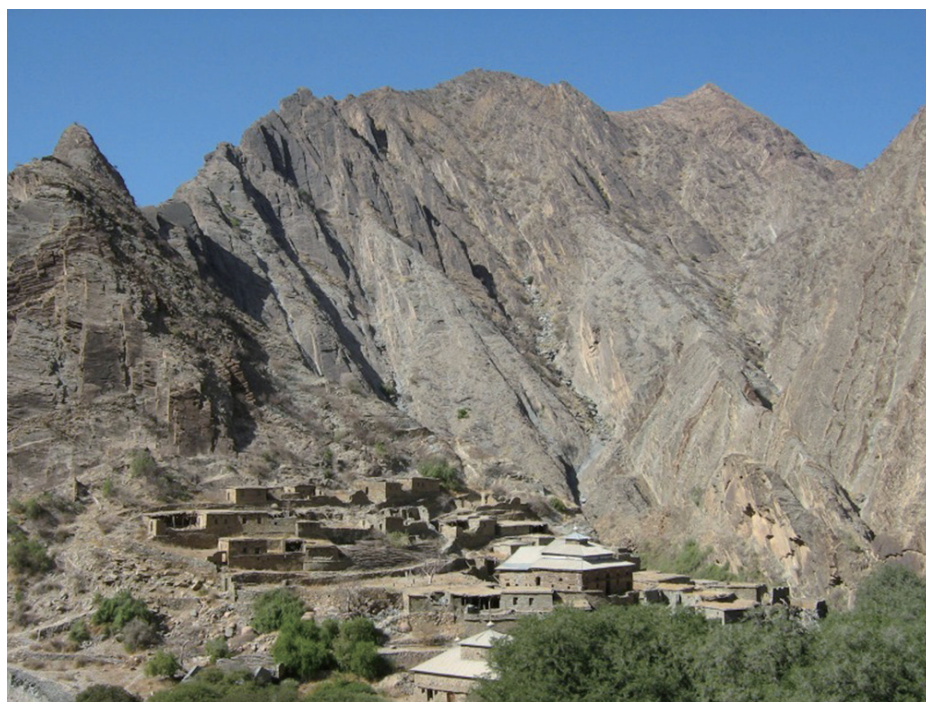


写真1 グンダグンド修道院の全景 撮影：設楽知弘

会は、ティグライ州の中でも非常に興味深い建築遺構である。中でも、本稿で紹介するグンダグンド修道院（Gunda Gundo）（写真1）は、ティグライ州の北部の深い渓谷に位置するエチオピア正教エステファノス派に属するとされる修道院であり、ティグライ州に残る宗教的な遺構として、歩いて8時間を要するその立地や、建築の構法的な特色から見ても非常に稀有な存在である。

修道院の成り立ち

グンダグンド修道院の最大の特徴は、2400mと標高の高い都市アディグラットから約1500m下った、海拔950mの深い谷底に立地することである。このアクセス困難な地理的条件により修道院の生活環境は維持され、敵の侵入から保護されてきたとされている。

修道院の起源は15世紀に遡り、中世のエチオピ

ア正教会内部における宗派の分離を理解する上で、非常に重要なものである。グンダグンド修道院は、修道僧エステファノス（1394-c. 1444）¹の命により、弟子イエスハクが創設したとされる。このエステファノスは、帝権を否定して教義をめぐって対立したためエチオピア正教会内部から異端視されていた。そのため、対抗勢力からの度重なる攻撃や破壊を受け、再建を繰り返しながら移動して最終的に急な渓谷の奥深くに築造された。15世紀の最盛期には、少なくとも200人が生活する修道院を中心とした建築群であった。しかし現在では、近年の気候変動から作物が不作となり、また度重なる洪水の被害に遭ってきたことも影響して、修道僧らの転出が加速して貴重な建築遺産の荒廃

¹ エステファノスらの活動に関しては、僧院に保管されている「グンダグンド文書」に記載され、André Caquot, Robert Beylot, Claude Lepage らによって明らかにされた。

が進んでいる。国立メケレ大学の遺産保護学科は、慶應義塾大学の三宅理一教授（当時。現在藤女子大学教授）らの協力で2007年に設立された。創立以来、ティグライ州文化観光局らと協力して、このグンダグンド修道院の歴史的な位置づけと、この地方における独特の建築構法に注目した研究をしながら、その修復と保全を進めている。筆者は、2008年から1年間専任講師としてこの調査・修復活動にかかわると共に、それ以降も研究チームの一員として計画に参加している。そしていよいよ、2014年からは、3年の修復計画をもとに、具体的な修復保全プロジェクトが始まった。

グンダグンドへの道のり

ティグライ州の首都であるメケレ市から、エリトリアの国境に向かって2時間ほど車を進めると、アディガラッドという都市にたどり着く。メケレの街で手に入るパンとは、比べ物にならないほどの美味しいパンが食べられる街で、それを楽しみに向かう。その周辺で、遺産保護の大工仕事を依頼できる職人と待ち合わせ、さらに車を

を10分ほど走らせると、グンダグンドに向かう道の車で行ける限界の地点にたどり着く。坂道を下る直前にある小さな集落で、資材を運ぶためのロバを借り受け、最後のコーヒーを頂く。ここからは、いよいよ険しい山道を谷底に向かって下ってゆく（写真2）。

ひたすら道なき道を4時間ほど下ると、日が傾き始めたあたりでようやく崖道が終わる（写真3）。グンダグンドには乾季を選んで現地へと向かう必要があるが、ここに来てようやくその理由を理解する。グンダグンドは、谷底に流れる涸れ川の中州に建つ修道院であり、雨季には周囲から流れ込



写真2 地元の農民からロバを借り、高低差1500mの道のりを歩いて建築資材を搬送する
撮影：清水信宏



写真3 溪谷の深い底に向かってひたすら下っていく道のり 撮影：清水信宏



写真4 グンダグンド修道院の配置 撮影：三宅理一

む水で山道が閉ざされ、山道に不慣れな我々では危険である。このため、乾季で干上がった川底を歩きながら、最短ルートで向かう必要がある。川が流れたであろう道を歩き、日が暮れるころようやくグンダグンドの建築群にたどり着く。

グンダグンドは、2つの河川が合流する地点に位置し、石堀に囲まれた1.8haの敷地中に約30の僧房と教会が建つ(写真4)。河川に沿った約0.3haの土地は農地に利用され、オレンジやバナナ等の作物が修道院の生活を支えてきた。修道院はこの地方のエチオピア正教徒たちから特別な崇拝の対象とされてきたが、ハイレセラシエ以降のデルグ政権による土地の強制収用政策によって、修道院の経済基盤は弱体化し、それ以降の人口流出の要因となったと言われている。



写真5 修道院周囲の岩壁に見られる薄い地層が積層した岩盤 撮影：清水信宏

デブラガルゼン教会

夜が明けると、そそり立つ岩壁に囲まれたグンダグンドの絶景を見上げることができる。そして、その岩壁を眺めて気づくのが斜めに薄い地層が積層した岩盤である(写真5)。グンダグンドの建築物に使用されている薄いスレートとその特徴的な積み方は、この岩盤からとれる石材によるものである。

デブラガルゼン(Debre Garzen)教会は、東側のマクダス(聖域)と西側のケデス(礼拝堂)の2つの空間に分かれ、幅14m長さ18mの長方形の平面形状をもつ。この建築物が、保護活動の主な対象である。構造体は周辺で取れるスレート状の石材による組積造で、開口部のアーチもこのスレートのみで構成され、建築的に見ても非常に特徴的である。薄いスレートで構成された壁は波打ちや亀裂が見られ、早急の修繕を要する。装飾的な観点から見ると、同じくティグライ地方に7世紀頃まで栄えた阿克苏ム朝にも見られる形象もいくつか確認できるが、他のエチオピア正教の建築と比べ極端に少ない。この質素な建築様式も、グンダグンドの特徴の一つと言える(写真6)。

ここで生活する修道僧たちは、デブラガルゼンの周りに建つ僧房で過ごす、必要に応じて我々の



写真6 修復活動中のデブラガルゼン 撮影：筆者

が下りてきた山道を行き来しながら、街で必要なものを調達する。修道院の一部は女性の立ち入りが禁止されていて、家畜でさえもすべて雄である。街での生活と同様にインジェラを主食とし、生活は非常に質素である。彼ら自身も、修道僧の流出や建物の荒廃には、大きな危機感を抱いているため、建物の修復には積極的に手を貸してくれる。



写真 7 1960 年代に撮影されたデブラガルゼン 撮影：不明

グンダグンドからの帰路

復路は、往路とは反対に 1500m を登るため、道のりは更に厳しい。出発は、夜の 9 時過ぎである。これは、日差しが強いエチオピアで、日中の長時間移動が非常に危険だからである。途中、グンダグンドから少し上がったところにある数軒の民家で、アディグラットの周りでよく食べられている「トゥフロ」（トウモロコシの粉を水で溶き練り込んだ団子のことで、香辛料の利いたソースにつけて食べる伝統料理）とコーヒーを頂いてエネルギー補給をし、8 時間の山登りに備える。

真夜中の山道を、遺産保護活動で共に現場に入った現地のメンバーらと登るが、真っ暗の山道は一切の方向がわからず、日本からのメンバーだけでは到底とり着けなかった。今もグンダグンドに残る修道僧らが、定期的にこの道のりを往き来しながら生活をしていることは驚きである。夜が明け、朝 6 時頃ようやく出発地点と同じ場所に戻って送迎の車と合流する。

おわりに

我々の遺産修復活動は、グンダグンド修道院の中で最も重要な教会であるデブラガルゼンを 1960 年代に撮影された当時の姿に戻すことを大きな目的としている（写真 7）。辺境の地とも言え

る場所にあるグンダグンドには、コプト教の影響を受けながらティグライで独自に展開した宗教観念と建築的な特色が色濃く残り、現代のエチオピア正教に至る系譜に繋がる重要な遺産であると言える。しかし、グローバルな気候変動も影響して修道院周辺の環境は変化し、貴重な遺構がダメージを受けている。こうした自然環境と深く関わりを持った歴史遺産にとって、地球環境の変化は非常に大きな問題である。先進国で多くのエネルギーを使用しながら生活する我々には、アフリカの建築遺産を保護し伝えていく責任があるのかもしれない。

参照

- 1 Tomohiro Shitara "Restoration Project for Gunda Gundo Monastery" Keio University, 2005.
- 2 設楽知弘・三宅理一・米倉立子・出佳奈子、「グンダ・グンド修道院の成立と空間特質に関する論考」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』、2003 年
- 3 Robert Beylot "Estifanos, hétérodoxe éthiopien du XVe siècle", *Revue de l'histoire des religions*, 1981 No.198-3 pp. 279-284.
- 4 Robert Beylot "Actes des Pères et Frères de Debra Garzen : introduction et instructions spirituelles et théologiques d'Estifanos", *Annales d'Ethiopie*, 1990 Vol.15 pp. 7-43.

（あおしま けいた／芝浦工業大学工学部）

エチオピア北部高地でのユーカリ木材の利用 —ティグライ州エンバアラジェ郡における例—

竹中 浩一

はじめに

エチオピアにはユーカリが多い。ユーカリとは、主にオーストラリア大陸を起源とし、フトモモ科 (MYRTACEAE) に属する 500 種以上が知られる樹木である。この形態は低木から樹高 90m を超える高木まで非常にバラエティに富むが、日本では一般的にコアラの食物として知られ、概して成長が早く、また、比較的乾燥への耐性が高いことから世界中で人工造林の樹種として採用されてきた。

エチオピアとユーカリとの歴史的関係は非常に長い。過去、アディスアベバにおける燃料材確保のため、Menelik II 世が 1895 年にヨーロッパの鉄道技術者にユーカリ植栽を依頼し、ユーカリ十数種による試験植栽の結果、*Eucalyptus globulus*

(tasmania blue gum), *E. camaldulensis* (red river gum), 他数種が適樹種として選択された。アディスアベバ市内エントト山のユーカリ林には、現在でも最初に植えられた木とされるものが残されている (写真 1)。その後徐々にユーカリ植栽が国内に広まっていったものと思われる。

このように、初めてこの樹木が導入されてから約 120 年が経過し、現在では、首都をはじめ、筆者の訪れたいくつかの州都や地方の町、農村地帯に至るまでこの樹木の姿を見ないことの方が少ない。在来種にはなり得ないものの、今やユーカリはエチオピアの国の木の一つと認識されているかもしれない。特に、前出の *E. globulus* が白いユーカリの意で *tseda baharzaf* と呼ばれ、*E. camaldulensis* が赤いユーカリの意で *keyih baharzaf* と固有の植物名を与えられている様子を見るに、既に同国の文化や生活の一部として浸透していると筆者は感じている。

燃料材を確保するために植栽が始まったこの樹木は、現在もなお燃料材として利用されているが、近年にはさらに用途が増えてきた。エチオピアに造詣の深い方々にとってはもはや日常的な光景であろう、丸太に囲まれた多層建築物のための建築用材、住宅用の部材や、近年新しい技術によって生産されるようになった家具用の木材加工原料などこの樹木の利用法は少しずつ広がり、消費者も都市住民にまでわたっている。

なお、本稿は、筆者の従事する JIRCAS による研究プロジェクトの内、クリーン開発メカニズム (CDM)¹ の手法を利用した森林植生等による炭素蓄積並びに農村開発の手法構築を行う調査を実施



写真 1 エントト山に最初に植えられたというユーカリの木
(アディスアベバ : H26. 6)

1 国連気候変動枠組み条約において、1997 年に採択された京都議定書に定められた温室効果ガス削減を補完する手法の一つである。

する中で得た知見である。この中から、ユーカリ木材がどのように使われているかについてまとめた。

ユーカリ造林の現状

筆者らの調査対象地ティグライ州はエチオピアの北端にあり、対象地域エンバアラジェ郡はその南部ゾーンに含まれる。同郡はアラジェ山(3949m)の名を冠した高地山地帯であり、標高 2000m 台の平原から 3000m を超える急峻な山地帯まで起伏の激しい地形的な特徴を持つ。同地域は、コムギを主に一部で野菜等を栽培し家畜を飼養する農牧畜兼業地帯である。

エチオピアの人工造林で多く採用されている *E. globulus* 等は、原産地オーストラリアの中でも南東部の高緯度地域を起源とし、単に乾燥耐性が高いだけでなく、比較的冷涼な気候でも良く育つと言われている。そのため、エンバアラジェ郡のような高標高地でもまたこの樹種は多く植栽されている。天然植生が衰退した現在、早期に森林を回復する Pioneer がこの樹木なのである。

ある地域の森林の現状を調べる時、多くの場合その面積を最初に調べる。しかし、これまで多くの資料を探り、関係機関に問い合わせても「それらしい数値」さえ得ることができなかった。1999 年に John W. Turnbull が述べたように、ユーカリが世界中でどれくらい植えてこられたのか信頼できる数値を得ることは極めて難しい (Turnbull 1999)。最もよく利用される FAO の世界森林資源報告書 2010 では、エチオピアの人工植栽面積は 511,000ha となっている (FAO 2010)。その基となり 2005 年に推計された FRA 国別報告書 (エチオピア) によれば、ティグライ州の森林面積は 9,981ha (ただし、定義に従って疎林を除く) とされ、これは州区域面積に対して 1% にも満たない。一方、同州農業局出典によれば 2010 年時点で産業造林のみでも 39,700ha の植栽実績がありすべてがユーカリとされている (Bekelle 2011)。それ以外にも複数の樹種による 23,700ha の非産業造林があるが、樹種構成は明らかでない。仮にこの数値から森林被覆率を求めても、州内の森林率は 1.5% まで

にしか増加しない。いずれにしてもエチオピアの南部から西部の比較的緑が豊かな州に比べて、ティグライ州は森林植生が乏しい。さらに現在では利用可能な大きな在来種の森林は教会林を除いてほとんど見られない。このような状況のなかでは、ユーカリへの期待が高まるのは至極自然だったと言える。

ユーカリは期待の木？

このように少ない森林の中では、早く育つ木はそれだけで重要な資源となる。概して、高地山地帯の在来種²は成長が遅く、調達・利用が難しい。それだけに乾燥にも強く、早く成長し、燃料、建築材、土木用材、時に薬や化粧品にも利用されるこの樹木の利点は広く認知されている。

ユーカリの木はその枝葉を自然に落とす性質があり、早く天空に向かって伸長しようとする。これによって、その落枝落葉は僅かな燃料ともなるが、それよりもこの樹木の特性は、水分条件の良い場所に植えることにより 5 年前後で販売可能になるということである。エンバアラジェ郡の複数の農家によれば、ユーカリは多目的利用、販売、小面積栽培が可能であるため、とても良い木であると考えられているようだ。また、近年、青年層に対し配分できる土地が不足しつつある問題に対して、土地無し青年グループに非農地を再分配する事業が行われている。今年度のエンバアラジェ郡内における土地利用権分配計画では、郡内計 20 村の千名以上の青年男女に対し一人あたり 0.25ha 未満の土地があてがわれたが、8 割以上の青年らがユーカリなどによる小規模林業を希望した。ユーカリには莫大な水分要求、アレロパシー³などの環境上の問題があるとされ賛否両論であるが、農村部では燃料や現金を早く得ることができかつ地域

2 本地域の在来種は、針葉樹では *Juniperus procera* (tseheri)、広葉樹では *Acacia abyssinica* (cheha)、*Hagenia abyssinica* (アムハラ名 kosso)、*Cordia africana* (auhi) など貴重とされるが成長が遅く植林の成功例が多くない。

3 アレロパシーとは「他感作用」と訳され、ある植物が放出する物質により、周囲の他の植物の成長に悪影響を与えるとされる現象である。

の問題をも緩和に導く理想的な林業樹種となっていた。

住宅部材としての利用と販売

エンバアラジェ郡周辺では、岩石地が多く農地や平地においても基岩が露出しているか大小様々な石礫が混ざっている。地域の人々はこれらをうまく利用し、斜面農地形成のため石垣を設置し、また住宅の壁として利用してきた。しかし、現在の住宅建築を見るとその多くはユーカリの丸太を利用したものである。今では新築の一部はトタン葺き木造土壁造りとでも言えようか、構造材の多くはユーカリ材が使われている。日本木材住宅では、柱、梁、桁、母屋、棟木等々のように、各部材はそれぞれの用途に応じて呼称を持ち縦横斜めに使用されているが、郡内農村部の住宅に使用されている部材も似たように異なる名称を持ち木材が使い分けられていた。主に垂直方向に使用される柱や壁材などを「*chidad*」と呼ぶ（ただし、アルファベット表記はティグライ人同行者の記述による）。建物の主構造材であるために比較的直径の太い木材が使用され、また、壁には土を塗り込むため、片面を平らにした半割の丸太が使用されている。次に水平方向に使用されるものを「*magal*」と呼ぶ。これは、水平に使用される造作材のひとつで屋根の母屋角または貫に相当する。最後に縦方向に使用される「*weraji*」は日本住宅の垂木に相当する。このような使い分けに応じ、*chidad*には直径15 cm以上の丸太が、それ以外には8～12 cmの丸太が使用され、建築物の大きさによって適宜切断して利用されている（写真2）。ある丸太集積所によると（2013年7月時点、1 birr=約5.29円）の、*chidad*に相当する柱丸太は直径約15 cm、長さ5.5～6mで販売価格80birr/本、半割丸太は長さ4～4.5mで販売価格25birr/本であった。



写真2 ユーカリ材を利用した住宅（ティグライ州：H26.7）

また、*magal*, *weraji*に相当する丸太は直径10 cm程度、長さ7～8mで販売価格40birr/本であった。

建築用材としての利用と販売

住宅用に使用される丸太の規格は上記のように分けられているが、ユーカリ丸太はこのほかに建築用材としての利用法がある。近年ではコンクリート製多層建築物が地方でも建設されるようになり、建築中の足場丸太として、また、セメントが硬化するまでの補強材として使用される（写真3）。そのために、直径15 cm未満、長さ9～10mの細長い丸太が大量に求められている。



写真3 多層建築に利用されるユーカリ木建築用材（メケレ：H26.10）

郡内で丸太を生産する小規模造林農家によると（2014年7月時点、1birr=約5.24円）、このような大きさのユーカリ丸太は、一般的に35～40birr/本、乾季には建築が増えることから倍の値段で町場の業者などに引き取られるため、町へ通ずる道沿いに集積してトラックが来るのを待つ。雨季には伐採が増えるため、皮むき丸太にして見栄えをよくするなど出品者ごとにも工夫が見られるようになった。

農家による小規模ユーカリ植栽の方法

前記二つのような利用と販売・買い取りには、地域の住民（特に農家）が少なからず関わっており、これには求められる材サイズと生産者による育林法との関係もある。利用されるユーカリ木材のサイズは、本来のユーカリの姿である、一抱えもありそうな直径、天を貫くような高さのものではなく、細長いものであった。これについて、以前から農家の行う植栽法には理解できない点があった。彼らは、1本1birr（2013年から）で購入した苗木を作物苗のような狭い間隔で植栽していく。一般的な造林法は、この地域でも苗列間2×2mと指導されているが、農村ではよく50～100cm程度で植えられている。この間隔での植栽密度は1haあたり1～4万本に相当し、成長と共に競合による優劣が生じていくことが考えられる（写真4）。昭和初期の京都北山スギ造林は、1haあたり1～1.2万本を植栽した。これは、綿密な育林施業と磨き丸太という目標に基づいて根付いたものであるが、ティグライ州のユーカリ細丸太生産はどのようにしてその形になったのであろうか。

農村住民が利用できる土地は元々限られている。前述のとおり、近年土地無し青年の問題があり、人口増加と共にますます土地の確保は難しくなっている。エンバアラジェ郡でユーカリが小規模でも植えられるようになってから、個人の植栽は主に住居または農地の周辺で行われた。農地の中に木を植えることは禁止されているとされ、主に土地



写真4 密植されるユーカリ林（ティグライ州：H26.7）

の境界に植えるかまたは農地に指定されていないさらに限られた土地（荒廃地等）がユーカリ植栽の対象となる。一方、木を植えることは行政にも推奨されているため、多くの苗木を調達することが可能であった。土地は小さいがまとまった苗木を手にした結果、おのずと植栽間隔は近くなっていったものと推測できる。ユーカリは水分を得ると急速に伸長するが、それと同時に樹木同士で競合が起きあまり太らなくなる。結果、細長い木が多くなり、競合の結果、先に売れるサイズになったものから販売または利用されてきたのだと考えられる。当初より生産目標を持っていた訳ではないが、土地の制約などを要因として、成立した木材生産の結果が市場に受け入れられたと言うことができるかもしれない。これは、農家が小規模造林を行い生活の一助とする上で重要な施業体系になっていると今では考えている。ある農家は一年間に数百本ものこのような丸太を農業の傍ら生産している。これによる収入はUS\$400～500相当にもなり、生活の足しどころか主収入にさえなり得る。このようにユーカリ木材は、現在の農村では単に燃料材として利用されるだけではなく、規模は小さくとも十分に現金収入の手段となり得る潜在性を秘めている。



写真5 ユーカリ材から生産されたパーティクルボード
(ティグライ州：H25. 7)

企業による大量の木材利用

ティグライ州内には、ある基金によって設立された木工会社がある。この会社の製品原料はすべて周辺のユーカリ林から調達され、パーティクルボード⁴に加工される（写真5）。原料を調達するためのユーカリ林は8,000ha以上が保有され、現在の年間原料調達量は約7万m³、そのうち年3万m³を目標に製品生産を行っている。需要は上昇傾向で原料不足の状態にあり、ユーカリ木材の調達に奔走している。前記の農村におけるユーカリ小規模植栽と異なり、このような企業活動は、地域の森林資源を急激に減少させるものと考えていた。なぜなら、伐採された木材は製品となって他地域の工場で家具に加工され、都市などへ流出していくからである。

筆者らの調査によると、30年生のユーカリ林が約270m³/haの材積を持つことから、毎年約260haが地域内で伐採されることになる。8,000haもの森林があれば、30年間は伐採可能であり30年後はその材積まで再成長していると仮定すれば理想的な持続的林業なのかもしれない。しかし、現在急激な経済成長をしているエチオピアにおいて、しかも、この製品が主に人口集中地において家具原料に利用されることを考えると再び資源の枯渇や土地利用の紛争に直面するのではないかと心配す

るのである。

おわりに

今回は、ティグライ州のなかでもさらに特定の地域におけるユーカリ材の利用について現在見られる状況を記した。ここで見られたことは、企業活動と住民による木材生産は対象地域、規模や消費地が異なっており、その多くは互いに関与していないということである。当初は農家らが農業の傍ら企業造林の長期的な受益者の一部となって、便益を享受しながら地域全体の林業に関与できれば理想的なのではないかと考えていた。しかし、農家の小規模なユーカリの植栽が居住地の周辺でちょうど良い規模で行われ、時々収入を得ることができる都合の良い施業形態であれば、わざわざ日雇いとして他人に使われる必要はない。地域住民が集落をあげて爆発的なブームになるほどの魅力は現在の林業にはないのかもしれない。

森林が未だ減少・衰退している今日、減少量以上の資源確保を検討していくことは国としても求められている。しかし、たいていの場合、厳しい作業を強いられるのは農村部住民である。彼らが農業と調和を取りながら、今以上に森林造成に対して魅力を感じるような方策が必要なのではないだろうか。

参考文献

1. John W. Turnbull, Eucalypt plantations. *New Forests* 17, 1999: 37–52.
2. FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATIONS, *Global Forest Resources Assessment 2010 Main Report*. FAO FORESTRY PAPER 163, 2010: 261.
3. Million Bekelle, *FOREST PLANTATIONS AND WOODLOTS IN ETHIOPIA*. AFRICAN FOREST FORM WORKING PAPER SERIES Vol.1, 2011: 13–14.

（たけなか こういち／

（独）国際農林水産業研究センター 農村開発領域）

4 パーティクルボードとは、木材小片に接着剤を混ぜ、熱圧成形した木質板材である。強度は劣るが家具等に加工される。

乾燥地の救世主となるか —北部エチオピアにおけるサボテンの普及促進活動について—

佐藤 美穂

ティグライ州でのサボテンにまつわるエピソード

2003 年、エチオピア北部ティグライ州に位置する古都アクスムにおいて、シバの女王の宮殿とされる遺跡の展望台から奇妙な光景を目にした。ラクダが長いとげのあるサボテンを黙々と食っているのだった。それから 6 年後、ティグライ州の州都メケレ市内の、当時滞在していた家の近くの道端で、子どもが見たこともない果物を売っていた。その果物はサボテンの実であるベレスであった。食してみると、多くの小さな種が気になるものの、ほどよい甘さと水分の虜になり、私は毎日のようにその子どもから 2、3 個買うようになった（友人からは食べ過ぎるとお腹を下すため、おいしいからといって食べ過ぎないように、と忠告を受けた）。

ベレスを頬張りながら、私は 1997 年に滞在したメキシコで頻繁に食していたノパーレス（食用サボテンの葉状茎の部分）を懐かしく思い出していた。ちょうどその頃、メケレのハウエルティ・モニュメント広場で実施されていた農産物展覧会のようなイベントに招待された。会場を回っていると、そこにはノパーレスの普及拡大のためのブー



写真2 ノパーレス・ベレス加工食品試食ブース
2009 年 10 月 16 日

スがあり、ノパーレス入りのパン、ベレスジャムなどの加工食品がテーブル上に所狭しと並べられ、試食できるようになっていた。この時、ティグライ州においてサボテンは主に家畜の飼料として用いられていたが、それ以外の利用、つまり、人が口にするもののなかったサボテンの葉状茎部分を食用として普及させる取り組みが行われていることを知った¹。

本稿では、筆者にとってなじみ深いメキシコのノパーレスを、ティグライ州で目にした時の経験をもとに、エチオピア北部乾燥地におけるノパーレスの普及活動について、後述の CactusNet の報告（2010）をもとに紹介する。なお、筆者はサボテン、農業、あるいは栄養の専門家ではないことを付け加えておきたい。



写真1 ベレスを売る少年 2009 年 9 月 4 日

1 この際、会場では、サボテン葉状茎の部分をスペイン語の *nopales*、サボテン果実をティグライ語の *beles* という言葉で表現されていた。ティグライ語ではサボテン全体を指してベレスというため、本稿では、葉状茎の部分と果実の部分を区別するため、前者をスペイン語のノパーレス、そして後者をティグライ語のベレスとして書き記す。

ノパーレスとは

ノパーレス (*nopales*) はスペイン語でノパル (*nopal*) の複数形である。ノパルの語源はアメリカ先住民ナワのナワトル語 (*Nahuatl*) のノパーリ (*nohpalli*、葉状茎部分を指す) に由来する。

ノパーレスは、日本では一般的にウチワサボテン (写真 3) と呼ばれている。ウチワサボテンは、サボテン科オープンティア属に分類され、中でもオープンティア フィカス・インディカ種 (*Opuntia ficus-indica*²) に属するもののほとんどは食用でき、主にメキシコやアメリカ合衆国南西部、イタリア南部などで広く栽培されている。

特にメキシコでは、図 1 に示すように、ノパーレスがメキシコ国章のモチーフとなっているほどである。これは、「蛇をくわえた鷲がノパルの上に止まっている場所に建国せよ」、というアステカ時代の神のお告げをもとにしていると言われて³。このように、メキシコにおいてノパーレス



写真 3 ウチワサボテン

http://www.cactusnet.org/fao_cactus.php
(最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日)



図 1 メキシコの国章

http://www.desarrollopolitico.gob.mx/es/Desarrollo_Politico/La_version_oficial_del_Escudo_y_la_Bandera_nacionales
(最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日)

2 *ficus-indica* はラテン語でインドのいちじく、という意味。

3 メキシコ ノパル&トウナ普及促進委員会ホームページ。
<http://www.nopal-tuna.jp/> (最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日)。



写真 4 ノパルと卵の炒め物 (*nopales con huevos*)

<https://www.flickr.com/photos/pointnshoot/446638127/in/photostream/>
(最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日)

は、古くアステカ時代から食用、あるいは民間薬として重宝されており、メキシコの家庭料理には欠かせない食材となっている。中でもノパーレスのサラダ、ノパーレスと卵の炒め物 (写真 4) などはノパーレス料理の代表的なものであり、ティグライ州でベレスと呼ばれる果実は生食、ジュース、菓子、あるいはリキュールなどとして利用されている。

米国農務省 (United States Department of Agriculture, USDA) の国民栄養データベース (National Nutrient Database for Standard Reference) 上の栄養成分表と栄養情報によると、調理済みのノパーレスには、カルシウム、カリウム、マグネシウムなどのミネラル、ビタミン A、ビタミン K、ビタミン C などの各種ビタミン、さらに食物繊維が含まれている。また、果実は、オレンジに次ぐビタミン C を含んでいる。果実中に含まれるカルシウムと鉄に関してはリンゴやオレンジよりも多く保有している。カロリーは 41kcal と三つの中で最も低い⁴。

臨床研究などから、ノパーレスの乾燥葉の粉末にコレステロール低下と脂質減少作用があること (東洋新薬, 2007) や、ベレスに酸化ストレスを減少させる作用があること (Tesoriere, Butera, Pintaui, et al. 2004)、ベレス果汁からなるヒアルロン酸産生促進剤がヒトのヒアルロン酸産生能を促進させ、ヒアルロン酸量を増加させることから、ベレス由来のヒアルロン酸産生促進剤がヒト皮膚の老化防止、保湿、潤いなどに有効に適用され得ること (日

4 同データベースによると、100 グラムあたり、リンゴは 54kcal、オレンジは 47kcal。

本特許情報，2011）などがわかっている。

メキシコにおいてノパーレスは1960年代から商業的に栽培されるようになった。現在では主に中北部の6州に7万ヘクタール以上のプランテーションにおいて栽培されている（Inglese, 2010: 82-83）。さらに、2005年のデータによると、ベレスは、オレンジ、アボカド、バナナ、マンゴー、リンゴに次ぐ6番目の果菜類の位置を占め、特に乾燥地、半乾燥地では、とうもろこしや豆類といった安定的な穀物よりも収益が多い換金作物となっている（Dulume, 2010: 24）。

ティグライ州でのノパーレスの導入、普及活動

ティグライ州でのウチワサボテンの栽培面積に関しては、様々なデータが存在するが、Desta (2010: 101) は、ティグライ州面積の約6.74%に相当する36万ヘクタールの土地がサボテンによって覆われていると報告している。さらに、ティグライ農業研究所の調査では、同州の32万ヘクタール分の土地を覆うベレスのうち、12万ヘクタール分は農家によって換金作物として栽培されていることがわかった（Hailesilasse, 2013）。このデータを裏付けるように、国際連合食糧農業機関（Food and Agriculture Organization of the United Nations, FAO）がティグライ州とアムハラ州北ウォロ県の109名の農家を対象に実施したベレスの経済的価値に関する調査（76%の回答者がティグライ州在住）によると、ティグライ州では回答者の年間収入の約4分の1がベレスによるものであった（De Bac, 2010: 19）。また、Taddele らがティグライ州キルティ・アウラエロ県で実施した調査によると、サボテンを栽培していない農家の年間収入の平均が6,582ブルだったのに対し、サボテン栽培農家の年間平均収入は15,059ブルであった（Taddele, Negatu, and Girmay, 2010: 184）。

メキシコ原産のウチワサボテンは、19世紀初頭にカトリック宣教師らによってティグライ州のイロブ郡に持ち込まれ、そこから国内の乾燥地、半乾燥地に広がったとされる（Dulume, 2010: 23）。ティグライ州にて、サボテンは旱魃の際に唯一手

に入る家畜用飼料として、あるいは、蓄えた穀物が尽きる頃（5月から8月）の人々の食料として、また、果実や葉状茎部分を売ることによる現金収入源として、さらに生垣や家庭での燃料として利用されてきた（Nefzaoui, Inglese, and Belay, 2010）。特に食料が底を尽きた時に人々はベレスを食したことから、ベレスは「命を救う作物」、「暗い日々の果物」と呼ばれた（Nefzaoui, Inglese, and Belay, 2010: 10; Desta, 2010: 103）。幾度の旱魃にも生き延び、果物を実らせるオープンティア種のサボテンは、特に1984年の旱魃後に栽培する人が増加した（Alemseged, 2010: 208）。

また、飼料としてのサボテンの需要も高まってきた。Zamra (2001, Desta, 2010: 103による引用) は、旱魃、過放牧、放牧地の悪化、そして少ししかない余剰穀物により、1960年以降、人々は家畜にサボテンを直接飼料として与えるようになったという。そのため、ティグライ州の人々は、気候変動、いつやって来るかわからない旱魃時の食料・飼料としてオープンティア種のサボテンの栽培面積を増やしているものと考えられる。「ベレスを持たない者は、水のない小川のようなものだ」ということわざがティグライ州には存在する（De Bac, 2010: 15-16）。サボテンがティグライの地にもたらされてほぼ1世紀を経て、ベレスは農家の裏庭に欠かせない存在になりつつあるとも思われる。

一方、国際的な動きとして、1993年にはFAOと国際乾燥地農業研究センター（International Center for Agricultural Research in the Dry Areas, ICARDA）によるサボテンに関する技術協力ネットワーク（the FAO-ICARDA technical cooperation network on cactus, CactusNet）が発足し、31か国が参加している⁵。CactusNetはこれまでアルゼンチン、エリトリア、エチオピア、イランにおいて技術協力を実施してきた⁶。CactusNetは、葉状茎部分（ノパーレス）と果実（ベレス）の食用そして家畜飼料としての役割、ベレスの商業的価値に加えて、特に旱魃に

5 http://www.cactusnet.org/fao_cactus.php（最終閲覧日2014年10月12日）。

6 同上。

強いオープンティア種の砂漠化への予防的役割にも注目している (Nefzaoui and Mourid, 2010: 119)。

CactusNet に関連するエチオピアの活動として、まず、1997 年にメケレ大学とドイツのヴィースバーデン工科大学 (Wiesbaden Polytechnic) が共同開催したベレスの代替利用の導入に関するワークショップがある。このワークショップでまとめられた提言を基に FAO の技術協力プログラムが形成され、2002 年から 2004 年の 3 年間、メケレ大学がイタリア政府の支援を受け実施した。この技術協力プログラムは、食料の安全保障のための技術の導入、専門的アドバイスやトレーニングの実施、さらにサボテンの植樹、天然染料となる昆虫エンジムシ⁷の導入を通して、政府によるベレスの栽培、改良、利用に関する能力を強化することを目的とした (Nefzaoui, Inglese, and Belay, 2010: 11)。本プログラムの成功例のひとつとして、サボテンの若い葉状茎部分を食用として紹介したことが挙げられる (Nefzaoui, Inglese, and Belay, 2010: 12)。特に食用としてのノパーレスの導入に重要な役割を担ったのはメケレ市で活動する NGO、Mums for Mums であった。Mums for Mums は、他の NGO や一般家庭へのノパーレスとベレスの食用に関する普及促進を目指して、ティグライ語と英語による「Cactus-Beles Recipe Book」というレシピ本を発行する⁸と共に、プロジェクト期間中に 3,000 人の女性を対象にサボテン料理法、加工法のトレーニングを実施した。さらに、Mums for Mums によるサボテン料理を実演する移動キッチン活動には、延べ約 2 万人の人々が参加した (De Bac, 2010: 16)。

2013 年 8 月からは、ティグライ州において、ベレスを中心としたアグリビジネス・プロジェクトが国際連合工業開発機関 (United Nations Industrial

Development Organization, UNIDO) と石油輸出国機構国際開発基金による 60 万米ドルの資金援助によって開始した。本プロジェクトでは近代的なベレスの加工工場を建設し、市場価値のあるベレス関連商品の安定供給を目指している (UNIDO, 2013)。

おわりに

様々なウチワサボテンのプロジェクトが進行する中、全てが成功しているわけではない。エチオピアにおいて、赤色の天然染料となるウチワサボテンに寄生するエンジムシの輸出、化粧品に加工するためのサボテンの花の輸出はそれぞれ不成功に終わった (Hailesilasse, 2013)。前者に関しては、エンジムシがサボテンの中で繁殖する際に、サボテンに多大な損害が発生すること、後者に関しては実を犠牲にして花を摘み取り輸出するよりも、現地で実を販売したほうが利益が多いことが原因であると考えられる。

また、エチオピア国外にばかり市場があるわけではない。ティグライ州ではベレスはなじみ深い果物であるが、首都アディスアババで手に入るようになったのはここ数年のようである。アディスアババ市内では、ムスリムの人々の間で、ベレスは断食月の断食明けに食す果物として、静かなブームとなっているようである (Hailesilasse, 2013)。

近年の日本でも健康食品ブームにのって、ノパーレスやベレスが主にメキシコ料理や健康食品として紹介されるようになった。エチオピアにおいて、飢えをしのぐ果物から換金作物としてベレスの価値が見直され、さらに加工技術、流通ルートが発達、整備されることにより、メキシコ産のみならず、エチオピア産のノパーレス、あるいはベレス加工品がそう遠くない将来に日本の市場に登場するのかもしれない。

参考文献

Alemseged, T. 2010. The Cactus Development Project (HCDP) and the role of CPPI as a regional platform in Tigray Regional State, Northern Ethiopia. pp. 207–219. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).

7 エンジムシとは、コチニールカイガラムシのことである。古くはアステカ帝国やインカ帝国でも養殖されていた、ウチワサボテンに寄生する昆虫である。雌を熱処理すると赤色の顔料 (コチニール) ができる。

8 以下のブログではこのレシピ本とベレスジュースのレシピ部分のページの写真が掲載されている。
<http://jhodgesagame.blogspot.com/2013/12/cactus-fruit-aka-beles-or-prickly-pear.html> (最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日)。

- De Bac, G. 2010. Strengthening cactus pear production in Tigray and North Wollo. pp. 15–21. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Desta, T.Y. 2010. Farmers practice in use of cactus as animal feed-in Tigray. pp.101–110. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Dulume, F.Y. 2010. Cactus - based development in Tigray & experience from Mexico. pp.22–28. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Hailesilasse, A. 2013, August 11. *Beles Comes to Town: A Prickly Profit as Cactus Fruit Spreads to the Capital*. <http://addisfortune.net/articles/beles-comes-to-town/> 最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日。
- Inglese, P. 2010. Cactus pear, *Opuntia ficus-indica* L. (Mill.) for fruit production: An overview. pp.82–92. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Nefzaoui, A. & E.M. Mourid. 2010. Cactus pear for soil and water conservation in arid and semi-arid lands. pp.117–126. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Nefzaoui, A., P. Inglese & T. Belay (eds.). 2010. *Improved Utilization of Cactus Pear for Food, Feed, Soil and Water Conservation and Other Products in Africa*. Proceedings of International Workshop, Mekelle (Ethiopia), 19–21 October, 2009. 224 pp.
- United Nations Industrial Development Organization (website). 2013, August 29. *Supporting Agribusiness Development in the Tigray Region of Ethiopia*. <http://www.unido.org/news/press/supporting-ethiopia.html> 最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日。
- Taddele, M., W. Negatu, & Girmay, A. 2010. Contributions of prickly pear cactus towards achieving household food security in Tigray: The case of Tabia Kihen in Kilte Awlao Wereda of Eastern Tigray, Northern Ethiopia. In Nefzaoui, A., et al. (eds.).
- Tesoriere, L., D. Butera, A.M. Pintaudi, M. Allegra & M.A. Livrea. 2004. Supplementation with cactus pear (*Opuntia ficus-indica*) fruit decreases oxidative stress in healthy humans: A comparative study with vitamin C. *The American Journal of Clinical Nutrition*, 80(2): 391–395.
- United States Department of Agriculture. No date. National Nutrient Database for Standard Reference Release 27. <http://ndb.nal.usda.gov/ndb/search/list> 最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日。
- 東洋新薬ホームページ 2007 年 7 月 30 日。東洋新薬新素材 NeOpuntia（ネオープンティア®）の販売を開始 ウチワサボテンの繊維にコレステロール低下と脂質減少作用。 <http://www.toyoshinyaku.co.jp/weblog/?p=75> 最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日。
- 日本特許情報ホームページ 2011 年 10 月 6 日。ヒアルロン酸産生促進剤。 <http://tokkyoj.com/data/tk2011-195473.shtml> 最終閲覧日 2014 年 10 月 12 日。

（さとう みほ／長崎大学国際健康開発研究科）



エチオピア中央高原における持続型生存基盤としての犁農耕の可能性 — テフ・ウシ・人関係に着目して —

田中 利和

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)

1. はじめに

Werth (1954) によるとインド北西部で起源したと推測される犁はアラビア半島を経由して、エチオピア高原の北部から中部にわたる地域（現在のティグライ州およびアムハラ州）へ到達した。その歴史は「紀元前 1000 年前」(Aune et al. 2006: 311) と考えられており、その起源は「テフの播種床の整地が起源」(McCann 1995: 298) と推測され、今日でも主要な耕起手段として同国において幅広く実践されている（写真 1）。テフ



写真 1 現代エチオピア中央高原における牛耕

(*Eragrostis tef*) とはエチオピア高原を原産地とする、草丈 20–90cm のイネ科の一年草で、古くからエチオピア高原の全域で栽培されている作物である。耐乾性に優れ、9 から 12 週間で収穫でき、1 ヘクタールあたり 270 kg から 800 kg の種子の収穫が期待できる。人びとは収穫したテフの種子を粉にし、水でとき 3 日ほど発酵させ、直径 50 センチほどの薄い円盤状に焼きあげる。これはインジェラとよばれ、エチオピアの広い地域で主食とされている。

エチオピアの牛耕に関しては、農学や畜産学、農業工学の手法を複合的に用いて分析する研究（例えば Goe 1987）や犁と作用する土の関係を分析する研究（例えば, Solomon et al. 2006; Melesse 1999; Mouazen et al. 2007 など）がこれまでにとりくまれてきた。以上の研究は牛耕を構成する各要素の技術的側面からの検討をおこなってきた点では評価できる。しかし、環境や社会要因などの側面を含めた分析や、犁耕をおこなっている人びとが抱える諸問題や、その対応についての検討が不足していた。アンケートや聞き取り調査、統計局などのデータに基づいた農村開発学の分野では、牛耕を実践する農民が抱える課題として、①人口圧による草地の減少や、乾季あけで牛耕開始時期に不足する「家畜飼料の確保」、②トラクターと比較した際の「低い作業効率」、③畜力へのアクセスをもたない「ウシなし農民」の存在という、大別して主

に3点が問題であると指摘されてきた。そして、それらの諸課題に対処するために、代替畜力、不耕起栽培法の技術（例えば Aune et al. 2001; Cochet 2011; Melaku 2011 など）などを駆使して、慢性的に不足する犁耕力を供給する術を開発しなくてはならないと主張されてきた。しかし、以上の研究では、実際に農民が、ウシを農業システムの一部として利用し、どのように農業生産活動をおこなっているかなど、農業システムを構成する、作物、家畜、人といった諸要素とその関係性を包括的に分析する視点が欠けていたといえよう。また農民自身が抱える諸課題に対してどのような戦略をもって対応を試みているのか、実証的データに基づいた分析が十分になされてこなかった。

本発表では牛耕を構成する各要素とその関係性に焦点をあてて、それらを社会、生態、文化の複合としてあらわれる総合的な実践と捉え、牛耕の現代的課題であると指摘される①「家畜飼料の確保」と②「低い作業効率」の2つの課題について再検討し、アフリカにおける持続型生存基盤としての在来犁農耕の可能性について考察する。

2. 調査の概要

調査はオロミヤ州、南西ショワ県、ウォリソ郡、ディレディラティ村、ガーグレ地区でおこなった。ガーグレ地区はエチオピア中央高原に位置する、標高 1960m から 2000m の平らな高原で、年平均 1125mm の降水量を享受する地域である。この地域の土地の 73%が農地、草地が 15%、森が 7%、未利用地が 5%であることから窺い知ることができるように、この地域に居住するオロモの人びとは、家畜の飼養と農業を有機的に結合した有畜農業を営んでいる。調査地には4月から5月にかけての小雨季と6月から9月にかけての大雨季があり、人びとは5月の中旬から8月にかけて、トウモロコシ、ソルガム、コムギ、テフの栽培植物の播種床を整えるために牛耕を行う。本発表で扱うデータの多くは2007年8月から2013年3月の間に行った5回の調査（合計21ヶ月間）で得たものである。

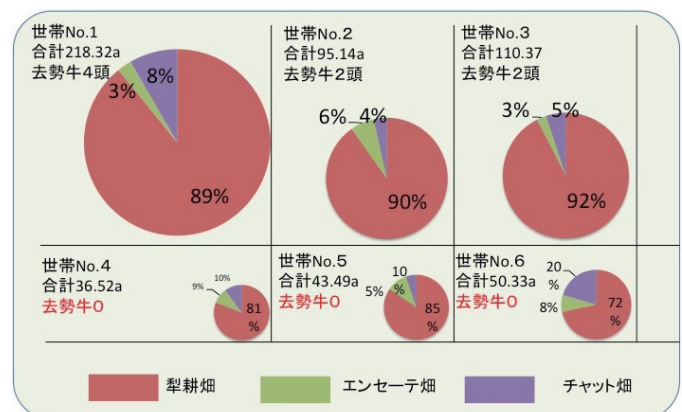


図1 農地面積の異なる6世帯の土地利用割合

3. テフの栽培・利用とウシの飼料確保の検討

6世帯の農地の利用割合について分析をした結果、世帯の所有面積の大小、去勢牛の有無にかかわらず、どの世帯でも犁耕畑の割合が72%以上と掘棒を用いて耕す畑に比べてもっとも高くなっていた（図1）。ウシを持たない3世帯でも犁を必要とする畑の割合が一番高くなっていた。6世帯の犁耕畑の作付品目別の面積割合を調べた結果、犁耕畑の面積の広さ、ウシの有無に関わらず、どの世帯でもテフの作付面積の割合が50%以上で最も高いことがわかった（図2）。

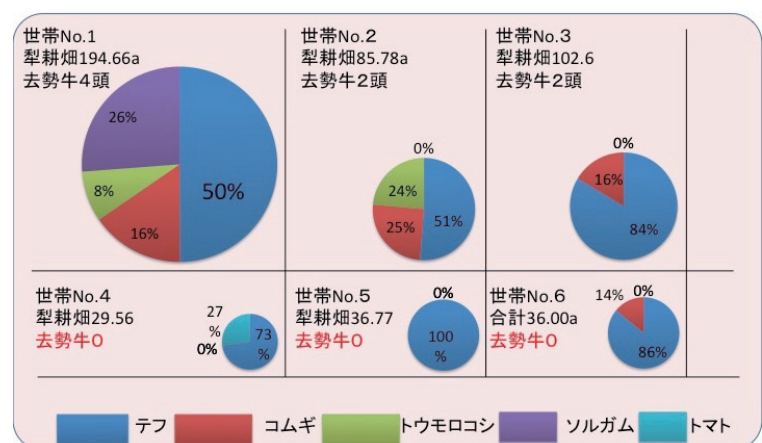


図2 犁耕畑面積の異なる6世帯の作付品目別面積の割合

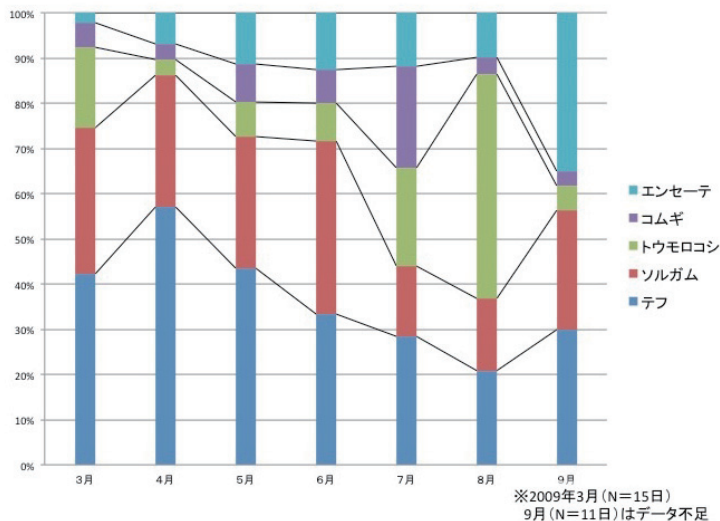


図3 世帯 No. 1 の月別主食材料の割合

脱穀した際にでる、稈を乾重量にしておよそ 4 kg 各去勢牛に給餌していた。適正な給餌量を算出するのに用いられる畜産学の飼料計算をおこなったところ、粗蛋白質、可消化養分総量、乾物摂取ともに、充足率を 100% 以上満たしていることがわかった。その結果から去勢牛への給餌量は適切な量であると評価することができた。テフは畑を耕す去勢牛にとっても必要不可欠であることがわかった。

また 1 年を通してテフ栽培から得られる飼料の量を農事暦と関連づけて検討した (図 4)。2011 年、去勢牛 4 頭 2 組、犁耕畑面積 194a をもつ世帯 No. 1 を例に検討した。8 月に合計 109a の耕起しおえた犁耕畑に 78kg 播種されたテフの種子は、11 月に 3000kg の作物体として収穫された。翌年の 2012 年 2 月に、テフの作物体を脱穀し、600kg の種子が得られた。種子の重量を作物体から差し引いた、テフ稈は 2400kg と推定でき、その量は、種子の 4 倍の量に相当した。世帯 No. 1 は、5 月に、ウシの飼料として各去勢牛 4 頭に、毎朝 1 時間ほど、4 キロずつ給餌していた。調査地域では乾季のはじめに、テフの稈が約 150 日分、つまり次の 1 年の犁耕期間を乗り越えられる量の飼料がすでに確保されていることがわかった。



図4 世帯 No. 1 におけるテフの農事暦と生産量

犁耕畑で育つテフは、人びとに主食のインジェラの材料となる、テフの種子を供給するのみでなく、稗は去勢牛の優秀な飼料として利用されていた。つまりテフの栽培と家畜の飼養が有機的に結合して循環していると考えることができた。

4. 牛耕の作業効率の検討

牛耕の作業効率を算出するために、4頭2組で牛耕をおこなった42の事例を分析した。その結果、平均犁耕時間は262分で、1日の犁耕面積の代表値は26.71aであった。この作業効率を地域の諸条件に即して評価するために、3世帯を対象に、犁耕期間と地域特有の休日などの条件をふまえて、作業効率、犁耕可能日数、犁耕畑面積の関係を定量的に分析した。その結果、ウシを所有する世帯は、人びとが語る適切とされる播種期間内に世帯が所有する犁耕畑を十分に耕しきれており、かつ余剰の犁耕力を有する作業効率であることがあきらかとなった。また地域の総畜力と総農地面積の関係を分析した結果、調査地では牛耕の作業効率で十分に地域全体の犁耕畑は耕しきれていることがわかった。

5. まとめと結論

上記の分析の結果、調査地域の牛耕には、①家畜飼料の確保、②牛耕の「低い作業効率」といった農民が抱えるとされる一般的課題に対応できる能力が存在しており、人びとの主食を支える栽培植物が育つ畑の「耕起」を持続的に担う仕組みとして優秀であると評価できた。エチオピア中央高原にはテフの栽培とウシの飼養と人などの諸要素が有機的に連関した持続型生存基盤としての犁農耕が実践されていた。

参考文献

- Aune, J.B., Matewos, T.B., Fenta, G.A., and Abyie, A. A. (2001). The ox ploughing system in Ethiopia: can it be sustained? *Outlook on Agriculture* 30(4): 275–280.
- Aune, J.B., Asrat, R., Teklehaimanot, D. A., and Bune, B. T. (2006). Zero tillage or reduced tillage: the key to intensification of the crop-livestock system in Ethiopia. *Strategies for Sustainable Land Management in the East Africa Highlands*. Pender, J., Place, F., Ehui, S. eds. 309–318.
- Cochet, H. (2011). A new perspective on animal traction in Ethiopian agriculture. *ITYOPIS* 1: 127–143.
- Goe, M.R. (1987). *Animal Traction on Smallholder Farms in the Ethiopian Highlands*. 380pp. Ph.D thesis Cornell University.
- McCann, J. C. (1995). *People of the Plow: An Agricultural History of Ethiopia, 1800 – 1990*. The University of Wisconsin Press.
- Melaku, T. (2011). Oxenization versus tractorization: options and constraints for Ethiopian farming system. *International Journal of Sustainable Agriculture* 3(1): 11–20.
- Melesse, T. (1999). Animal drawn implements for improved cultivation in Ethiopia: participatory development and testing. *Empowering Farmers with Animal Traction: Proceedings of the Workshop of the Animal Traction Network for Eastern and Southern Africa (ATNESA)*, held 20–24 September 1999, Mpumalanga, South Africa. Ed. Starkey, P., Mwenya, E. and Stares, J.
- Mouazen, A.M., S. Smolders, F. Meresa, S. Gebregziabher, J. Nyssen, H. Verplancke, J. Deckers, H. Ramon, J. De Baerdemaeker (2007). Improving animal drawn tillage system in Ethiopian highlands. *Soil and Tillage Research* 95(1-2): 218–230.
- Solomon, G., Abdul M, Mouaze, H. Van, B, Herman, R. Jan, N., Hubert V., Mintesinot B., Jozef D., Josse D. B. (2006). Animal drawn tillage, the Ethiopian ard plough, maresha: A review. *Soil and Tillage Research* 89: 129–143.
- Werth, E. (1954). *Grabstock, Hacke und Pflug*. Ludwigsburg, Germany. (ヴェルト (1968) 『農業文化の起源—掘棒と鋤と犁—』 藪内芳彦、飯沼二郎訳 岩波書店 東京 605 ページ)。

(たなか としかず)

日本ナイル・エチオピア学会 高島賞

第20回高島賞 審査結果報告

受賞対象論文

Sayuri Yoshida

**The Struggle against Social Discrimination:
Petitions by the Manjo in the Kafa and Sheka Zones of Southwest Ethiopia.**

Nilo-Ethiopian Studies 18, pp.1–19, 2013.

(参考論文)

吉田早悠里

『忌避関係から「差別」へ』

—エチオピア南西部・カファ社会におけるカファとマンジョの関係史から—

(2011 年度名古屋大学大学院文学研究科学位申請論文)

講評

吉田氏の上記の論文について、選考委員会は本年度の高島賞受賞にふさわしいと判断した。その理由を以下に述べる。

受賞対象論文は、南部諸民族州に居住するマイノリティ集団であるマンジョが、エチオピア政府に対して開始した独自の民族集団としての認定請求と、それに伴う権利獲得のための請願運動を扱ったものである。吉田氏はこの論文において、マンジョと対象地域のマジョリティ集団であるカファとの関係に焦点をあて、マンジョが請願運動を開始した理由を、隣接する民族の権利請願運動からの影響や運動を牽引したマンジョの教育水準の高さ等の点から明らかにしている。

この論文で評価すべき点は、「差別」という概念が、いかにしてこの地域に持ち込まれ、それがマンジョとカファとの関係を概念化する際に、誰によってどのような目的で使用され、それがどのような政治的な結果を生み出しているのかを、徹底して実証的に明らかにしようとした点にある。これは、吉田氏の長期にわたる粘り強い現地調査によって可能になったものである。マンジョとカファとの社会関係についての認識が、儀礼的な階層関係から、社会的な差別・被差別関係へと転換する契機や、NGO などの外部アクターが「差別」という概念を用いてこの社会関係に介入するありさま、そしてマンジョの一部がこの概念を受容したうえで、それを「民族」としての権利獲得運動に接続していくプロセスを、説得力をもって描いている。



参考論文の博士学位論文『忌避関係から「差別」へ エチオピア南西部・カファ社会におけるカファとマンジョの関係史から』は、受賞対象論文の内容を細部にわたって掘り下げたものである。この論文では、カファ王国時代からエチオピア帝政期、デルグ時代を経て今日の EPRDF 政権にいたるまで、対象地域の政治・社会の変遷を復原し、それがマンジョとカファとの関係にどのような影響を及ぼしたのかを丹念にたどっている。こうして明らかにされた両集団の関係の歴史は、民族誌的・社会史的資料の乏しい同地域において極めて高い学術的価値を持つ。論文においてなされている分析は、いずれも吉田氏自身の収集した一次資料に基づいており、マンジョとカファとの関係の転換と、「差別」概念の社会的な使用の実態を、人びとの肉声に基づいて豊かに記述している。

こうした、歴史的な視野をも含んだ関係性の記述は、1990 年代以降に民族の自己決定政策が取り入れられたエチオピアの、将来的な社会の安定性を模索する上で貴重な示唆を含んでいると考えられるが、他方で、吉田氏の研究がディテールの追究に労力を割きすぎているあまり、理論的あるいは実践的な展望につなげにくくなっている点も否めない。上述したように、対象論文は見事な民族誌的事実の蓄積によってその記述の力を得ているが、論文のそこそこに散りばめられているはずのヒントが、実際にはどのような展開をなし得るのかについてはあまり明らかではない。テーマが現代的であるからこそ、今後の吉田氏にはさらなる理論的な発展を期待したい。

吉田氏の研究成果は、エチオピア地域研究としても、また人類学研究としても、重要な学術的貢献をなしており、高島賞の受賞にふさわしいと考える。選考委員会は全員一致で吉田氏の論文をナイル・エチオピア地域における学術研究に大きな貢献をもたらした業績であると評価し、2014 年度高島賞に値すると判断した。

2014 年 4 月 19 日

選考委員会

(委員長) 佐藤 廉也

田川 玄

増田 研

第 20 回高島賞受賞によせて



吉田 早悠里
名古屋大学高等研究院

このたび、日本ナイル・エチオピア学会第 20 回高島賞を受賞し、身に余る光栄に感謝しております。今日まで、多くの先生方、諸先輩方、研究仲間に多方面にわたって助言、時には叱咤激励をいただけてきました。また、エチオピアでは現地の方々に支えていただきました。今回の受賞は、日ごろからの皆様のご支援あつてのことと身に沁みて感じています。ここに深い感謝の意を示したいと存じます。

私は、2004 年からエチオピア南西部カファ地方に暮らすマンジョを対象とした研究を行ってきました。受賞の対象として審査していただいた論文は、マンジョが政府に対して実施した請願活動と、政府の対応を明らかにし、民族自決を掲げる現在のエチオピアにおいて民族とはみなされないマイノリティに対する取り組みの問題点を検討したものです。ここでは、今回の受賞に至るまでの研究の歩みと、現在の研究内容について綴ってみたいと思います。

2002 年 8 月、私は初めてエチオピアの大地を踏みました。当時、南山大学の学部 3 年生だった私は、石原美奈子先生が担当するフィールドワークの授業の受講生でした。夏休みにヨーロッパを旅する予定を立てていた私に、石原先生は「あなたもエチオピアへ一緒に行かない？」とお声をかけてくださいました。そして私は、約 20 日間、石原先生の調査に同行させていただくことになりました。エチオピアでは、見るもの、接するものすべてが刺激的で、これを機に大学院への進学を決意しました。

大学院に入学した当初、私はコーヒー発祥の地とされるカファ地方でコーヒーを栽培する農耕民と世界経済の関係についての研究に取り組もうと考えていました。すると、故福井勝義先生が「カファ地方であれば、マンジョでしょう」とおっしゃいました。突然、私のもとにあらわれたマンジョという人々。当時、カファ地方に暮らすマンジョに関する最新の情報源は、エチオピアにおける職能集団や狩猟集団の現状を描き出した論文集『周縁の人々 (Peripheral People: The Excluded Minorities of Ethiopia)』に収められたゲザヘン (Gezahegn) による 7 ページほどの記述のみでした。ゲザヘンによると、マンジョはかつて狩猟を主な生業とし、現在も、共住するマジョリティの農耕民カファから日常生活のさまざまな側面において排除され、周縁化されているとのことでした。なぜマンジョはカファから排除され、周縁化されているのか。カファとマンジョの関係に関心を抱いた私は、マンジョを研究対象とすることにしました。

2005 年 1 月、私は初めてカファ地方を訪ねました。カファ地方の役場で調査協力を依頼すると、カファ地方長官はマンジョがカファから差別を受けていることを簡単に説明してくれました。折しも、NGO がカファによるマンジョへの差別を除去するための取り組みに着手するところだといいます。そこで私は、



NGO が活動を実施する地区のひとつであるビタ郡のウォシェロ村を最初の調査地とすることにしました。

当時、アムハラ語もカファ語も話すことができなかった私は、ウォシェロ村の小学校で教えるカファの教師たちが暮らす住居に滞在することになりました。私がお世話になったカファの人々は、口をそろえてカファとマンジョの違いを語りました。マンジョはイノシシ、サル、コロボスのほか、病気や事故で死んだ家畜など、何でも食べること、マンジョは不衛生であること、このような理由から、

カファはマンジョの家へ立ち入ったり、マンジョと一緒に食事をしたりすることはないと語りました。カファとマンジョの間での結婚は、論外であるといいました。

調査を進めるなかで、ウォシェロ村でカファによる差別に不満を抱いたマンジョが、2002年にカファを殺害する事件を起こしたということを知りました。カファとマンジョの双方から死者が出て、ウォシェロ村と近隣村に暮らす200人以上のマンジョの男性が逮捕されました。この事件について聞き取りを進めていくと、マンジョが1997年から政府に対して、差別の改善と、マンジョを民族として承認するように求める請願活動を実施してきたことも明らかになっていきました。そこで私は、2002年にウォシェロ村で発生した事件に焦点をあて、マンジョがカファによる差別を受けながらも、差別をなくすために自らカファや政府に対して働きかけていることについて論じ、2007年1月に修士論文を提出しました。

2007年4月に博士課程に進学した後、ウォシェロ村での事件の発生要因のひとつとされた、マンジョによる政府に対する請願活動に関して調査をはじめました。同時に、1897年までカファ地方に繁栄したカファ王国がエチオピア帝国に編入されて以降、カファ社会がどのように変化してきたのか、その変化の様相を多角的に明らかにしようと試みました。そのようななかで、現在のカファとマンジョの関係が、かつてのカファ王国時代のカファとマンジョの関係とは異なる様相を帯びたものであることが明確になっていきました。

加えて、カファ地方に継続して通ううちに、私は次第にカファとマンジョの関係を単に差別とみなすことに違和感を覚えるようになっていきました。というのは、日々の生活におけるカファとマンジョの関係には、差別という言葉では説明することができない関係が数多くあったためです。たとえば、それまで露骨にマンジョを罵り、マンジョは良くないと忠告するカファの人物が、マンジョに敬意を払い、さらには称揚するような語りをすることがありました。また、マンジョの母乳を飲んだ子どもは強く育つとされ、マンジョの参加が不可欠とされる儀礼もありました。

カファ地方では、役場や学校に勤務するカファや、村に暮らすカファとマンジョの人々が、両者の関係を差別と説明していました。そして、NGOやキリスト教会が差別改善に向けた取り組みを実施し、政府はマンジョに対するアファーマティブ・アクションを行っていました。しかし、人々の差別の語りは、目の前で繰り広げられている日常的なカファとマンジョの関係とは齟齬があるように感じられました。人々の差別に関する語りとは、現実とのギャップをどのように考えるのか。差別にとらわれることのない、人々の豊かな日常生活を描き出すことはできないか。それが私の研究テーマとなりました。

とはいえ、カファ地方を訪れる以前に読んだゲザヘンの著作では、マンジョがカファから排除され、周縁化されていると著されていました。カファ地方では、村に入る前から、そしてマンジョの人々に実際に会う前から、「マンジョはカファから差別されている」という語りを何度も耳にしました。私はマンジョと出会う以前に、既に差別という言葉にとらわれていたのです。

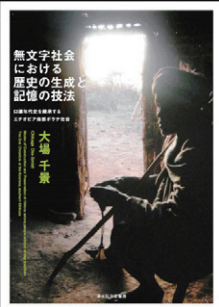
そこで、博士論文では、差別という言葉を中心に、どのような現実が紡ぎ出されているのかを明らかにしようと試みました。着目したのは、近年、差別が人権を脅かす問題として、国家、キリスト教会、NGOなどのさまざまなアクターによる取り組みの対象となっていることです。そして、国家、キリスト教会、NGOなど多様なアクターと、彼らが用いる差別の語彙に注意を払い、カファとマンジョの間での差別がどのように形成されてきたのかを検討しました。そこから、差別改善を目的とした取り組みが実施されることで、支援の対象となる社会に差別、人権、平等の語彙と概念がもたらされ、それらの語彙が対象となる社会に暮らす人々によって翻訳、活用され、結果として差別が強化されていることを明らかにしました。

実際には、カファとマンジョの日常生活においては、常に差別が介在しているわけではありません。それにもかかわらず、差別を分析概念として用いることにより、差別という言葉では説明することができない関係は分析の対象からこぼれ落ちてしまいます。そこで、2012年に博士論文を提出してからは、差別に限定せず、日常生活において人々がどのように他者を差異化し、自らと関係付けているのか、人々の日常のコミュニケーションや相互関係をつづさに観察・把握し、人々の社会的布置、相互関係、彼らの生活実態を社会全体から包括的に解明しようとしています。

現在はカファ地方での調査を継続しつつ、カファ地方からおおよそ10km離れたオロミヤ州ジンマ地方の村落で調査を行っています。その村落には、民族や宗教、出自、出身地の異なる人々や、難病を患った病人、悩みを抱える人々、身寄りのない人々がエチオピア各地から訪れて暮らしています。このような人々が、お互いをどのように受け入れ、共に暮らしているのか。彼らの日々の営みのなかから、差異とは何か、差別とは何かをとらえなおすことができるのではないかと考えています。

エチオピア研究をはじめて10年が経ち、高島賞を受賞したことを、ひとつの節目として、気持ちを新たに研究に地道に取り組んでいきたいと存じます。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

書 評



大場千景 著

『無文字社会における歴史の生成と記憶の技法
—口頭年代史を継承するエチオピア南部ボラナ社会—』

清水弘文堂書房 2014 年、431 ページ、7000 円＋税

野口真理子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本書は、著者が 2011 年に総合研究大学院大学文化科学研究科に提出した博士論文を加筆・修正したものであり、無文字社会に生きる牧畜民ボラナが約 6 世紀にわたり語り継いできた膨大な口頭年代史を詳細に分析したものである。

エチオピア南部に居住するボラナは、ガダと呼ばれる年齢階梯制度をもつ。ガダは 8 つの階梯に分けられ、そのうち第 6 番目の階梯にあたる人びとのなかから、ガダの父 (*abbaa-gadaa*) と呼ばれるリーダーが選ばれる。ガダの父は 8 年間、ボラナ全体の政治や儀礼の執行に責任をもつ。ボラナの人びとは、歴代のガダの父 70 人を年代順に並べて記憶し、それぞれのガダの父の治世における出来事を語る。本書で取り扱われる口頭年代史とは、このガダの父の年代表にもとづいて編年化された、過去の出来事に関する歴史語りのことである。これはボラナの言葉でアルガ・ダゲーティと呼ばれる。アルガ・ダゲーティを語ることは、ボラナにおいて政治的優位性を確保するために重要で、その語り手は限られている。著者は 2007 年から、46 人のアルガ・ダゲーティ保持者たちと対話し、彼らの歴史語りを録音、収集してきた。以下に、本書の構成を示しておく。

序章 歴史をめぐるふたつの視点

- 0-1 口頭年代史を継承する社会
- 0-2 先行研究の概観
- 0-3 人類学的歴史の探求
- 0-4 調査方法と本書の構成

第一章 口頭年代史を読みとくための基本情報

- 1-1 ボラナの生業
- 1-2 ボラナの社会と宗教

第二章 口頭年代史の背景

- 2-1 ボラナにおける口頭伝承の種類
- 2-2 アルガ・ダゲーティをもつ人々の社会的背景
- 2-3 語りの場と口頭年代史の生成、その聞き手たち

第三章 口頭年代史のカテゴリーとパターン

3-1 口頭年代史における語りのカテゴリー

3-2 口頭年代史にみられる語りのパターン

第四章 社会変動を超越する技法としての予言者物語り

4-0 予言者と「歴史」

4-1 ラーガとよばれる人々

4-2 社会変動とラーガ

4-3 予言・呪術成就史観

第五章 詩と歴史記憶

5-0 記憶しやすい型にもとづいた思考法

5-1 「歴史」化される英雄物語

5-2 記憶装置としての詩

5-3 詩が生成する複数の「歴史」

5-4 詩の消失と歴史語りの喪失

第六章 ボラナにおける歴史記憶の構造

6-0 解釈の様式としての構造

6-1 マカバーサという言説

6-2 構造化される出来事

6-3 歴史記憶の固定と創出

6-4 歴史記憶の構造と循環的時間

終章 社会構造と「歴史」への意志

7-0 歴史記憶の生成と継承を可能にする三つの技法

7-1 王をもたざる社会と歴史記憶

7-2 政治的闘争の場としての歴史記憶

7-3 権力と「物語り」への希求の産物としての歴史記憶

序章で述べられているように、これまでの歴史研究においては、口頭伝承を重要な資料と位置づけながらも、民族の歴史を実証的に再構成するために、非科学的な当事者たちの解釈の一部を「不純物的語り」として排除してきた。近年、この実践主義的な歴史学の方法論に対しその限界が指摘されるようになり、同時に、歴史研究に人類学的視点を組み込んだ新たな方向性がうちだされている。すなわち、口頭伝承を保持してきた人びとが信じる「歴史」を叙述することで彼らの過去への認識のあり方、その社会の世界観や信念の体系を明らかにするというものである。著者もまた、互いに矛盾する可能性をはらむ、ローカルな歴史実践と実証主義的な歴史叙述のふたつの視点のあいだに立ち、「実証主義的な歴史叙述すらもまたローカルな歴史実践のひとつであるとする、より人類学的な視点」から、無文字社会に生きるボラナの人びとの「歴史」が生成・継承されてきたメカニズムを解き明かすことを通して、「当該社会のもつ文化的な思考法や世界に対する認識のあり方」を明らかにした。

第一章では、ボラナ社会の概要について、特に口頭年代史を理解するうえで必要な、社会組織や儀礼などに関する基本的な情報がまとめられている。ボラナは、クランごとに自治をおこない、それぞれが自律した政治システムを持っている。ガダは、そのクランを横断してボラナ社会全体を統括する政治システムの基盤となっている。

ボラナにおいて「歴史」に関する伝承は、ガダと深いかわりをもつ人びとを中心に継承されてきた。第二章では、ボラナの口頭伝承におけるアルガ・ダゲーティの位置づけ、語り手の社会的背景、そして語りの場と聞き手について論じている。アルガ・ダゲーティ保持者の多くは、過去にガダの役職者など政治の中心を担う人物を何人も輩出してきた有名なリネージの成員であったことが明らかにされている。また女性は語り手にはならず常に聞き手であること、若者は学校教育などの理由で町場に住んでいるため語りを聞く機会に恵まれないことも指摘されている。語りの場における若者の不在によって、アルガ・ダゲーティ保持者の多くが、今後語りが継承されなくなるかもしれないという危機感を感じているという。第二章では他に、録音をはじめとする新たな記録媒体の登場によって語りの形態や場が変化していることも述べられている。

第三章は、口頭年代史における語りの内容をカテゴリー化し、また実際に語られる際の語りのパターンを分析した章である。著者は、聞き取りをおこなった46人のうち、時代を同定しながら出来事を詳細に語った14人の語り手から収集した歴史語りの内容とその語り方を検討した。ボラナの口頭年代史は、他民族との紛争に関する話題、旱魃・異常な降雨などの天災に関する話題、ガダの父・英雄や賢者などの人物談、そしてボラナ内部での争いに関する話題が、全話題の大部分を占めており、これら4つの話題が中心となって口頭年代史が構成されていることが明らかになった。また、口頭年代史の語り方には、以下の4つのパターンがみられた。すなわち、(1) 文化的災因概念を背景に、出来事の生起を法則的に語るパターン、(2) 合言葉のように定型化した言いまわしや、詩・詩的台詞が挿入されるパターン、(3) ガダの父の出自など、継承の正当性と社会にとっての不幸な出来事の関係に言及し、出来事を政治に巻き込むパターン、そして(4) 筋書き自体がある程度標準化・定型化した語りを、別の時代に生起した出来事に対して転用し、同一の筋書きをもつ類似した出来事として語るパターンである。語り手はこれらのパターンを選択・組み合わせて出来事を語る。それぞれの語り手が語る「歴史」には多くの一致がみられるが、採用するパターンの違いによっては、語りの内容や取り上げる出来事が多様化してしまうという。著者は特に、(4)の語りの転用事例の一部において、時代の同定における「間違い」または「記憶違い」ととれるような語りの存在を指摘する。例えば多くの語り手によって時代が同定されている出来事を、一部の語り手が別の時代の出来事として語るものである。著者はこれらの語りについて、語りの技法や年代を同定する規則の存在を裏書きするものと指摘している。

第四章から第六章までは、歴史語りのなかで頻繁に言及される予言者ラーガ、詩的句群、そしてマカバーサという文化的災因概念に着目し、出来事を「歴史」にする記憶のメカニズムについて考察している。第四章では、「ラーガに関する具体的な歴史語りを分析」することで、予言者物語りの歴史記憶における役割について考察している。ラーガは、ボラナ社会の未来を予言する者として、紛争や天災、内紛など、ボラナ社会を揺るがすような出来事の生起に関する説明者として、または自らの呪術によってその出来事を引き起こす動因者として、口頭年代史に頻繁に登場する。ラーガの予言は、語り手の省察が加えられながら再解釈され、コンテクストを変えて登場することもある。ラーガの予言を聞き入れて行動したかどうかで危機的状況を克服できたかどうか語られる。つまり、口頭年代史においてラーガの挿話は、未曾有の出来事を必然的な「歴史」として解釈・超克するためのひとつの技法となっているのである。

第五章では、「声の文化」に属する人びとの思考のあり方と歴史記憶の形成とのかかわりについて、歴史語りで発話される詩に着目し、明らかにしている。韻のつながりを重視し、リズムカルで変形されにくいという特徴をもつ詩は、人びとの記憶に染み込みやすい。このような詩的句をたびたび発話する技法は、ボラナの口頭年代史がある程度の一致性を保つための記憶装置となっている。しかしながら、句は、それだけでは意味が不明瞭である。その句が生成した「歴史」的コンテクストの理解に応じて、句はいかようにも解釈され、語り手の間で異なる歴史記憶が生み出される可能性があるという。

さらに、第六章では、規則的サイクルによってガダの父に振り分けられる「ガダの父のマカバーサ」という文化的災因概念に焦点をあてている。ガダの父には、年代に沿ってそれぞれに意味をもつ7つのマカバーサが順番に付与される。例えば、7つのマカバーサのうちのひとつめであるフラーサが与えられたガダの父の治世には、ボラナ内部および他のエスニック・グループとの紛争の運命があるとされる。同じマカバーサが付与されたガダの父の時代には、同じ運命がプログラムされたかのように生起すると考えられているのである。著者はこれをマカバーサ・サイクル史観と呼び、このような循環的規則のもとで、これに合致するような出来事が取捨選択され、歴史記憶の一致性を高めてきたと分析している。ただし、このマカバーサ・サイクル史観による歴史記憶の取捨選択はしばしば誤作動をおこし、先に述べたような出来事の生起した時代の同定における「間違い」や「記憶違い」と結びつくことで、まったく新しい「歴史」が創出されることもあるという。ここではまた、このマカバーサ・サイクル史観をもとに、彼らは未来に起こる「ボラナの歴史」についても語ることで、そして彼らの歴史記憶に内在する、ボラナの観念的時間概念についても言及している。

著者は最後に、ボラナの人びとは、なぜ以上のような複雑な技法をもって「歴史」を構築・維持してきたのか、またはしなければならなかったのだろうかという問いを投げかける。この問いを解明するため、終章では、ボラナに歴史記憶が存在する意味について、年齢階梯制度ガダとの関係から考察をおこなっている。集権的政治構造をもつ社会は、歴史への意志を強くもつという川田[2004]の指摘に反して、ボラナ社会は非中央集権的であるにもかかわらず「歴史」を構築・維持してきた。この点について、著者は、「王朝をもつ社会に限らず、集団を統合化させるなんらかの組織をもつ社会」には、「歴史」を構築し、維持しようとする意志が働く」のではないかという仮説を提示している。ボラナは他民族との紛争を繰り返しながら、ガダを中心にきわめて凝集性の高い社会を維持してきた。その一方でガダやクランの役職者間、または半族やクラン同士の対立など、集団内部での分裂への志向性も持ち合わせていた。これらを背景に、彼らが「社会が存立するための正当性と安定性」を確保するための「歴史」への意志」をもち、現在の歴史記憶の構造を形成してきたのではないかと著者は論じている。政治的優位性を確保するために、リネージの正当性を主張する方法としてアルガ・ダゲーティが語られ、リネージの保身的語りと敵対リネージの秘密の暴露を繰り返しながら、「歴史」が明らかにされる。このような過程で明らかにされたその「歴史」には、ある程度の不一致はみとめられるものの、結果として高い一致性をもち、集団に凝集性をもたらしているのである。しかし一方で、政治的中核にあるリネージの成員以外の人びとにとっては、リネージの歴史的な正当性よりも、破局的な出来事の生起に必然性を創出することの方が重要なのではないかと指摘する。本書を通して明らかになったボラナの「歴史」の生成と記憶の技法は、不条理のなかで安寧を保って生きていくために欠かせないものであった。つまり彼らは、世界で生起する現象の仕組みを説明するような文化的「物語り」を生み出してきたのである。この「物語り」の希求も、ガダの永続性の確保に寄与してきたと著者は結論づける。

しかしながら、本書で取り扱った「ローカルな歴史実践」は、口頭年代史アルガ・ダゲーティの分析にもとづくものであり、これを語ることのできる者は一部のボラナである。そしてそこには複数の「歴史」が存在しうる。ここから導き出された「文化的思考法や世界に対する認識のあり方」をボラナ社会に通底するものとして理解するためには、やはりその他大多数の、アルガ・ダゲーティを聞くだけの、また聞く機会が限定されている「一般の人びと」にも注目する必要があるだろう。ここに、口頭年代史研究の限界があるといえるのではないだろうか。特に、著者自身も言及しているが、「歴史」を語ることのない「一般の人びと」は、さまざまな破局的出来事を「歴史」に言及せずとも文化的災因概念のみ、もしくは新たな思考法をもって説明することが可能であると考えられる。とはいえ、「歴史」が語られることで不条理をより必然的に、そして説得的に説明することができ、語り手や聞き手の「文化的思考法や世界に対する認識のあり方」、そしてガダの永続性がこれに支えられてきたということは確かであろう。そして本書で提示された彼らの歴史認識や時

間概念は、実証主義的な歴史学のアプローチからも、あるいはこれまでのボラナ研究で主流であった生態・社会人類学のアプローチからもみえづらかった部分ではないだろうか。この意味において、当事者たちの解釈が入り混じるローカルな視点を調和・共存させるかたちで歴史叙述をおこなった本書のアプローチは非常に示唆的である。ボラナの口頭伝承はアルガ・ダゲーティだけではない。ボラナ社会における「実証的な世界観」を究極的には叙述したいという著者の、今後の研究の進展に大いに期待している。

最後に、本書の魅力のひとつとして、膨大な歴史記憶を長年にわたり語り継いできたボラナの豊かな「歴史」を構成する歴史語りの一部が、巻末に資料として収録されていることを挙げておきたい。これらは直訳に近い形で翻訳されており、ボラナの老人たちの語り口やその内容に読者が直接触れることができる。短いものは1、2行、長いものでは数ページに及ぶ語りの長短、内容の濃淡、またそれぞれの語り手がひとつの時代についてどのように語っているかを、実際に読者自身が読み比べることができる。これは著者以外の研究者に原データの参照可能性を確保することを目的とした配慮でもある。実際に読んでみれば、ボラナにおける歴史語りに、ある程度の不一致性を内包した一致性が確保されてきたことや、本書の冒頭で述べられている、著者が調査の上で感じた「歴史のツボ」、すなわち、過去無数に起きてきたであろうさまざまな出来事のなかで、「ある種の出来事に対してはツボにはまったように語りが尽きない」様子が伝わってくる。複雑なボラナの社会構造やそれに関わる用語などはやや難解な印象を与えるが、無文字社会ボラナの豊かな「歴史」とその「歴史」を構築・維持してきたボラナの歴史実践を垣間見ることのできる一冊となっている。

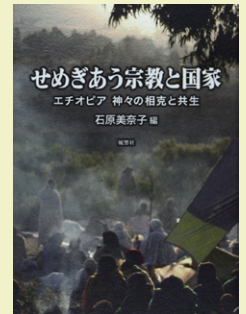
参考文献

川田順造、2004、『アフリカの声―「歴史」への問い直し』青土社。

(のぐち まりこ)

新刊ライブラリー

石原美奈子 編

『せめぎあう宗教と国家
—エチオピア 神々の相克と共生—』
風響社 2014 年、440 ページ、5000 円＋税

江端希之

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本書の特徴は、エチオピアに存在する多様な宗教的实践を、人類学者ならではの「下からの視点」で横断していくところにある。その視座は、一見するとキリスト教やイスラームといった普遍宗教に覆い尽くされているかに見える表層を突き破り、その奥底にうごめく多様で重層的な「人々によって生きられている宗教実践」の現実態を明らかにしていく。すなわち、本書は歴史化された宗教（キリスト教・イスラーム）のみならず、歴史化（文字化）されてこなかった宗教（精霊崇拜・呪術等の在来信仰）の世界に、深く分け入っていく。

本書は五部構成となっている。「第一部 国家と宗教」（石原美奈子）では、第一章で「国家を支える宗教」としてエチオピア正教を、第二章で「国家に抗う宗教」としてイスラームを取り上げている。二大宗教がエチオピア国家の形成にどのように関与してきたかの歴史をたどり、国家との関係性を論じている。両宗教の共存にも関わる近年の問題として、聖者崇拜やスーフィズムを支持する穏健派イスラームに対し、それらを迷信として否定する急進派イスラームの台頭を挙げている。

「第二部 偏在する信仰」は、南部のマロとボラナにみられる信仰のあり方に焦点を当てている。第三章「邪視・変身・食人」（藤本武）は、プロテスタントへの改宗が進み、見え辛くなりつつあるマロ社会の在来信仰（妖術・邪術・呪術）について紹介している。アフリカ・

中東をも視野に入れた比較を行いながら、エチオピアにおける呪術的信仰の特異性を指摘している。第四章「福因と災因」（田川玄）は、オロモの一支族であるボラナを取り上げている。ガダ（年齢階梯システム）と密接に関わるボラナの宗教的世界を、「福因論」と「災因論」という枠組みを利用しながら分析している。

「第三部 精霊と権力装置」は、南西部のホールとカファにみられる精霊崇拜についての対照的な報告である。精霊崇拜が、社会政治環境の変化に伴い、一方は受容され、一方は破棄されつつある状況を描いている。第五章「精霊憑依と新たな世界構築の技法」（宮脇幸生）では、外部から流入した精霊憑依カルト（アヤナ・カルト）が、ホール社会に定着する過程を紹介している。その過程とは、ホール社会における矛盾や葛藤に悩む人々が、「新たな対抗的世界を構築する技法の普及プロセスである」と分析している。第六章「世俗を生きる霊媒師」（吉田早悠里）では、カファ社会の精霊エコ信仰が、各時代の政治体制の中でどのような状況に置かれ、その中でどのように実践され、社会的地位が変遷してきたのかをたどっている。エコ信仰は衰退しつつあるかに見えるが、霊媒師アラモは時代の変化に合わせてたたかに生き延び、信仰ではなく文化として生き延びていく可能性が示唆されている。

「第四部 対立と共存」は、南西部の二つの社会における世界宗教をめぐる対立と共存について取り上げている。第七章「対立・干渉・無関心」（増田研）は、バ

ンナにおけるプロテスタントの普及と、それに伴って生じる非キリスト教徒との対立、干渉、無関心という、社会関係の「振れ幅」を記述している。第八章「対立を緩和する社会関係」（松村圭一郎）は、ジンマの農村で平和裏に共存するムスリムとキリスト教徒の社会関係を取り上げている。ここでの宗教の差異は横断可能なもので、対立や紛争の原因とはならず、むしろ多様な選択肢を提供する潜在的な可能性を持つことを指摘している。宗教の差異とは、複数の社会関係の中の一つの境界に過ぎないことが描かれている。

「第五部 偏在する神性を求めて」は、聖地巡礼・聖者廟参詣を取り上げている。第九章「ショワ・オロモの悩みと対処」（松波康男）では、オロモ農村部におけ

るイスラーム聖人崇拜や精霊崇拜に関わる聖地を紹介している。これらの聖地では、悩みを抱えた人々が共に祈りあうことで、宗教や民族を超えた「共同性」が生じていると分析している。

本書は、世界宗教に対して「宗教学的な」（ないし神学的な）知識のみを有する日本の宗教関係者、あるいは宗教学関係者にもぜひ読んでもらいたい作品である。キリスト教やイスラームに対する先入観（紋切り型の理解）というものが、本書を読むことで崩れ去り、宗教的世界の豊饒性が読者の眼前に一気に開けてくるとだろう。

（えばた まれゆき）

内藤直樹・山北輝裕 編 『社会的包摂／排除の人類学 —開発・難民・福祉—』

昭和堂、2014 年、255 ページ、2500 円＋税

村橋勲

大阪大学大学院人間科学研究科



本書は、開発・難民・福祉という複数の領域において、「アサイラム空間」という場に注目し、社会的包摂／排除がどのように形成され、進行しているかを検討している。「アサイラム空間」とは、「難民キャンプ・先住民定住地・障害者福祉施設・児童福祉施設などの何らかの『全制的施設（total institutions）』、およびそれがかかわる地域社会・市場・制度・組織などが複雑に絡み合うなかで形成される包摂と排除が入り組んだ空間」（本書 1 ページ）を指している。従来的人类学が、国家の影響が小さい地方や世界経済の周縁地域をフィールドとしてきたのに対し、本書は、大規模経済開発の現場、難民収容施設、医療機関、福祉施設といった公権力が強く作用する空間に注目し、そこに関わるさまざまな当事者が、公権力や市場とどのような関係を創出、維持しつつ、生活空間を構築しているかを描き出している。

本書のタイトルである「社会的排除（social exclusion）」は、1980 年代にヨーロッパが直面した新たな貧困問題を分析するために生み出された概念である。当時のヨーロッパでは技術革新と経済構造改革が進む一方、若年長期失業者や移民労働者の生活水準の低下が社会問題と認識されるようになっていた。また、新たな貧困層は、エスニシティ、人種、宗教、言語、ジェンダーとも強い関連性があったため、貧困問題は、単に経済的な問題ではなく、より多元的な要因に起因すると考えられるようになった。宮崎（2014）は、「貧困」が、経済的な不足のみに焦点を当てる概念であるのに対し、「社会的排除」という概念は、経済的な指標に加えて、標準的な生活を維持するための資源の不足や社会への参加に焦点を当てている点に大きな違いがあると主張する。また、前者は、ある時点での経済状態に注目し、静態的な分析を主とするが、後者は、資源の

不足や関係性の欠如に至る過程に注目し、人々が社会的、経済的、政治的にどのように締め出されているかを動的に捉えようとする、という特徴がある（宮崎 2014）。一方、「社会的包摂（social inclusion）」は、「社会的排除」に対置される概念であり、「社会的排除」を解決するための政策の理念を示す用語として使われるようになった。

各章の概要は以下のとおりである。まず、第Ⅰ部（第1章から第4章）では、開発が進行する場に生きる牧畜民や狩猟採集民が直面している変化と彼らの対応について書かれている。第Ⅱ部（第5章から第8章）では、難民というグローバルな他者が庇護国で経験する社会的排除と彼らが新たに構築した地域社会との紐帯や生計手段、そして、日本に再定住した難民と地域社会とのインフォーマルなネットワークについて触れられている。そして、第Ⅲ部（第9章から第12章）では、日本国内のホームレスや日雇い労働者を対象にした自立支援センター、そして精神病やハンセン病の患者が暮らす福祉施設において、制度的包摂／排除とは別の形で日常的包摂／排除が起きていることを明らかにしている。

ここでは、アフリカにおける開発と難民に関する4つの章を紹介する。第1章で、内藤は、ケニア東部州のウシ・ラクダ牧畜民、アリアルルの調査を進めるなかで、「伝統的な社会」と思われたフィールド村が、カソリック・ミッションの拠点の「発展」する町を避け、遠隔地に移住した人たちによって築かれた集落であることに気付いた。彼は、フィールド村の歴史を過去の開発プロジェクトとの関連から再構成し、開発プロジェクトがもたらした町周辺の人口増加と住民間のコンフリクトが、町に住む牧畜民の再牧畜化という再帰的な実践をもたらしたと主張する。アリアルルのように、現代のアフリカの農村では、複数の開発プロジェクトを経験してきた人々が別のプロジェクトを経験していることが珍しくない。本章は、開発の現場が異文化間の交渉・葛藤の場であり、開発プロジェクトが目指す「発展」と地域住民が求める「発展」とが必ずしも一致しないことを示している。

第2章で、佐川は、牧畜民ダサネッチが居住するエチオピア西南部における大規模開発をめぐる開発と伝

統の対立に注目する。エチオピア政府は、2006年からオモ川上流部に巨大ダムの建設を進めているが、ダム完成後は、下流域に肥沃な土壌をもたらしてきた氾濫がなくなり、ダサネッチの生業に決定的な打撃を与えると予想されている。また、外国企業が農場開発を目的にダサネッチの放牧地や居住地を買い占め、彼らを半強制的に移住させるという事態も進行している。現在まで、政府主導の開発事業は地域住民に対する十分な補償や利益供与をしていない。それに対して、国際 NGO は、開発が地域住民の伝統的な生活を脅かすものだと強く批判している。一方、佐川は、開発推進派のローカルエリート、開発容認派の長老、そして強硬な開発反対派の若者がいるように、ダサネッチのなかにも複数の声があり一枚岩ではないと指摘している。そのうえで、国際 NGO は開発反対派の声のみをダサネッチの「真の声」として代弁しており、彼らの開発批判が、当事者の視点抜きに「開発の促進か伝統の保護か」という二者択一的な議論の枠組みを作っていると批判している。

第5章と第6章は、いずれもザンビアにおけるアンゴラからの避難民を取り上げている。第5章で、中山が調査したマクワユクワ定住村は、1966年に開設され独立闘争とその後の内戦から逃れた難民を受け入れてきた。マクワユクワ定住村では、村内の学校や診療所、マーケットといった都市機能が難民だけでなく地域住民に便益をもたらし、地域住民が難民といっしょに村内の施設を利用するようになった。また、難民も村外に出て日雇い労働や酒の販売によって現金収入を獲得するなど、難民と地域住民とを隔てる境界は希薄になっている。中山によれば、難民収容施設は、「国民ではない者」を包摂する空間であると同時に、彼らを遠隔地に隔離しておくための排除装置でもあるが、本章は、難民の包摂と排除が、難民と地域住民双方の日常実践を通して変化し、両者の間に新たな関係性が構築されていることを物語っている。

一方、第6章で、村尾は人道支援に依存しない自主的定着難民に注目している。一般に、自主定着難民は、経済的な自立を達成し、かつ地域社会に包摂されていると考えられ、国際社会から「難民の成功例」と捉えられている。しかし、村尾によれば、彼らは地域社会

から社会的、経済的に排除されているという。たとえば、自主的定着難民が居住するザンビア西部州では、土着の首長が住民への土地配分を決める伝統的な土地支配制度を政府が容認している。土地の首長は、歴史的に、アンゴラ移住民に肥沃なザンベジ川氾濫原の利用を許可してこなかったため、移住民たちは林が広がる痩せた土地を利用するしかなかった。そのため、彼らは、アンゴラで行っていたトウモロコシ栽培を放棄し、焼畑耕作によるキャッサバ栽培に依存している。現在、主食であり現金収入源でもあるキャッサバは唯一の資源として彼らの生計を支えているが、これはキャッサバ生産が維持できなくなれば、生計の維持が困難になることを意味している。このことから、村尾は、自主的定着難民を「難民の成功例」として称揚する言説が、彼らの自立や創意工夫の限界を看過し続けることになるだろうと論じている。

最後に、本書全体を通して見えてくる「社会的包摂／排除」の概念と実相について要約する。「社会的包摂／排除」という概念は、元来、ヨーロッパにおける新たな貧困問題を分析するなかで生み出されたものであ

るが、本書は、現代のアフリカや日本においても、同様の概念が適用可能であることを示唆している。また、各章の詳細な事例は、社会的排除を解決しようとする制度的包摂が別の形で排除を生み出す一方で、隔離された人たちが日常的包摂の場を再構築するといった「排除と包摂の複雑なスパイラル」（本文 243 ページ）とでもいうべき動態を描き出している。包摂と排除は、二項対立的に捉えられがちだが、実はコインの表裏の関係にあり、ある人々を選別し包摂することが、そこから抜け落ちる人々を排除することにつながっていく。国家や地域社会による包摂／排除によって形成された「アサイラム空間」は、ますますグローバル化しており、その場に関わる当事者たちの葛藤、協働、交渉、相互作用によって多様な相貌を見せている。

参考文献

宮崎理、2014、「ヨーロッパにおける社会的排除概念—ポストコロナアルな議論との関連において」、北星学園大学大学院論集第 5 号（通巻第 17 号）、35-47 頁。

（むらはし いさお）

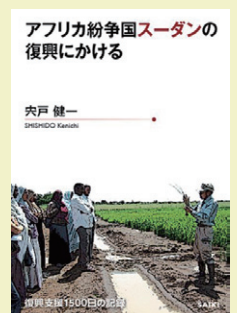
宍戸健一 著

『アフリカ紛争国スーダンの復興にかける —復興支援 1500 日の記録』

佐伯印刷、2013 年、222 ページ、1500 円＋税

村橋勲

大阪大学大学院人間科学研究科



本書は、内戦終結後のスーダンにおいて、JICA（国際協力機構）が取り組んだ復興支援と地域開発支援の活動記録である。スーダンは独立前年の 1955 年に南部で勃発した叛乱を皮切りに南北間で 2 度の激しい内戦を経験した。2005 年の CPA（包括和平協定）で第二次内戦は終結し、2011 年、南部スーダンは「南スーダン共和国」として分離独立を果たした。長期にわたる内戦のため、首都ジュバにおいてもインフラ整備の遅れや衛生状態の悪さが際立っている。著者の宍戸氏は、

CPA（包括和平協定）締結後の 2007 年に JICA スーダン駐在員事務所長として首都ハルツームに赴任し、2011 年までスーダン全体の支援事業に携わってきた。各章では、南北スーダンでの著者の経験から、試行錯誤の連続となった各地域での支援活動の内実や対象となった地域の様子、そして地域住民の反応などが描かれている。

プロローグで、2011 年 7 月に著者が出席した南スーダンの独立式典での国民の熱狂ぶりにふれた後、第 1

章では、スーダンで南北内戦をはじめ長期間におよぶ紛争が多く発生した歴史的背景が説明されている。第2章では、1993年に閉鎖された現地事務所の再開に向けた準備と現地の様子について書かれている。日本は東西冷戦下の1960年代からスーダンを西側諸国の一員として積極的に支援してきた。しかし、激化した南北紛争で重大な人権侵害があったとして、欧米諸国が対スーダン援助を相次いで凍結し、1992年には日本も政府開発援助（ODA）を停止した。本章では、国連や世界銀行による合同評価調査団の派遣とスーダン支援再開の動きについて書かれている。

第3章では、ハルツームとジュバにおける現地事務所立ち上げの苦労について書かれている。ここでは、内戦終結後のジュバの状況についても紹介されており、短期間でジュバの人口が急増し、市街地が急速に拡大していったことがわかる。第4章では、南部スーダンへの支援事業として行われたジュバ河川港の整備、除隊兵士を含めた職業訓練、農業、教育、保健分野での人材育成について詳述されている。南部スーダン暫定自治政府と州政府との軋轢、職業訓練事業の拡充で障壁となった欧米の支援団体との意見の違いなどが書かれており、支援事業が決定されるプロセスが垣間見える点が興味深い。

第5章と第6章は、北部スーダンへ活動の舞台が変わる。北部スーダンでの支援は、「東西南北をバランスよく支援すること」というJICAのスーダン支援の方針に沿ったものである。第5章では、北部スーダンにおける母子保健や水供給といった社会サービスの提供とコメの増産・輸出に向けた支援事業について、第6章では、ダルフル地方、東部スーダン、南部暫定統治3地域（南コルドファン州・青ナイル州・アビエイ地区）における、母子保健と職業訓練の取り組みについて紹介している。これらの支援事業のなかで、著者が大きな期待を寄せているのが、2010年から始まった農業再活性化プロジェクトである。このプロジェクトでは、アフリカ系の稲とアジア系の稲を交配して作られた新品種「ネリカ米」の普及活動が進められている。著者によれば、スーダンは、稲作のポテンシャルが非常に大きく、ソルガムや他の作物と比べても「ネリカ米」は十分な収益性が見込まれる、ということである。

こうした大規模農業開発の背景には、国際的な農産品価格の高騰と石油に代わる収入源を確保したいというスーダン政府の意向もあると考えられる。

第7章は、再び南部スーダンでの活動に戻り、2009年から始まったジュバ市内の橋梁整備と新ナイル川橋建設プロジェクト、そして、2010年の総選挙の結果、南部独立の可能性が現実味を帯びるなか、国家の機能強化を図る取り組みのひとつである税関支援について事業の推移が紹介されている。著者は、JICAにとって新しい国家の建設に携わるということは稀有の経験であり、欧米諸国や中国がさまざまな支援事業を進めるなか、各国が手がけていない事業に迅速に着手していく必要性があったと述べている。

エピローグでは、著者が考えるJICAとしての国際協力のあり方を明確に述べている。それは、1. 都市と地方の支援のバランス、2. 地域のニーズに合わせた支援活動、3. 活動体制の迅速な構築、である。そのうえで、南北スーダンへの支援は、スーダンからの石油資源の安定確保とスーダンの農業生産力の向上のために必要であると指摘する。さらに、日本の国際的地位の向上という点からも、南北スーダンへの支援は日本の国益にかなうと結論づけている。

本書は、JICAによるプロジェクト記録集というよりは、事務所長として赴任した著者が、自身の経験や意見にもとづいて対スーダン支援を振り返るものである。あとがきで、「スーダン側を見すぎて東京のJICA本部との間で紛争を起こしたことも一度や二度ではなかった」と記しているように、著者の意見は必ずしもJICA本部の意見ではなかったようである。しかし、著者が貫いてきた「自助努力の尊重」という姿勢は財政的な支援だけを求める被支援国の行政組織に対して、自分たちの手で地域開発を実施することの重要性を示すことにつながったと考えられる。一方で、地域による支援の格差、被支援国から指摘されている日本人専門家の高すぎる人件費、そして、住民の要望である迅速な事業展開は、解決すべき課題として残されているように思われる。

最後に、本書以降の南スーダンの状況について付記しておきたい。2013年12月以降、南スーダン国内では新たな戦闘が発生し、現在も実質的な内戦状態にあ

る。プロローグで触れられているように、独立式典で、サルバ・キール大統領は、「夜は長すぎるが、朝は必ずやってくる」というアフリカの諺を引用しながら、「今、私たちにはトンネルの出口の光が見えた、これを祝おう、そして一緒に正しい道を歩もう」と演説した。現在、政権側と反乱軍側との和平交渉が一向に進まない

なか、「暗いトンネルから抜け出す日」がいつ来るのだろうか。そして、戦闘発生後中断されている南スーダンでの JICA の活動はいつから再開され、どのように展開されるのだろうか。南スーダンの将来とともに本書以降の JICA の活動の行方にも注目していきたい。

(むらはし いさお)

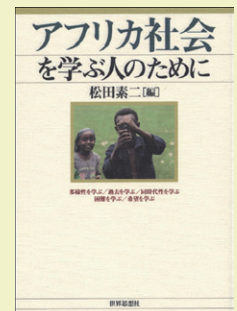
松田素二 編

『アフリカ社会を学ぶ人のために』

世界思想社 2014 年、322 ページ、2300 円＋税

吉田早悠里

名古屋大学高等研究院



本書は、人類学、社会学、霊長類学、歴史学、言語学、文学、政治学、経済学、医学、農学などをベースに学際的な活躍をしている第一線のアフリカニストであり、フィールドワーカーでもある執筆者によって著されたものである。編者の松田素二の言葉を借りれば、本書はアフリカの苦難と希望、問題点と可能性の両方を、アフリカ社会の「現場」から見て、考え、感じる新たな立場を提案しようという想いで作り上げられている。

本書は5部から構成されている。章立ては、第1部 多様性を学ぶ（民族と文化／言語／生態環境／生業）、第2部 過去を学ぶ（人類誕生／古王国／奴隷交易／植民地支配と独立）、第3部 同時代性を学ぶ（ポピュラーアート／ライフスタイル／結婚と家族／宗教生活）、第4部 困難を学ぶ（政治的動乱／経済の激動と開発援助／自然保護と地域住民／感染症）、第5部 希望を学ぶ（在来農業／相互扶助／紛争処理／多文化共生）となっている。それぞれの章のタイトルからもわかるように、本書は「5つの学び」を柱としている。

アフリカに関する概論書は数多くあるが、それらと本書を分けるのは、本書の基本的な姿勢が従来のアフリカへのまなざしを再検討し、アフリカ社会から学ぶ点にある。そもそも、アフリカはどのような

イメージを付与されてきたのか。本書の序では、アフリカに対する認識が再検討されている。アフリカは、ヨーロッパ世界による15世紀からはじまる奴隷貿易と、19世紀以降の植民地支配によって暴力的かつ体系的に歪められてきた。そして独立後は、民族紛争や貧困・低開発に苦しめられ、「未開と野蛮」と表象された「絶望の大陸」としてのイメージが1990年代まで続いた。20世紀末以降、アフリカは世界経済のなかでもっとも高い経済成長を遂げ、世界に対するアフリカのイメージは「資源供給」「魅力的市場」へ、そして「希望の大陸」へと変化を遂げているようにみえる。松田は、このようなアフリカに対する認識は、世界システムのポリティクス力のなかで、世界が数世紀にわたって意識的かつ体系的に作り出したものであるという。本書は、このような認識を、同じく数世紀にわたってアフリカ社会が創造してきた知恵と実践、すなわち「アフリカの潜在力」に着目することで乗り越えようと試みるものである。

「アフリカの潜在力」とは、アフリカ社会が、外部世界からの影響を受けるなかで常に衝突や接合を繰り返しつつ、そこで生じる問題を解決するための能力を備えていることを前提とした開放的で動的な視点である。各章で論じられているように、アフリカには多く

の民族が暮らしている。国境と民族分布や言語分布は必ずしも一致しない。もともと、人類がアフリカで誕生して以来、人類は数十万年をかけてユーラシア、アジア、アメリカ、オセアニアへと拡散してきた。さまざまな言語や文化を備えた人々が移動や交易を通して交流するなかで、人々は包括性と流動性、複数性と多重性、混沌性とブリコラージュ性といった特徴を有した知識や実践を育み、さまざまな事柄に対処してきた。

このような知識や実践を、多角的に学ぶことができるのが本書である。各章では、それぞれのテーマの概要がわかりやすくまとめられ、個別の事例によって具体的に深められている。たとえば、ポピュラーアートを著した岡崎彰は、「アフリカ文学」や、近年、急速に台頭してきた「ノリウッド」系の大衆映画などを提示しながら、アフリカ社会特有の人間関係のあり方を知ろうえで、人びとの語る力、人を読む力に注目することが重要であるという。また、松田素二は、今日のア

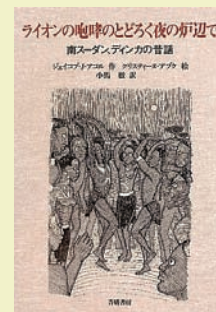
フリカにおいて携帯電話が急速に普及するなかで、それが人びとの送金手段や求職の機会をひろげ、都市世界と農村世界をリアルタイムで直結する役割を果たしている状況を描き出している。人、モノ、情報が地域を超え、新たな価値観との出会いが増えている同時代のアフリカにおいて、何が変わり、何が変わっていないのか、具体的な事例から検討することができるだろう。

各部の終わりにはコラムが設けられているほか、巻末には「アフリカ社会を学ぶ人のための国別データシート」「アフリカ社会を学ぶ人のための必読文献リスト」が収録されている。文献リストで取り上げられているものの多くは邦文であるため、読者にとって手にとりやすいだろう。また、読者は、本書を通して自らのアフリカに対するまなざし、そして自らの暮らす社会を見つめなおすことになるだろう。

(よしだ さゆり)

ジェイコブ・J・アコル 著、小馬徹 訳
『ライオンの咆哮のとどろく夜の炉辺で
—南スーダン、ディンカの昔話』
青娥書房、2010 年、191 ページ、1500 円＋税

吉田早悠里
名古屋大学高等研究院



本書は、南スーダンのディンカに生まれた著者が、子どものころに村で聞いた神話と民話をおさめたものである。2011 年 7 月にアフリカ大陸の 54 番目の国家として独立した南スーダン。しかし、現在も治安は安定せず、各地で戦闘が続く、避難民が出ている状況にある。著者は、難民キャンプを転々としながら教育を受け、大学に進学して学位を取得した。その後、ジャーナリスト兼援助団体職員としてアフリカ各地をめぐった経験を持つ。

物語の舞台となるディンカの土地は、白ナイルが流れ、緩やかに北へと傾斜する南スーダンの大盆地に位置している。牛の民であるディンカは、その土地に広

範囲に分散して居住している。男たちは成人式で自らと同じ名を持つ牛を得て、詩を朗読し、牛の角を模してダンスを踊り、牛を愛おしむ。人々はいかなる場合においても牧畜を行うことに愛着を抱いており、雨季と乾季にあわせて永続的な居住地と川岸の放牧地の間を行き来して生活している。

本書には、15 の物語がおさめられている。冒頭におさめられている「氏族はどのように名前を得たか」は、ディンカの始原の物語である。もともとディンカは川の水の下に住んでいた。水の下は、病氣も死もないが、人口が増加しすぎて窮屈になってきた。そこで、漁槍の長ロンガール・ジェルが、陸地に住めないかどうかを

調べに出かけた。漁槍の長は、聖なる槍を持つ司祭である。ロンガールは、陸地は獣がいて病氣と死が存在する危険な土地であるため、人間は陸に住むことはできないことを人々に伝えた。しかし、人々はロンガールを殺してでも陸地へ出ることを選んだ。人々はロンガールを出し抜き、陸地へあがったが、その代償として永遠に水の下では生きることができなくなった。そして、陸地でさまざまな出来事に直面することになった。そこで、人々は身を守るために、それ以前から陸地に棲んでいたほかの動物たちに保護を求めた。これによって、それぞれの氏族が特定の動物や木々、草や昆虫と関係を形成することになったのである。

それに続く物語では、ディンカがどのように牛を手に入れたのか、踊りに欠かすことができない太鼓をどのように手に入れたのかといった、ディンカの生活に即した物語が並べられている。また、本書におさめられた物語には、牛、ライオン、狐、ハイエナ、ゾウ、カバ、鳩、駝鳥など、多くの動物が登場する。特に、聖なる槍を求めて手負いのライオンに挑む青年の話である「ライオンのジェルベック」や、正直者で心優しい

娘と対照的な性格の姉が登場する「アチェンガーくディトゥとアチェンガーくティー」では、ディンカ、ライオン、角のない牛の関係が興味深い。このふたつの物語では、ライオンが人間や角のない牛に姿を変えたり、ディンカがライオンに姿を変え、再び人間に戻ったりする。ここからは、自然とディンカの人々の暮らしがとても親密な関係にあることが読み取れる。このほか、年長者の知恵を伝える話など、訓戒的な物語もおさめられている。

本書は、読み物としても楽しめるだけでなく、物語に描かれる神、人間、動物、そして人々の氏族の関係から、ディンカの世界観や社会組織を垣間見ることのできるものとなっている。また、本書を片手に、ディンカに関する民族誌を手にとってみることも良いだろう。ディンカの暮らしぶりや社会、宗教を知ることによって、物語に登場する人物や動物たちの鼓動をより一層感じとることができるはずである。本書が読者の想像力を掻き立て、ディンカの豊かな世界へ誘ってくれることは間違いない。

(よしだ さゆり)

吉田早悠里 著

『誰が差別をつくるのか
—エチオピアに生きるカファとマンジョの関係誌』
春風社 2014年、371ページ、5000円＋税

伊藤義将

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



本書は、エチオピア南西部に生活するオモ系言語を母語とする民族カファと、同じくオモ系の言語を母語とする民族マンジョの間に生じる「差別」の実相を描いたものである。「差別」とは「あるものを正当な理由なしに他よりも低く扱ったり、劣ったものとして不当に扱うことである。たとえば、社会的に排除したり、不平等、不利益な取り扱いをすることである」(本書23ページ)。本書で焦点が当てられるマンジョとは、カファが多く暮らすエチオピア南部諸民族州カファ地方を

中心に居住する人々である。本書によると、「マンジョはかつて狩猟を主な生業とし、共住する人々とは異なるアイデンティティを有し、差異化されている」(本書33ページ)という。

まず第1章で著者は、ボツワナに暮らすサンが「先住民」という輸入された概念を利用して、自らの「先住民性」を主張した例などを取り上げる。そこから社会で生じている現象は、その性質よりもその現象に付与された概念によって決定付けられると主張する。カ

ファとマンジョの関係についても1990年代に研究者が「差別」という言葉を彼らの関係に当てはめるようになってから、より「差別」を帯びた関係へと変容していったという仮説を提示する。第2章で調査対象地域であるエチオピア南西部のカファ地方の概要を説明したのち、第3章で、カファがマンジョを差別するという構図が生成されてきた歴史を、聞き取り調査と文献調査から明らかにする。ここでは、政権交代や政策の変化によって忌避関係であったカファとマンジョの関係が、少しずつ「差別」を帯びるようになり、次第に固定されたものへと変容していく様子を描く。

第4章で、マンジョが居住する二つの村を取り上げ、より具体的にマンジョの生活を描く。ここで、地理的な条件や学校教育へのアクセスの容易さなどがマンジョの生活を変容させている側面を浮き彫りにし、第5章で、カファとマンジョの間に生じるトラブルのすべてが、「差別」という概念に集約されてしまう具体的な事例を提示する。例えば、カファの共同労働にマンジョは参加するが、マンジョの共同労働にカファは参加しない事例、レストランでマンジョが使用する座席と食器はカファが使用するものと分けられている事例、マンジョの子供がカファの子供から学校で同じ机を使うことを拒否される事例などである。これらの事例を、忌避関係や区別と捉えることも可能であるにもかかわらず、海外の研究者やNGO職員などによって「差別」と一括りにされ、カファとマンジョの関係をより複雑にしている点が第5章では強調される。

第6章は、近年のマンジョのプロテスタント諸派への改宗過程とその背景を明らかにする。社会主義政権時代にカファとマンジョはエチオピア正教への改宗を迫られたという。しかしマンジョは、カファから教会で同じ椅子に座ることを拒否されたり、食物禁忌などのエチオピア正教の教えになじむことができなかったりして、多くのマンジョが改宗に成功することはなかったという。それがまた、カファがマンジョを「異なる他者」と見なすことに拍車をかけたと著者は分析する。そして、このような苦い経験と社会状況が、日常

の実践において人々を平等に扱うプロテスタントへの改宗にマンジョを駆り立てたと著者は主張する。

第7章で、カファとの対等な政治活動への参加を求めたマンジョの請願活動の一部始終を描写したのちに、第8章で請願が認められなかったことを契機として生じたマンジョによるカファ襲撃事件の実態を明らかにする。著者によると襲撃事件を契機に、NGOや南部諸民族州政府はマンジョを被差別民族と認識し、マンジョに対する支援やアフーマティブ・アクションを活性化させた。そのような活動が皮肉なことに、カファとマンジョの関係を悪化させていると著者は述べる。

第9章で、各章の主張を簡潔にまとめたのち、著者は第10章で、エチオピア帝国に併合される以前のカファとマンジョの忌避関係は、空間、自然資源などの争奪が生じないような適度な距離感を生じさせる共生の文化的装置だったと分析する。しかし、エチオピア帝国編入後のカファとマンジョの関係は、社会、政治、経済的資源を奪い合う関係へと変化し、結果として欧米の研究者、NGO、行政が「差別」と認識するカファとマンジョの関係が生じたと著者は分析している。更に、「差別」を是正しようとする外部アクターの取り組みが、カファとマンジョの関係をより一層深刻なものにしていると主張する。

聞き取り調査と文献調査から、カファとマンジョの関係の歴史をエチオピア中央政府の動きと関連づけて丁寧に再構成し、現在のカファとマンジョの関係を当事者の何気ない日常会話に立ち現れる言動やインタビュー調査から描き出している点で、本書はカファとマンジョの間に生じる「差別」の実相を明らかにすることに成功している。本書は、エチオピア南西部における民族誌という位置づけであるものの、単なる民族誌として読まれてしまうのは残念である。ヘイトスピーチが横行する現在の日本社会において、本書は日本における「差別」についても考えさせられる。エチオピア研究者や文化人類学者に限らず、差別を考える契機として幅広い人々に手にとって欲しい一冊である。

(いとう よしまさ)

高倉浩樹・曾我亨 著
『シベリアとアフリカの遊牧民
—極北と砂漠で家畜とともに暮らす—』

東北大学出版会 2011 年、205 ページ、2700 円＋税

泉直亮

京都大学アフリカ地域研究資料センター



本書は、2008 年に実施された東北大学東北アジア研究センターでの公開講演「シベリア アフリカトナカイとラクダの遊牧民」の記録を中心に編集されている。その講演でシベリアとアフリカにおけるそれぞれの人類的調査の成果を発表した高倉氏と曾我氏が共著で、一般・入門者向けに本書を記した。本書はふたりの発表と「総合討論」を収録している。さらに、本書の出版にあたって、巻頭の「まえがき」が高倉氏に、また巻末の「希望としての生業」が曾我氏によって加筆された。

「まえがき」は、「わかりやすくいさぎよい民族誌」という本書の目的を示している。本書は人類学や民族誌の基礎に立ち返って、民族誌の事実それ自体によって他者や他地域を理解すること、あるいは人類学者の調査地について幅広い読者（聴衆）に説明することを目的としている。一般向けの公開講演や書物は、この目的を達成するための適切な機会であるという。

講演の第一部は、曾我氏による「ラクダ牧畜民ガブラの生業文化と社会」、そして第二部は、高倉氏による「トナカイ牧畜民エヴェンの生業文化と技術」である。両者はともに、アフリカとシベリアの自然環境や地勢、牧畜文化といった地域の概要を記述し、それぞれの具体的な現地調査の内容にアプローチしていく。そして、ガブラとエヴェンの人びとが、砂漠や極北という厳しい自然環境のなかで、家畜に依存しながらどのように生計を営み、社会や文化を形成しているのかを説明する。また最後には、国家のなかで地理的にも政治的にも周辺に位置する牧畜民が、現代国家との関係のなかで直面している苦境について述べている。両著者の発表の構成は以上のように統一されているが、他方でそれぞれの調査地の特質が強調されてもいる。たとえば

曾我氏は、ガブラ社会で普及しているラクダの信託制度が人びとの社会関係を形成し、リスクを分散する機能をもつことを示した。また高倉氏は、多種の家畜を飼養する熱帯の牧畜社会と比較しながら、シベリアでは人びとがトナカイという一種の家畜を食糧・移動手段・物質文化と多様に利用していることを、指摘している。

総合討論は、高倉氏、曾我氏、そして司会の瀬川氏による鼎談形式でおこなわれた。討論のテーマは、聴衆からの質問を中心にして構成されており、シベリアと東アフリカの事例を比較しながら議論されている。また巻末の「希望としての生業」では曾我氏は、「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」に関わる生業活動としての牧畜に牧畜社会の希望を見出し、講演会を補足している。そして、「先住民」の概念の再定義をめざす高倉氏の試みなどを例にとりながら、現地の事情に精通した人類学者がグローバルな言説に働きかけることで地域社会に貢献できる可能性を提示している。

先述したとおり本書は、一般・入門者向けの書物であり、専門的な用語や議論などの予備知識がなくても読み進められる。そのため人類学や民族誌、あるいは牧畜民の暮らしに関心をもつ幅広い読者に本書を読んでもらいたい。それと同時に、人類学者を中心とするさまざまな分野の研究者にも、ぜひ本書を勧めたい。近年では研究成果を社会に還元することが強く求められており、市民講座などで研究成果を発表する機会が増えている。そのような研究者にとって本書は、予備知識のない聴衆や読者に対して自分の研究内容を的確に伝える工夫を学び、研究の社会的な意義を考え直すよい機会になるだろう。

「アルプスの少女ハイジ」や「シベリア寒気団」とい

った一般に馴染み深いことがらに触れながら読者を研究内容に引き込み、平易なことばでそれを解説する両著者の手法は見事である。また、国家のなかで周辺化された牧畜民たちが抱える問題点、そして研究者としてその問題の解決をめざす方策を示すことで、問題意識や研究の意義を広く社会と共有しようと試みている。

さらに、本書がシベリアとアフリカというふたつの地域を比較していることも、広く一般的な問題関心について議論する機会を提供している。以上のように、本書は一般読者にとっても研究者にとっても価値の高い一冊である。

(いずみ なおあき)

石山俊・縄田浩志 編

『アラブのなりわい生態系2 ナツメヤシ』

臨川書店 2013 年、315 ページ、3600 円＋税



高村美也子

国立民族学博物館

本書は、中東の乾燥地で育まれてきた在来知の研究を基盤として、乾燥地の未来を考えることを目的とした、総合地球環境学研究所プロジェクト『アラブ社会におけるなりわい生態系の研究 ―ポスト石油時代に向けて』の研究成果を示すシリーズの一冊である。第二巻の本書は、ナツメヤシに焦点を当てている。本書の著者は、文化人類学、エジプト学、考古学、地理学、植物学、歴史学、生態学など、各分野を代表する研究者である。このような様々な分野の叢智を結集して、オアシスと人間の関係の全体像をナツメヤシを軸として描き出そうとしている。

本書は、序章、終章と8章の合計10章から構成されている。第1章から第4章までは、ナツメヤシの歴史的、文化的側面に焦点が当てられている。ここでは、ナツメヤシが乾燥地域にとっていかに重要な樹木であるかを歴史的資料をもとに明らかにしている。第5章からは、現在のオアシス、灌漑、なりわいの現状と問題について述べている。本書の視点は、ナツメヤシにおける①植物学・栽培品種、②考古学・歴史学、③宗教学・イスラーム、④灌漑研究、⑤ナツメヤシ利用の文化、の5つに大別できる。

1点目の植物学的視点では、ナツメヤシの植物学的特徴とその多様性が述べられている。まず第1章にて

ナツメヤシの特徴、分布が紹介されている。ナツメヤシは、北アフリカからアラビア半島、西アジアの沿岸部の乾燥地に広く分布している。ナツメヤシの栽培種類とその多様性については第6章で述べられている。現在、アルジェリアには940品種のナツメヤシがあるとされ、地域、農家とその品種の関係が詳細に示されている。

2点目の考古学・歴史学の視点では、ナツメヤシの栽培化が扱われている。第1章では、土器、ハンムラビ法典、シュメール語、マリ王宮の壁画などの考古学的資料や歴史学的資料から、紀元前3000年にはナツメヤシが栽培されていたことを解明している。また、第2章では、古代エジプトの建築文化において、ナツメヤシのモチーフが家具や建物の装飾に用いられていたことを論じている。

ナツメヤシの歴代の利用については、紀元前後と、11世紀から19世紀までの文献資料から明らかにされている。例えば、第3章では、紀元元年ころにギリシアの医者が記した「薬物誌」は、ローマ帝国東地域においてナツメヤシの実であるデーツが食品でもあり薬品でもあったことを示している。16世紀ころエジプトに滞在したヨーロッパ人の医師による記録は、ナツメヤシの木の各部位が住宅材料、日常雑貨に加工され利用

されていたこと、デーツが腹部や消化器系、口腔系の薬として利用されていたことを証明している。

3点目の宗教の視点では、ナツメヤシとイスラームの関わりについて明らかにしている。第4章に、聖典クルアーン（コーラン）及びハディース（預言者ムハンマドの言行を記録したもの）とナツメヤシとの関わりについて記載されている。例えば、クルアーンでは、アッラーの「善い言葉」がナツメヤシの木に喩えられている。

4点目のナツメヤシの灌漑に関しては、第5章を中心に灌漑技術の現状が詳述されている。そこでは、古代から利用されてきた地下水路の技術を詳細に解明し、その起源を追っている。そして、第7章では、灌漑技術が伝統的システムから近代的システムへと変化した現状が提示されている。そのうえで、伝統的灌漑システムで行われていた共同労働が、社会紐帯の維持および補強と灌漑技術継承の点で重要であることを再検討し、伝統的灌漑システムを再評価している。

5点目のナツメヤシ文化については、主に第8章にて、5000年続いてきたナツメヤシ利用の現在の状況が論じられている。従来、ナツメヤシの木の各部位は、長年にわたり生活の様々な場面で利用されてきたにもかかわらず、現在、日常生活に使われなくなっている

ことを指摘している。他方で、ナツメヤシ利用は観光および経済の点で見直され、現在、観光資源としてナツメヤシ利用の復興がはじめられている。

本書が取り上げているナツメヤシを含む多くのヤシ科植物は、赤道を中心とした幅広い地域で利用されている。紹介者は、これまで東アフリカ沿岸部におけるヤシ科植物ココヤシの利用について研究を行ってきた。そこでは、ココヤシが人々の生活に密着し、家屋、飲食、宗教、経済と幅広い側面で重要な意味をなしていることが明らかになっている。ココヤシと、本書で扱われているナツメヤシを含むヤシ科植物が、長年にわたり、それぞれの地域に暮らす人々の生活と密接な関係にあることがうかがえる。

現在、ヤシ科植物は、種類や地域にもよるが、工業製品の普及によっておおむね利用が衰退している。本書は、古より続いてきたナツメヤシ利用が衰退傾向にある一方で、ナツメヤシ利用の価値を再検討することが、生産地域の未来を導く方法の一つであることを論じている。アラブ社会のナツメヤシ利用の価値の見直しのみならず、ヤシ科植物利用全体の再評価を促す一冊となっている。

（たかむら みやこ）

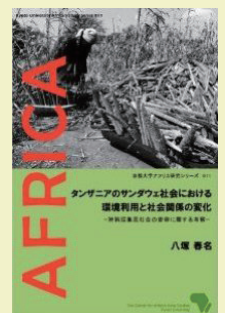
八塚春名 著

『タンザニアのサンダウェ社会における環境利用と社会関係の変化 —狩猟採集民社会の変容に関する考察』

松香堂 2012年、249ページ、2400円＋税

角田さら麻

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



本書は、タンザニア中部の半乾燥地域に居住する狩猟採集民サンダウェに注目し、狩猟採集をおこなうことで生計を維持していた120年前と現在の彼らの生活を比較して、狩猟採集民社会の変容について考察している。サンダウェはクリック音を特徴とする言語を話したり、居住地に多くの壁画を残したりしていること

から、同じくタンザニアに居住するハツァや南部アフリカのサンとともに「未開狩猟部族」というイメージを抱かれてきた。

本書の著者は、アフリカ地域研究をはじめた当初、自然と強い結びつきをもちながら生活する狩猟採集民、サンダウェの動物観を調査することを目的としていた。

その思いを胸に、著者はタンザニア内陸部に位置するサンダウエの集落に赴いた。現地で著者は、彼らの生業体系が、先行研究で描かれてきた狩猟採集ではなく、農耕を基軸としたものに変化しており、当初予定していた動物観をテーマとした調査から変更をせざるを得ない状況に直面した。このようなことから本書は、(1) サンダウエの居住地域の生態環境の特殊性、(2) 彼らの環境に対する認識と利用の実態、そして (3) 環境利用にともなう社会関係という 3 点から、農耕に軸足を置いて生活をするサンダウエの現在をあきらかにすることで、サンダウエ社会の変容を検討する。

本書の構成は以下のとおりである。

第 1 章 序論

第 2 章 サンダウエの歴史的背景

第 3 章 現代サンダウエの生活背景

第 4 章 サンダウエの自然とのつながり

第 5 章 移住史と現在の土地利用の関係

第 6 章 ニセゴマがつなぐ社会

第 7 章 農地拡大と社会関係の変化

第 8 章 結論

サンダウエの生業活動について、近年の研究のほとんどは「かつては狩猟採集民であった」と記述するだけであり、現在のサンダウエの生業活動に注目することはなかった。このことから、第 1 章で著者はサンダウエについて研究がなされなかった要因は、彼らの農耕への高い依存であると考え、サンダウエ社会における農耕の位置づけと現代のサンダウエ社会をあきらかにする意義を提示している。

第 2 章では、サンダウエの歴史を述べたのちに、先行研究のなかでサンダウエが近隣民族や研究者らから、言語や肌色の違いを理由に差別的に扱われてきたことを指摘している。著者は、他者によるサンダウエのイメージの形成が、彼ら自身のアイデンティティ形成の過程で、生業や社会関係に多少なりとも影響したと考え、次章からこれらを具体的に検証していく。第 3 章では、現在のサンダウエが主食の 9 割、副食の 7 割以上を農作物から得ている、という著者の調査結果から、著者はサンダウエが農耕を中心とした複合的な生業活動のなかに狩猟採集を組み込んでいることを示している。

第 4 章では、調査村内及び周辺地域において、サン

ダウエが異なる地名を与えたそれぞれの場所の土壌と植生を分析し、サンダウエの環境認識と環境利用を明らかにしている。例えば、サンダウエがナチャと呼ぶ透水性の高い土地には、人びとが乾燥に強いと認識しているトウジンビエを植えている。また、その土地の植生に基づいて名前が付けられている場合もある。バオバブやアカシア属の植物が多く生育する土地は「ハツツア」「トン」などと呼ばれ、ハチミツ採集に適していると認識されている。

第 5 章では、調査村における人びとの土地利用について、1970 年代にタンザニア全土で実施された集住化政策前後の変化に着目し、現在のサンダウエの土地利用は社会関係に基づいた秩序のもとで成り立っていることをあきらかにしている。散在していたいくつもの村の農民を一度に集住化させた政策は、幹線道路沿いに人口を集中させ、一つの村にいくつものクランを混在させた。集住化以前のサンダウエ社会では、土地の境界線や所有権は曖昧で、人びとは土地の開拓について、「どこにでも開ける」と表現した。けれども、集住化政策によって人口が過密化したサンダウエの居住地では、新たに耕作地を開拓する際、クランやリネージの親族関係が土地利用に反映されて、秩序だった土地利用があることを明らかにしている。

第 6 章では、サンダウエの重要な食材である、ゴマ科の一年生草本ニセゴマ (*Ceratotheca sesamoides*) に着目し、ニセゴマの利用を介して形成・維持されている社会関係があることを指摘している。またニセゴマが社会的に重要な意味をもちつつも、誰しもが容易に入手できる「半栽培」の状態であることを明らかにしている。耕作時の雑草として生えるニセゴマは、食糧が不足しがちな乾期に他者へ要求すれば気軽に提供される。サンダウエ社会にはニセゴマに限らず、気軽な授受をおこなうテレ・クワ・テレという交換システムが根付いている。等量の物々交換を意味するテレ・クワ・テレは、ニセゴマに限らず、2 つの異なる穀類の交換につかわれる。単身で居住している高齢者は、特にニセゴマを他の穀類と頻繁に交換しており、半栽培の状態にあるからこそ、ニセゴマはどの世帯にも入手可能であると論じている。

第 7 章は、換金作物栽培が普及するさなか、サンダ

ウェの人びとが「よりよい」土地と表現する、肥沃で長期連作が可能な広大な土地をもとめて、人びとが農地を拡大していく様子を描いている。農地を拡大する開拓者・土地の保有者などのアクターの影響を受けて、サンダウェの人々が土地に「資源」という価値をみいだしていると著者は指摘している。そして、若者による共同畑の運営によって賃金労働が浸透しはじめるなど、新たな社会関係が創出されていると論じている。

終章では、これまでの章を総合的に考察し、サンダウェが1970年代に経験した社会的変化が、今日にみられるサンダウェの循環的な環境利用システムを生みだし地域を支えていると指摘している。そしてグローバルな「先住民」像から除外されたことと関連づけて、サンダウェが他の狩猟採集民にはない、農耕を基盤とした生業に移行したとしている。

本書は、これまでおこなわれてきた多くのアフリカ狩猟採集民研究のように、狩猟採集活動のみに注目せず、自然環境の利用と認識をあきらかにすることで、現代の狩猟採集民社会における農耕の重要性を導きだした。また、いわゆるアフリカの「先住民」としてあつかわれなかったことで、行政の政策がさほど行き届かず、サンダウェの人びとが独自の生業体系を築いてきたことを著者は指摘している。著者が言うようにサンダウェ社会が行政から「放ったらかし」状態にあったからこそ、社会的変化に対する彼らの柔軟な対応が実現されたのだった。アフリカ地域に限らず、現代の「先住民」像をみなおすうえでも、参考にすべき一冊である。

(つのだ さらま)

伊藤義将 著

『コーヒーの森の民族生態誌
—エチオピア南西部高地森林域における人と自然の関係』
松香堂 2012年、129ページ、1800円＋税

石原 美奈子
南山大学人文学部



エチオピアに残存する森林の大半は南西部にある。本書は、コーヒーの起源地であるとともに、コーヒーが自生するエチオピア南西部の山地林に住む人々がどのように住んでいる環境に制限されながらもそれを利用しながら生活しているのか、について解き明かした民族誌である。森林保全は、開発援助の世界に限らず国際的に通用する道理として、その正しさに疑義をはさむ者はあまりいない。ただ森林保全を、単に、森林環境への人的介入、すなわち「人為的攪乱」の制限という形で、進めるべきなのかどうかについては議論すべきとされてきた。すなわち「人為的攪乱」は、必ずしも生態環境のバランスを破壊するものではなく、むしろ一定程度の介入は逆に森林の保全につながるものであるとする立場である。本研究が取り組んでいるの

は、コーヒー自生地に住む人々の森林環境への介入の仕方を詳しく描き出すことである。コーヒー自生地に住む人々が、森林のもつ特有の環境に制限を受けながらも、森林の生み出す恵みを資源として活用している状況が、本書のなかで生き生きと描き出されているのである。

本書の構成は以下の通りである。

- 第一章 はじめに
- 第二章 調査地の背景
- 第三章 ゲラ行政郡の歴史とコーヒーの森の変遷
- 第四章 コーヒーの森の利用—ハチミツとコラリマの採集—
- 第五章 コーヒーの森の利用—コーヒー・チェリーの採集活動—

第六章 コーヒーの森における人為的攪乱と植生の遷移

なかでも著者の調査成果が反映されているのが第四章～第六章である。ここで著者はコーヒーが自生する森（以下、コーヒーの森）に、コーヒーの木だけでなく、多種の樹木や植物が自生している点に着目し、住民がそれらをどのように利用しながら現金収入源としているのかについて描き出している。住民の現金収入源となっているのは、コーヒー以外では、コラリマと呼ばれるショウガ科の植物がある。またこの地域は高品質のハチミツがとれることで知られているが、住民はコーヒーの森をハチミツの採集にも利用している。

第四章では、住民がどのようにハチミツとコラリマを採集しているのかについて詳述している。調査地では、ハチミツは蜂の巣筒を樹上に仕掛けることで採集される。蜂の巣筒を誰がどのような材料で作ри、いつどこにどのように仕掛けるのか。そしてそのハチミツがどのようなもので、森の所有者・蜂の巣筒の作り手・仕掛ける者等の間でどのように分配されるのか。森の中にランダムに仕掛けられているかのようにみえる蜂の巣筒だが、本章は、そこに細かな決まり事があることを明らかにしている。それに対し、森のなかに自生するコラリマは、そのような採集・分配に関する決まり事はなく、採集した者が所有することができる。

第五章では、コーヒー・チェリーを採集する人々がどのような人々で、どのように採集・分配を行っているのかについて詳述している。コーヒー・チェリーの採集は、コーヒーの森の所有者・その家族・親戚・友人・知人および親戚関係をもたずゲラ行政郡内外から採集時期になるとやってくる「サラテニア」によって行われる。これらの人々がどのようにコーヒーの森に滞在しながらコーヒーを採集し、コーヒーがどのようにこれらの人々の間で分配され、どれくらいの現金収

入となるのかについての描写は具体的で興味深い。

第六章では、コーヒーの森のうち「バッド」（過去8年間人為的攪乱のない場所）と「カンニ」（過去8年間毎年採集・伐採などが実施されている場所）にそれぞれ調査区を設けてそこにみられる樹木の種類とその経年変化について調べている。その結果、ハチミツ採集などの目的で樹木を伐採したり、コーヒーの採集に欠かせない「チル」と呼ばれる下草刈りをするなどの「人為的攪乱」がコーヒーの木の繁茂に好適な条件となっていることが明らかになった。

評者も著者の調査地であるジンマ県ゲラ行政郡に広がる森に何度か足を運んだことがあるが、無秩序に自生しているかに見えるその森に所有権や利用に関する決まり事があることを実証的に解き明かしてくれる本書を高く評価している。ただ、そもそもその所有権がどのような根拠に基づいて主張されるものであるのか、またコーヒーの木が自生していない森の部分についてはそのような所有権の適用がないのか、などについては疑問が残る。とくに最近政府が、森林保全の事業を推進しながら、同じ地域で道路開通などの開発事業を展開している現状をみると、森林を破壊する「人為的攪乱」の主体は住民でなくなっているともいえる。コーヒーの森以外での森林破壊は、現金収入源の奪取につながらないとして正当化されるかもしれない。だが森林保全という大義名分は反故にされたことになる。本書のように、森林と人の関係性を明らかにする民族誌は、「森林保全」や「開発」といった、政府や援助機関が掲げる大義名分を相対化するうえで重要であり、今後もこうしたトップダウンの政策・事業を住民の視点から批判的に再検討を迫る民族誌が蓄積されることは大いに期待される。

（いしはら みなこ）

遠藤保子・相原進・高橋京子 編著
『無形文化財の伝承・記録・教育
—アフリカの舞踊を事例として—』
文理閣 2014 年、227 ページ、2500 円＋税

川瀬 慈
国立民族学博物館



アフリカの多くの地域社会において、舞踊は社会的・宗教的な機能を持ち、日常生活のさまざまな局面と密接に結びついている。また、国立の民族舞踊団のように、時の政権や政策と歩みをともにしつつ、国民の愛国心を助長させ、結束を固めるために舞踊が政治的に利用される事例も各地で見うけられる。

アフリカの舞踊の研究事例を軸に、無形文化の伝承、記録、教育に関する考察を行う本著は、アフリカを対象にした舞踊研究が国内において非常に少ない状況を踏まえると、たいへん貴重な一冊といえる。本著の第2章や第3章では、ナイジェリアやガーナの舞踊の「モーションキャプチャ」によるデジタル記録・解析の報告がされる。動画を用いた無形文化の記録と保護は、私が専門とする映像人類学の分野でも主要な課題となっている。芸やワザの再現という観点からは、身体の微細な動きを捉え、さらには360度、どのアングルからでも動作の再現を可能にさせるこのモーションキャプチャという記録方法は、大変有効な手法となるであろう。将来、なんらかの理由でこれらの舞踊の再現が必要とされる場合、踊り手にどのように参照され、さらにそれは現地の社会において、あるいはアフリカから遠く離れた場でどのような意味を持ちうるのだろうか。興味は尽きない。

第3章、第4章では、エチオプス・アート日本委員会という組織をたちあげ、日本国内において、エチオピア、ケニア、タンザニア、ガーナの民族舞踊公演を実施した著者の経験が振り返られる。これらの公演は、アフリカの文化的多様性の紹介、国際文化交流や相互理解、さらには舞踊の新たな隆盛への貢献が目的としてあったことが挙げられている。本著も指摘するように、今日は我が国の景気後退にともなう財政難のため、

公演助成をかつてのように多く受けにくい現状にある。しかしながら本著の、アフリカの舞踊団を招聘する当事者として、その目的、意義、具体的な演目のリストやそれらのプレゼンテーションにおける工夫についての詳細な記述は、今後同様の企画を構想する者にとっては、大きな参考になるであろう。さらに、公演をコーディネートする主催者としての葛藤が記述されている点も興味深い。本著では、エチオピアの民族舞踊公演において、多様な民族文化を有するエチオピアの舞踊が、高地文化を反映する演目に偏りがちになる点についての指摘がある。この傾向は確かに、エチオピア都市部のナイトクラブやホテルにおける民族舞踊ショーにおいても久しく顕著であった。これらの民族舞踊は直接的に地域社会において展開している民族の舞踊を表現しているとは限らない。それはトウザワジと呼ばれるプロの踊り子たちによる創意工夫、さらには、その舞踊を“消費する”聴衆のまなざしや期待のなかに顕現するハイブリッドな創造物なのである。

本著には他にも、舞踊を、異文化理解の教材として用いる際の報告（第7章）やガーナでの研究成果の公表、日本の舞踊紹介についての報告（補章）が含まれる。アフリカ舞踊を通してアフリカの社会や宗教さらにはコミュニケーションの動態について学ぶことは、言うまでもなく、我が国の無形文化の伝承と保存をめぐる課題について考える契機を与えうる。

以上より本著は、アフリカの舞踊の研究に興味を持つ者だけでなく、アフリカの舞踊団招聘や学校等での紹介を構想される方にとってもおすすめの一冊である。

（かわせ いつし）

石田憲 著

『ファシストの戦争 —世界史的文脈で読むエチオピア戦争—』

千倉書房 2011 年、270 ページ、3200 円＋税



石川博樹

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

石田憲氏は日本における戦間期イタリア政治外交史研究、ファシズム研究の第一人者である。本書は3章から構成されており、各章は1994年から2010年にかけて著者が執筆した第二次イタリア・エチオピア戦争に関する3本の論考が基になっている。

19世紀末にエチオピアとその植民地化を図るイタリアとの間に生じたアドワの戦いをはじめとする一連の戦いが生じた。これらを総称して第一次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。それに対して、1935年に始まり、1936年に終結したイタリア軍のエチオピア侵攻を第二次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。後者は最後の植民地獲得戦争、あるいは国際連盟が世界初の経済制裁を実施した戦争として知られている。そしてこの戦争はイタリアのファシストたちが主体的に戦いを主導し、勝利の実感を抱くことができた唯一の戦争であった。それとともにこの戦争はイタリアのファシストと反ファシスト双方にとって思想・運動・体制上の分水嶺となる重大な変化をもたらした。またこの戦争は国際的に大きな反響を呼び、世界史の転換点にもなっている。本書において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争をイタリアとエチオピアという二国間の問題に還元することなく、世界史的視座から分析し、「ファシストの戦争」として位置づけることを試みている。

権力奪取後、ムッソリーニはファシストたちの多様な志向性と行動を調整・利用・操作しながら自らの主導権を発揮していた。第1章「サブリーダーたちの戦争」において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争に従軍したサブリーダーを3つの類型に分け、それぞれの政治的行動、そして彼らに対してムッソリーニが行った調整について検討する。本章において、著者は第二次イタリア・エチオピア戦争を契機にファシズ

ム体制が本来の思想や政治的方向性よりも表層的な自己賛美を優先するように変質したこと、この戦争を通してムッソリーニが達成した独裁強化が、長期的には彼自身の転落とファシズム体制の崩壊を招いたことを指摘する。

第2章「幻の国際義勇軍」は、スペイン内戦のものに比べるとはるかに小さいものの、国際的な広がりを見せたエチオピアに対する国際義勇兵運動について分析を加える。本章において著者は、ファシストの戦争に対抗した国際義勇軍形成という視座からエチオピア戦争が与えた世界的な影響を俯瞰する。そうすることによって第二次イタリア・エチオピア戦争に対する国際的な抵抗運動の多様性を明らかにするとともに、ナチスドイツとの比較、あるいは第二次世界大戦における弱体ぶりがゆえに強調されてこなかったファシスト・イタリアの侵略性、人種主義的傾向という特徴を指摘する。さらに後発帝国主義国による最後の植民地獲得戦争という枠組みにとどまらない、抑圧された人々が解放へ向けて動き出した転機として、エチオピア戦争を措定することができると主張する。

相前後して開始された第二次イタリア・エチオピア戦争と日中戦争は、イタリアと日本が第二次世界大戦への道を決定的に歩み出す契機となった。第3章「文学から見た戦争：エチオピア戦争と日中戦争をめぐって」は、両国の文学者たちがこれらの戦争をどのように認識し、それらの認識がどのような意味を持っていたのかについて考察する。本章において著者は、両国の文学において、戦争を肯定する排外的ナショナリズムという共通性が見出せること、それとともに思想の連続性、および体制への批判・抵抗の有無において両者に相違があったことを明らかにする。さらに著者は、

第二次イタリア・エチオピア戦争が「ファシストの戦争」であったがゆえに、ファシスト体制への抵抗の新しい思想的基盤を提供する端緒ともなったと主張する。

このように本書はイタリア国内から国際社会へとフォーカスを移しつつ、歴史から比較へと対象の分析方法を変えていく。そうすることによって著者は世界史的視座から第二次イタリア・エチオピア戦争を多角的に分析し、この戦争の「ファシストの戦争」としての性格を浮かび上がらせることに成功した。従来語られてきた単純な独裁論や体制構造論とは一線を画す本書は、ファシズム研究、第二次イタリア・エチオピア戦争研究に重要な貢献をしたと言えよう。

本書においてエチオピアは舞台としては取り上げら

れるものの、エチオピア人が不在のまま議論が進められている。著者自身その問題を認識しており、「最大の被害者であるエチオピア人は中心におかれないうまま、各章の主要登場人物たちが自分たちの物語を一方的に形づくっていた」と述べている (p. 201)。

往々にして第二次イタリア・エチオピア戦争がエチオピア人不在のまま語られるという現実を、我々は直視し、その意味を深く考察すべきであろう。そしてそれをふまえたうえで、エチオピア人が果たした役割に十分光をあてつつ、この戦争を世界史的視座から論じることがエチオピア史研究者には求められているのではなかろうか。

(いしかわ ひろき)

会員の異動

■ 入会者

氏名	入会年	所属
青島 啓太	2014 年	芝浦工業大学工学部建築工学科
竹中 浩一	2014 年	独立行政法人国際農林水産業研究センター
野口 真理子	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
慶田 勝彦	2014 年	熊本大学文学部
Robel Haile Gebru	2014 年	大阪大学
江端 希之	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
Aklilu Habtu	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
飛内 悠子	2014 年	日本学術振興会 / 大阪大学
坂本 拓人	2014 年	日本学術振興会特別研究員 PD/ アジア経済研究所
吉野 宏志	2014 年	筑波大学大学院人文社会科学研究科
浅田 静香	2015 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
中澤 芽衣	2015 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

■ 退会者

氏名	退会年
関根 悠里	2014 年
藤山 辰次	2014 年
松村 圭一郎	2014 年
野木 將典	2014 年

編集後記

すでにお気づきかと思いますが、ニュースレターのデザインがこのたび一新されました。エチオピア研究者であり、過去に本ニュースレターに寄稿されたこともある山本雄大さんに今号よりデザイン編集をご担当いただくことになりました。皆さんの率直なご感想をお聞かせいただけると幸いです。

20号で紙版が終了し、21号より電子版のみに切り替わりました。そのためではとくにないかもしれませんが、21号で60頁をこえる長さとなり、この22号はそれをさらに上回るものとなりました。大会シンポジウム報告（発表者全員よりご報告いただきました）やフィールド通信（4名もの会員よりご寄稿いただきました）の充実が大きかったことはたしかですが、ほかにも村橋会員より詳細なリポートをいただきました。また昨年の学術大会で新設された最優秀発表賞の受賞者に発表の概要を報告いただくコーナーも今回作りました。従来の新刊紹介と区別して書評も設けてみました。ご寄稿いただいた方々に改めてお礼申し上げるしだいです。

編集サイドでは、以前同様、各編集委員が迅速に作業にあたってくれており、頭が下がる思いです。それでも、扱う原稿の増加に伴い、編集作業も増えつつあるのもまた事実で、その状況に対応するため、今号より吉田早悠里会員に新たに編集委員に加わってもらいました。すでに貴重な戦力として活躍してくれています。

前号は昨年5月15日の発行で、今号はそれより一ヶ月発行日を早めることがどうにかできました。とはいえ、やはり年度内発行をはたすことはできませんでした。次号では内容のいっそうの充実をはかるとともにこの点も何とか達成したいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

藤本武

JANES ニュースレター 22号

2015年4月15日発行

編集・発行：日本ナイル・エチオピア学会

編集委員：藤本 武（代表）、伊藤義将、増田 研、村橋 勲、吉田早悠里

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662 E-mail: janes2@nacos.com

JANES